
I Sーインフィニットストラトスー黒き帝?

yuuki9901

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISーインフィニットストラトスー黒き帝？

【Nコード】

N7342S

【作者名】

yuki9901

【あらすじ】

ISーインフィニット・ストラトスー、女性しか使えないはずの物が使用できる男がもう一人いた。
これはそんなもう一人のお話である。

〔第一話 **O b s e r v e ・ B l a c k**〕 (前書き)

はじめまして。

y u k i 9 9 0 1 と申します。

気がついたら書き始めてましたw

更新は遅いと思いますが、よければお読みください。

〔第一話 **Observe・Black**〕

〔第一話 Observe・Black〕

燃え上がる車を僕は見ている事しか出来なかった。

運転席と助手席は跡形もなく潰れ、後部座席も煌々と炎を上げている。

その景色は鮮明に覚えている。

姉さんを腕に抱き立ち尽くす僕に姉さんはこう言った。

「もう大丈夫だよ。」

それ以降は霞が掛かったように曖昧だ。

時間がどの位流れたかも定かではない。

ただ、一つその中でも正確に覚えているのは血の付いた白衣に顔。優しげでホッとした様な彼女の顔だった…。

三年後―

「ここがIS学園。」

正門の前に立つ1人の青年。

初夏の風に吹かれて乱れた柔らかな黒髪をかきあげ整える。

顔立ちは整っており、9段階評価なら上の下と言ったところだろうか。優しさを称えるかのような目。

右目には泣きボクロがある。

それを覆い隠すように黒いアルミフレームの眼鏡をかけている。

入学手続きは完了しているがとある理由により、通学は2ヶ月以上先延ばしになった。

理由は簡単、身元の引受人の件でおおもめし退院の日程をずらさざる負えなくなったのだ。

結局、担当医が身元を引き受けるという事で落ち着いたのだ。彼が男であるが為に入学事態が現在伏せられたままである。それもそのはずである。

インフィニットストラトス、通称ISは女性にのみ扱える代物だったからだ。

だったとは現在、三名の男性が使用できるからだ。

1人目は織斑一夏。

2月頃から彼の名前はワイドショーや新聞を賑わせていた。

2人目はシャルル・デュノア。

今月初めに突然編入してきたらしい。

そして、3人目がこの青年である。

「あのー、神代彩芽君ですか？」
かみしろさいが

突然、名前を呼ばれ驚く青年は視線を空から地面に戻すと女性が立っていた。

体格に合わない大きな服を着たメガネの女性が。

「あ、はい、神代彩芽です。あの失礼ですが、貴女は？」

彩芽は最もな質問を投げかける。。

「あ、失礼しました。私は山田真耶と言います。あなたのクラスの副担任をしています。宜しくお願ひしますね。」

にこやかな笑顔で一礼する。

「あ、失礼しました。何かと御迷惑をお掛けすると思いますが、どうぞ、宜しくお願ひ致します。」

深々と頭を下げ、丁寧な挨拶をする彩芽。

お互いに頭を上げ、にっこりと微笑みあう。

「あのー、今日は随分と騒がしいみたいですが、何かあるんですか？」

学園は活気に溢れているようで遠くから喚声が聞こえてくる。

「はい、今日から学年別トーナメントなんです。学年別トーナ…す

「いません、電話が。」

話も途中に携帯を取り出し、着信の相手を確認し、片手を顔の前にごめんねと口を動かす。

「いえいえ、お気になさらず、どうぞ。」

着慣れないスーツの性だろうか息が少し詰まる感覚を覚える彩芽。ネクタイを少し緩める。

黒地に灰色のストライプが五月蠅くなく程よく流れている。

ワイシャツも薄めのグレーで統一されているがネクタイがだけ真っ赤とやたらと主張している。

なぜ真っ赤なのかと彩芽がこのスーツを贈った本人である主治医の深剣秋穂に訪ねたところ、ネクタイはインパクトのある方がいいからと胸を張って豪語していた。

そういえば、深剣先生は今、どうしているかを考える彩芽。

その頃、深剣は：

「はっくしよいつ！：誰か噂してるわね…。朱美ちゃん、次の患者さん呼んで。」

そんな事を言いながら黙々と診察をこなしていた。

「さあ、行きましようか。」

山田先生の電話が終わり、校内へ歩みを進める。

至る所で制服を着た生徒達が忙しなく準備を進めている。

もれなく、女性ばかりであるのは言うまでもないのだが…。

彩芽はある事に気がつく。

生徒達の着ている制服が微妙に違うのだ。スカートの丈はもちろん、袖の模様や肩にアクセントがあるものなどだ。

「あの、先生、こちらの学園は制服は細かいオーダーが可能なんですか？」

彩芽は一応質問してみた。

と言うのはこれと言った話題を見いだせずにいる事が原因であるのと、周りの視線である。

それは獲物を見定めるはんだ：いや、物珍しい物を見るかのようにである。

「はい、オーダー出来ますよ！希望があれば後で聞きますよ！今の所、オーダーした男子生徒は居ませんけどね。」

にこやかに笑いながら振り返る山田先生。

なんとも笑顔の似合う女性なんだろうと彩芽はひっそりと思う。

「さあ、着きましたよ！ここが学年別トーナメントの会場です。とは言っても彩芽君は観戦だけです、ISと言う物がどういう物か感じて頂けると思うのです！」

ガシッと彩芽の両手を掴み、ふくよかな胸に押し当てる。

「先生の考えは非常に感銘しましたが、胸が手に当たっていると云いますか、埋まっているのですが…。」

いつもの様に笑ってみせる彩芽。

「きゃああああ！あの、これは！そのですね！」

状況に気が付き取り乱す山田先生。

「先生、そんなに取り乱さなくても、なんとも思ってますんから。」

この神代彩芽と言う男、こういったうっかりラッキーには良く遭遇する為、耐性が着いている。

慣れとは恐ろしい物である。

「それはそれで、先生傷付くと言いますか…。」

最後の方は聞き取れないくらい小さな声だった。

「とりあえず、中に行きませんか？」

慰めるでもなく平然と次に話を進める彩芽であった。

建物の中に入り、歩くこと数分、一つの扉の前に立つ山田先生。

「さあ、ここですよ！」

IDカードをリーダーに通すとエアロックの開く音と共に扉が開く。中にはタイトスカートのスーツを着た女性が大型の空中投影スクリーンを真剣な顔をして見ている。

「只今、戻りました。織斑先生、連れてきました、神代彩芽君です。」

左の手のひらを天井に向ける。

「ご苦労様でした、山田先生。」

スクリーンから目線を外し、振り返る。

振り向き、彩芽を真っ直ぐ見つめる織斑先生。

「神代彩芽と申します。宜しくお願い致します。」

いつものようにゆっくりと頭を下げる。

「私が君の担任になる織斑千冬だ以後宜しく頼む。ところで、体調は大丈夫なのか？」

視線を外すことなく問いかける織斑先生に対し彩芽も視線を外すことなく答える。

「はい、問題ありません。体調も気力も十分です。明日から宜しくお願い致します。」

にっこりいつもの笑顔の彩芽。

「万全と言うならいいが、あまり無理をしてもらっても困る、身元引受人の女医さんからもさっき電話をもらったからな。そろそろ、第一回戦の抽選が終わる。今日はゆっくりしていくといい。」

再びスクリーンの方を向く。

彩芽もそのスクリーンに目を向ける。

その瞬間、抽選が終了し、第一試合のカードが表示される。

『織斑一夏・シャルルⅡデュノアVSラウラⅡボーデビツヒ・篠ノ乃箒』と。

「ほう：一回戦から面白い事になりそうだ。」

織斑先生はどこか楽しそうな声を出す。

「男子チーム対ドイツの代表候補生&全国大会優勝者チームですか、

なかなかいい試合になりそうですね。」

織斑先生の隣に立ち、スクリーンを見上げる。

「神代、よく調べているな。」

目線だけをこちらに向ける織斑先生。

「ええ、一応、クラスメートになる方々ですから。それに、時間はたっぷりありましたからね。」

彩芽は顔を織斑先生の方へ向け笑顔を見せる。

それから程なく、一回戦が開始する。

「神代。お前の経歴を見させてもらったぞ。一つ腑に落ちない。お前の姉のISのコアは破壊されたとなっていて、実際は破壊されていない。それにお前の身体だが：通常なら考えられない速度で回復している。どういう事だ？」

スクリーンから目を離す事なくこちらを見抜くような感覚を覚える彩芽。

「コアは破壊されていませんよ。身体の方はよくわからないと言うのが見解のようですよ。おっと、織斑君とデュノア君はいい連携をしますね。勉強になります。」

スクリーンの中で男子ーズが健闘している。

「一年近く、国が躍起になって探した物がまさか、ユーザーの弟に適応していたとは思わなかったとは、思えないんだがな。どんなからくりを使ったかは分からないが、大切にな：姉の形見なのだから。」

織斑先生の声が少し柔らかなものになる。

「はい、ありがとうございます。」

ゆっくりと頭を下げる彩芽。

その時、スクリーンに異常な物が現れる。

ボーデビツヒのISが黒い流体になり、本人を飲み込んでいく。

「あれはもしかすると雪片ではないですか？」

山田先生が手元のコンソールを操作しボーデビツヒだった物の手に握られている刀を拡大する。

「まさか、VTシステムが搭載されていたとはな……。神代、初日から厄介な事に巻き込まれたな。」

「いえいえ、こういうのは慣れていきますから。」

バタバタや面倒事には巻きこまれ慣れている彩芽はまたかと思うのだった。

それからなんとか事態は織斑一夏の活躍により無事に終わり事なきを得る。

「神代君、初日から大変でしたね。あ、この件は守秘義務がありますので他言無用です。もし、話してしまったら、何年か行動が制限される事になりますから、気をつけて下さいね。」

山田先生は忙しい中、正門まで念のためと彩芽を送り届ける。

「十分、気を付けます。この年で監視付きはごめんですから。」

冗談っぽく笑ってみせる彩芽。

「それと、当分は自宅から通学してもらうことになります。部屋が準備出来次第寮に移ってもらいます。それまでは暫く我慢してくださいね。それでは、明日、遅刻しないでくださいね。」

最初に見せた笑顔の山田先生。

「はい、明日から宜しくお願いします。」

深々と頭を下げ、学園を後にする彩芽だった。

最寄りの駅に着いた時、携帯が鳴る。

ディスプレイには秋穂さん文字の後にハートマークが2つ並んでいる。

「もしもし、深剣先生、またやりましたね？」

彩芽は少し不機嫌そうに声を出す。

「ん？ ああ、なんなら秋穂お姉様でも…」

電源を押し、通話を終わらせる。

「ふう。」

携帯をスラックスにしまい再び歩き出す。

二歩進むと案の定、再び着信が入る。

「なんのようです？」

顔は笑っているが絶対零度の笑顔である。

「いきなり切るなんて冷たいなあ。お姉さん悲しいな。」

おいおいと泣いたような声がスピーカーから聞こえる。

「その手には乗りませんよ。ところで、何かありましたか？」彩芽はこの手に何度も嵌って色々ひどい目にあわされている。

「ちっ。とりあえず、制服はもう家に届いてるだろうから着てみて。今日は少し遅くなりそうだから、宜しくね。後、今日の夕食は豚カツがいいかな。」

時間が無いのか、用件だけをまとめて喋る秋穂に彩芽はいつもそうしてくれるとありがたいのですがと思ったのは伝わらないだろう。

「そうですか。分かりました。豚カツ揚げるのはかまわないですが、夜中帰ってきてカツ丼にしてって言うのは無しですよ。では、失礼します。」

そう言い、電話を切り歩き出す。

翌日――

真新しい三つボタンのスリーピースの制服で職員室に向かう。

「失礼します。」

一礼し入室する。

「神代君、こっちですよ！」

山田先生が大きく手を振っている。

「おはようございます、山田先生。ってこちらの女性は何？昨日お見かけしたような気がするのですが？」

記憶にはたしか男子と聞いたのだがと頭の中で隣の女性と昨日見た男子を比較する。

ほぼというか同一人物で間違いない。

「と、とにかく、こちら、シャルロットⅡデュノアさんです。」

山田先生も驚いているようだ。

「神代彩芽と申します。宜しく、デュノア君…じゃない、さんでしたね。」

笑顔でデュノアに軽くお辞儀する。

「僕は、シャルルじゃなくて、シャルロットⅡデュノアだよ、宜しく。」

同じように頭を下げるデュノア。

「さあ、挨拶も終わった事だし、教室に行きましょうか。」

山田先生はパンッと手を叩き、出席簿を手に立ち上がる。

移動中の廊下ではデュノアと世間話をしていた。

山田先生の後について教室に入る。

ドッと教室がざわめく。

「神代彩芽と申します、皆さん、宜しくお願いします。」

「三人目の男の子！」

「毎回言ってる気がするけど地球に生まれて良かった〜！」

「お母さん、お父さん、生んでくれてありがとう！」

黄色い歓声が教室を覆う。

「はい、静かにしてくださいね！神代君は諸事情により皆さんより少し、年齢が上です。でも、クラスメートですので仲良くしてあげてくださいね！」

山田先生が教室を静まらせる。「次は、えーっと、シャルロットⅡデュノアさんです。デュノア君は：さんだったとの事です：。」
一瞬の沈黙。

「美少年じゃなく、美少女だった訳だ：。」

「あれ？昨日、男子が大浴場使ったんだよね？」

「って事は、織斑君は知ってたって事だよね？」

再び、ざわつき出す教室。

その刹那、教室の扉が吹き飛び、一体のISが現れる。

「一夏あ！」

織斑には愉快的な友人がいたものだと思彩芽は感心すると同時にハイパーセンサーを展開し情報収集を開始する。

中国の第三世代で名は甲龍。

空気を圧縮し砲身ごと精製、発射する衝撃砲が搭載されている。

もちろん、衝撃砲の武器ロックは外れており、最大出力でチャージ中だ。

織斑にしてみれば死ぬか生きるかと言うところで、頭の中には走馬灯が高速で回転しているだろう。

「死ぬ！」

織斑が叫ぶ。

衝撃砲が発射される。

哀れ、学園唯一の同性を早くも亡くすとはと涙を禁じ得ない彩芽だが、織斑はミンチになることもなく、立っている。

ボーデビツヒがAIC、アクティブ・イナーシャル・キャンセラーを使用し止めたようだ。

「サンキュ、助かったぜ。ってお前のISもう直ったのか？すげえな。」

感嘆している場合ではないだろうにと彩芽は心の中で突っ込む。「

…、コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した。
」
淡々と言いのけるボーデビツヒだが様子がおかしい。
振り返り、織斑の胸座を掴み、そのままキス。

教室三度目の長い沈黙が訪れる。

「お、お前は私の嫁にする。決定事項だ！」

ボーデビツヒは頬を赤く染めそう言い放つ。

織斑は軽く放心状態のようだ。

そして、教室の各所から立ち上る殺気・殺気・殺気。

デュノアの顔は天使の笑顔であるものの鬼のようにも見える。

そして、教室は修羅場へと変わっていった。

こうして、彩芽のバタバタな毎日が始まったのだ。

〔第一話 **O b s e r v e ・ B l a c k**〕（後書き）

読みにくい文書だとは思いますが、こんな感じで進みます…
では、第2話にて、お会いしましょう。

〔第二話 Starting・Black〕 (前書き)

どうも、はじめましての方ははじめまして。

読んでくださった方、いつも、ご贔屓にありがとうございます。

ちよっとした、傍らで書いている状態ですので更新が・・・遅いです。

〔第二話 Starting・Black〕

「貴様ら！何をやっている！」

修羅場とかした教室にこだまする戦女神の怒号。
振るい落とされる出席簿。

静まり返る教室に響く打撃音。

「凰、お前は早く教室に戻れ。」
は、はい！」

ひと睨みで脱兎の如く一組から退散する凰

「ボーデビツヒ、篠ノ之、オルコット、デュノア、織斑は体力が有り余っているようだな。次の授業前のランニング校庭10周だ。分かったな！」

「「「「はい。」」」」
しよげる面々。

「神代。」

突然名前を呼ばれる彩芽。

「はい！なんでしょうか！」
背筋をピンと伸ばす。

「どうした？緊張しているのか？まあ、いい。分からない事は織斑に聞け。一時間目は実習だ、遅れるなよ。」

彩芽の肩を軽く叩き、教室を出る織斑先生。

あの人には逆らうまいと強く心に誓う彩芽だった。

そして、昼休み。

「朝からバタバタしてちゃんと挨拶をしてなかったな。俺は織斑一夏だ。宜しく。」

握手を求められる。

「いえ、こちらこそ、ご挨拶が遅れてすいません。神代彩芽と申します。宜しく願います、織斑君」

差し出された手をしっかりと握り締める。

「君付けはなんか違和感があると言うか。俺の事は一夏でいいぜ。」

「いえ、君付けは癖といえますか。慣れるまでは君付けでいいですか？僕は彩芽とでも呼んで下さい。」

人に君やさんを付けて呼ぶのは彩芽の癖である。

飴ちゃんや奴さんと同じようなものである。

ちよつと違うか。

「あ、ああ。分かったって年上なんだから彩芽さんって呼ばせてもらいますよ。」

ふと、思い出した様に織斑は敬語で話し始める。

「はははっ、いいですよ、さん付けなんか気持ち悪いし、敬語もいいですよ。ところで、何かお話があったのでは？」

机の上の教科書やノートを片付け、お弁当を取り出す。

「じゃあ、遠慮なく、彩芽、これから屋上で昼食なんだけとどうだ？」

「折角のお誘いです、お受けします。行きましょう、織斑君。」

彩芽が席を立ち、軽く伸びをする。

「あゝ、先に誘えば良かった。」

「いいなあ。」

「きつと、屋上で：ぶっ！」

いったい、どんな想像をしたのか鼻血を吹いて倒れるクラスメート。そんな喧騒を背中に受け、屋上に向かう二人だった。

「つと、言う訳なんだ。いいだろ？」

屋上にはすでに、オルコット、ボーデビツヒ、デュノア、篠ノ之、凰が揃っており、何故、彩芽が一緒なのかを聞かれ、織斑が一連の流れを説明し終えたところである。

「そういう事でしたら。」

「嫁が誘ったなら仕方ないな。」

「僕は大丈夫だよ。」

「一夏が誘ったなら私も同意するしかあるまい。」

「アンタがいいならいいわよ！」

ちなみに、オルコット、ボーデビツヒ、デュノア、篠ノ之、凰の順である。

「神代彩芽と申します。以後、お見知りおきを。淑女の皆さん。」
うやうやしく頭を下げる。

「私はセシリア・オルコットですわ。宜しくお願い致しますわ。」

「ええ、存じていますよ。イギリスの代表候補生でしたね。いろいろ、教えてもらえると助かります。」

右手を取り手の甲にそつと口づけを落とす彩芽。

「あら、ちゃんと礼儀を分かってらっしゃるのですわね。誰かさんにも見習って頂きたいですわ。」

織斑を睨むオルコット。

「私は一夏の夫のラウラ・ボーデビツヒだ。嫁とも共頼む。」
「はい、こちらこそお願いします。いきなりの嫁宣言、良かったですよ。」

「
先日のトーナメントの印象とはまったく行ってよい程の変わりように驚く。」

「私は、一夏の“ファースト” 幼なじみの篠ノ之箒だ。宜しく頼む。」

ファーストをやたらと強調し凰牽制する篠ノ之。

「ええ、こちら宜しくお願いします。ん？ファーストって事はセカンドやサードがいらっしゃるんですか？」

織斑の方を見る。

「そうだよな、鈴！」

織斑が凰に声を掛ける。

「そうよ、私はセカンド幼なじみよ！でも、この中じゃいちばん

「一夏と付き合い長いんだから覚えときなさいよ!」

凰は不機嫌そうに声を張り上げる。

凰を彩芽は気性の荒い猫と言うイメージで見ている。

「まあまあ、とりあえず、宜しくお願いしますね、凰さん。自己紹介はこれくらいにしてお昼を頂きましょう。時間もありませんし。」
時計は午後の授業開始10分前を差しており、一同は無言で昼食をかき込んだ事は言うまでもない。

「では、今日の授業はここまでです。皆さん、お疲れ様でした。」

山田先生の一言が終わるやいなや、彩芽はクラスメートに取り囲まれ、質面攻めにあっている。

「神代君はいつ、寮に入るの?」

オーソドックス且つ、答えの難しい話である。

「さあ、まだ、聞いてませんよ。」

無難な答えしか持ち合わせていない彩芽である。

「神代君の事、お兄様って呼んでもいい?」

「却下します。」

この間、コンマ二秒。

「神代君も専用機持つてるって聞いたんだけど本当?」

ジャブ・ジャブ・ストレート。

基本である。

「ええ、持っていますよ。名は『黒帝』です。お見せする機会はおおいあるでしょう。今は、イスルギに調整と登録のし直しをしているので。」

今朝、早くに織斑先生に言われ、調整と登録情報の改変でイスルギに預けてあった。

明後日には返却される予定になっている。

「ねえねえ、かーみん。かーみんって呼んでもいい?」

織斑曰わく、のほほんさんの登場である。

「もう既に呼んでるじゃないですか。」

お兄様の百倍はいいだろうと許可する。

「やった！やったよ！」

彩芽はぴょんぴょんとはねて喜んでいるのを見て小動物二号だと認識する。

一号はもちろん、凰である。

「さて、もう少しお話していたかったのですが、夕飯の買い物もありますので、そろそろお開きにしたいのですが、いいですか？」
にこやかな笑顔でぐるりと一同の顔を見る。

「それなら仕方ないよね。」

「神代君の手料理食べてみたいな。」

「今日は何にするの？」

など口々に話すクラスメートを割って現れたのは山田先生だった。

「神代君、部屋が決まりましたよ。明後日頃から利用可能になりますので、準備しておいてくださいね。」

生徒としても違和感のない背丈で、一瞬気がつかない彩芽。

「あ、そうですか。では明後日に引っ越して来ます。」

「神代君、今、私のこと、見えてませんでしたよね！」

今にも泣き出しそうな山田先生。

「あははは、すいません。」

素直に頭を下げ、鞆を手に取り、教室の出口に向かう。

「では、皆さんまた、明日。」彩芽は、軽くお辞儀して教室を後にする

その後はいつもと同じように買い物をして、荷物の段取りを頭の中で効率よくこなしていく。

その時、家の呼び鈴が鳴る。

インターフォンを取り外の様子を見る。

「た〜だ〜い〜ま〜、開〜け〜ろ。」

秋穂がカメラの前でゾンビのお面をして立っている。

無言でインターフォンをぶちきる彩芽。

数秒後。

再びの呼び鈴。

「はい？」

冷たい一言のインターフォンにぶつける。

「ひどくない！無視とかひどくない？早く開けなさいよ！」

カメラを殴る振りをする秋穂を見て、呆れたように解鍵のボタンを押す彩芽であった。

夕飯を食べ終わり洗い物を終え彩芽は、お茶を入れ秋穂に徐に話し始める。

「先生、寮の部屋が決まりました。明後日には向こうへ行きます。」

お茶を秋穂の前に置き、彩芽自身も秋穂の正面に座る。

「そう。ずいぶん早く決まったのね。」

お茶を啜る秋穂。

「ええ。僕自身もびっくりしていますよ。」

彩芽も同じようにお茶を啜る。一瞬の沈黙。

「短い間でしたが、お世話になりました。」

両手を床に着け深々と頭を下げる彩芽。

再びの沈黙。

うつむく秋穂。

「…かないで。」

「えっ？」

小さな声で聞き取れないが一瞬ドキッと鼓動が大きくなる。

「行かないで。」

秋穂が彩芽見つめる。

「先生…。」

視線が交わる。

「行かないで、私の生活の為に。」

「はあ？」

三度目の沈黙。

「だってさく、彩芽が居なくなったら誰がお弁当作ったり、掃除したり、洗濯物回したりするの？私？私なの？だから、行かないで！」
雰囲気ぶち壊しである。

彩芽の肩がプルプルと震えている。

「お世話になりました。すぐに出て行きます。さようなら！」

お茶をそのままに部屋へ戻る彩芽。

その背中を見送る秋穂の頬を一筋の涙が跡を残した事を、彩芽は知らない。

部屋へ戻り、勢いのまま準備をする彩芽はあらかた片付いたところで手を止める。

「秋穂さん、一人で大丈夫でしょうか。」

いつもは先生としか呼ばないが何故か名前で呼んでいた事にふと違和感を感じる彩芽だが、何か暖かい物を感じた。

明後日――

「先生、本当に一人で大丈夫ですか？」

彩芽は荷物は先に送り終え、手荷物だけを持ち、玄関で立っている。

「大丈夫。大丈夫。なんかあったら連絡するから。それよりも、彩芽も体調とか気をつけて。」

パジャマ姿のまま、眠そうな目をこする秋穂。

「それじゃ、行ってきま。」

突然、彩芽の背中を暖かい物が覆う。

「いってらっしゃい。夏休みは帰って来るんだよ？」

強く抱きしめられ言葉が途中で途切れる。

「行ってきました、秋穂さん。夏休み帰ってきますね。」
胸部に廻され繋がれた手に触れる。

「うん。」

それだけを呟き、腕を話す秋穂にもう少しだけそうして欲しいと願った彩芽だった。

「おはよう、諸君。明日より順次、トーナメントの一回戦を開始していく。神代、お前はペアがないだろうから1対1の模擬戦を行ってもらおう。相手は…織斑、お前がやれ。」

織斑先生が織斑を指差す。

「俺？ああ、いいぜ、やるよ。頼むぜ、彩芽！」

隣の席の彩芽に握手を求める。

「はい。僕も織斑君と一戦交えてみたいと思っていたんですよ。本気でお願いしますよ。」

強く握手が交わされる。

「よし、最終日の最終試合に組み込んで置く。準備を怠るなよ、二人とも。」

こうして、織斑と彩芽の対決が決まり、一週間後、その火蓋が落とされる事になる。

〔第二話 S t a r t i n g ・ B l a c k 〕 (後書き)

どうも、後書きは何を書けば良いのか、迷ってます W

I S なのに I S がなかなか登場しない・・・o r z

次回は出ますので、宜しくお願い致します。

感想などいただけると、作者が喜びます。

〔第三話 Black・VS・White〕 (前書き)

どうも、作者です。

GWどうお過ごしですか？

もうお休みの方、うらやましい・・・。
お仕事の方、一緒にがんばりましょう。

〔第三話　Black・VS・White〕

…5
…4
…3
…2
…1

『戦闘開始』

ハイパーセンサーに表示されると同時に織斑、彩芽はイグニッション・ブーストで距離を縮める。

全生徒注目の一戦が始まる。

彩芽はこの一週間の特訓の成果を出し切ると心に誓い、最初の一撃を繰り出す。

時は遡り、一週間前の夜―

「と言う訳で！ 神代彩芽君、入寮おめでとう！」

『いえーい！』

パンパンとクラッカーの音が盛大に鳴る。

「とりあえず、主役の神代君から一言どうぞ」

彩芽はどこから持ち出したのか、おもちゃのマイクを渡される。

「えー、本日はこの様な場を設けて頂き、ありがたく思っております。これから宜しく！」

その一言で一同はワツと盛り上がりを見せる。

「どーも！ 新聞部の黛薫子です。神代君、インタビューいいかな？」

人をかき分け現れた黛が彩芽にボイスレコーダを向ける。

「えーっと、はい。お応えます。」

にこやかな笑顔を崩さない彩芽。

「お！ノリがいいね！では早速だけど、来週末の模擬戦にかける意気込みをどうぞ！」

再び、向けられるレコーダ。

「えー、やれるだけやります。」

ガクツと一同が転ける。

「だけ？もつとき、俺の本気、見逃すなよ？とかないかな！まあ、そこは適当に捏造しておくからいいわ！」

黛は手帳に何かをメモ書き並べていく。

「ね、捏造ですか：お手柔らかにお願いしますよ。」

さすがの彩芽も勢いに飲まれ欠けている。

「OK」。私に任せない！あ、織斑君との2ショットもらえるかな？」

ボイスレコーダをしまい、首から下げたカメラを持ち上げる。

「いいですよ。記念ですから。ね？織斑君。」

隣で我関せずとジュースを飲む一夏に声を掛ける。

「？いいぜ？」

席を立ち、がっちり握手をし、カメラの前に立つ。

「お！いい！最高の絵だね！1＋1は？」

カメラを構えシャッターに指を掛ける。

「2」

彩芽と織斑の声が重なった瞬間、フラッシュが焚かれる。

「ありがとうね！この写真、現像したらここにいるみんなに配るから楽しみにしててね！」

そう言うやいなや、周りから爆発する歓喜の声。

「なかなか、賑やかなところですね、ここは。」

「俺もそう思う。」

織斑と彩芽は同時にため息をついた。

「おほん！ところで、いつまで手を握ったままでいるのだ？神代、

一夏。」

篠ノ之の言葉にお互い手を離し、軽く拳をぶつける。

「ふむ、あれが男の友情が良いものだな。」

ボーデビツヒが二回首を縦に振る。

「そうですわね、これが『やるな、おまえもな』って感じなのでしょうね。」

オルコットの目が爛々と輝いている。

「いや、少しというか全然違う気がするんだけどなあ。」

デュノアは少しヤキモキしている。

それから22時過ぎまでどんちゃん騒ぎは続いたのだ。

なんとか、部屋に戻ってきた織斑と彩芽。

「やはり、同室になりましたね。」

彩芽が窓側のベッドに腰掛ける。

「まあ、男は俺と彩芽だけだからな。とりあえず、宜しく！」織斑も自分のベッドに腰を掛ける。

「あ、お茶でも入れましょう。と言っても紅茶ですが。如何ですか？」

ベッドを立ち、手荷物からセット一式を出し始める彩芽。

「なんか、本格的なセットだな。セシリアの部屋に呼ばれた時に観たのと同じ感じだな。」

テーブルに並べられるティーセットに目を丸くする織斑。

「彼女の物に比べればきつとそれほどじゃありませんよ。でも茶葉には自信がありますけど。」

平たい小さな缶を取り出し、蓋を開ける。

「ブレンドはオリジナルですが、味は保証しますよ。」

その時、コンコンとドアがノックされる。

「神代、戻っているか？」

織斑先生が来たようだ。

「はい！戻ってます！」

蓋を閉め、急いで扉を開ける。

「預かっていたお前のISだ。調整はほぼ終わっている、後は自分に微調整してくれとの事だ。」

漆黒のバンクルを受け取る彩芽。

「分かりました。ありがとうございます。」

「では、ゆっくり休め。」

それだけ告げ部屋を後にする織斑先生。

「千冬姉、なんだって？」

ベッドに腰掛けたまま振り返る。

「僕のISが返却されてきたのでわざわざ届けてもらっちゃいましたよ。」

彩芽は待機状態の『黒帝』を見せる。

「あ、同じような感じなんだな。」

織斑も右手首のガントレットを出す。

「そうですね。僕のは左の上腕ですけどね。」

上着を脱ぎ、タンクトップになり、腕に通す。

その左腕には大きな縫い後あるのを織斑は見ている。

「ああ、これですか？」

傷跡を指差す彩芽。

「あ、ごめん、そんなつもりじゃなかったんだ。」

織斑は慌てて視線を外す。

「いいんですよ。気にしないで下さい。」

バンクルを傷跡の上で固定する。

「さて、僕は少しランニングしてきますが、織斑君はどうしますか？」

手早くジャージに着替えを済ませる。

「俺は疲れたから先に休むよ。さあて、シャワーでも浴びてくるかな。」

着替えを取り出しシャワールームへ向かう。

「では、紅茶はまたの機会にしましょう。お疲れ様でした。」寮の部屋の扉を開け、静かな廊下に出る。

そのまま、グラウンドまで誰にも会うことなく、準備運動を済ませ、ランニングを始める。

グラウンドを2周した時、誰かがいる事に気がつき脚を止める。

「こんな夜遅くに何をやっている。」

コースのど真ん中に仁王立ちである。

「ランニングです。毎日の鍛錬は例え、イベントの後でも忘れてはいけませんからね。」

タオルで汗を拭い、走る姿勢を保っている。

「ほう、いい心掛けだ。だがな、今のお前は学生だという事を忘れていないか？」

動く気配はなし。

「いえ、忘れてはいませんが、やることをやらずに寝ることは出来ません。」

「そうか。なら、私が特別許可を出すが、メニューも特別だ。嬉しだいだろう？」

ニヤリと笑った顔は非常に美しかったが背景には鬼がいた。

「ははは…、ありがとうございます。」

それからの一週間、特訓前の記憶と目が覚めるまでの間を覚えていないという日々が過ぎた。

織斑曰わく、たこ焼きにたこが入っていないのと同じようだったと言う。

つまり、大事な物を忘れて来たようだったと言うことだそうだ。

五分钟前――

第2アリーナは超満員である。席のチケットは一瞬でなくなり、プレミア価格で売買されたようだ。

もちろん、バレた女生徒は織斑先生からプレミアな訓練を受けさせられたと言う。

恐ろしい話である。

「行きますよ、黒帝」

ピット内でISスーツに着替えた彩芽が自分のIS『黒帝』を呼び出す。

黒を中心に所々が濃灰色でアクセントをつけている。

頭は両耳を覆うヘッドギアが後頭部まで覆い、薄暗いパイザーが目を覆っている。

胸部には大胸筋を覆うようにアーマーが展開しており、体格が少しよく見える。

下腕部は大きくなり、通常のISに似た形状だが少し違うのはマニピレーターがガントレットと一体化しており、指だけが出ている。脚部は左右非対称で構成されており右足の装甲は緩やかな曲線を描いており打撃ダメージを優先させている。

左足は他のISと同じく、直線的なデザインだが、膝下から爪先までが鋭い刃のように研ぎ澄まされている。

神代彩芽のIS『黒帝』は接近戦特化型であり、プリセット装備は一切なしのストックな機体である。

但し、アンロックユニットの大型スラスターを4機搭載しており、加速力の強化が行われている。

有り余る加速力で加速時の機体制御のピーキーさ、エネルギー効率の悪さは加速力と同じくらいトップクラスである。

「神代、時間だ。規定位置まで出ろ。一週間の成果、見させてもら

うぞ。」

織斑先生からのプライベートチャンネルが繋がれる。

「はい、見ていてください。行きます！」

ピットから一気に空へ飛び出して行く。

飛び出した先には既に『白式』を装備した織斑が規定位置に待機していた。

「お待たせしました、織斑君。」

規定位置で停止し、織斑にプライベートチャンネルで通信を送る。

「いや、俺も今出てきたところだ。本気で行くからな。」

やる気満々である。

「はい、こちらもそのつもりですよ。宜しく願います。」

ハイパーセンサーにカウントダウンが開始される

…5

…4

…3

…2

…1

イグニッション・ブースト。

振り下ろされる雪平式型の斬撃と交差するように右ハイキックを繰り出す。

雪平と接触し、火花を散らす。

「やはり、同じ事を考えていましたか。」

ハイキックの体制をスラスターを使い制御する。

「同じようなタイプみたいだからな。さあ！彩芽、行くぜ！」力を込めて押し戻す一夏。

「では、こちらも行きますよ！」

脚部装甲と雪平が火花を散らす。

そのままの体制からの後ろ回し蹴り。

IS無しでは成り立たない動きで一夏を蹴り飛ばし、体制が整う前に

スラスターで自分の距離まで詰め、左の拳を一夏のボディーに叩き込む。

空中投影ディスプレイを凝視する二人の女性たち。

「織斑君たち、いい勝負のようですね。」

手元のコンソールを弄り、データの収集を行う山田先生。

「いやいや、神代は実力をまだ発揮していない。面白くなるのはここからだ。」

コーヒークップを持つ手がプルプルと揺れていることに山田先生が気がつくがあえて、あえて言わない。

余計な一言が大惨事を迎える可能性がある事を身を持って知っているからである。

「一夏！何をやっている、あいつは！」

回し蹴りをくらい、後ろへ飛ばされるのを観た篠ノ之が叫ぶ。

「なんですよ、神代さんのISは初期装備が一切なしですわ！」

ハイパーセンサーで黒帝のデータを閲覧しているセシリア。

「あの身のこなし、がむしゃらに出した回し蹴りじゃない…神代の奴はかなり出来るようだ。」

ボーデビツヒは先ほどの動きを冷静に解析して神代の力量を計っている。

「一夏、大丈夫かな。」

デュノアは心配そうな表情である。

「一夏！ガンガン攻めて行きなさいよ！じれったいわね！」
凰が叫ぶ。

「くっ！やられてばかりじゃいけない！」

体制を立て直し、『白式』のワン・オフ・アビリティー『零落白夜』を展開させ、イグニッション・ブーストで距離を一気に詰める。

「それが『零落白夜』ですか。しかし！」

イグニッション・ブーストを一瞬だけ解放し横にスライド移動する。振り下ろされた『雪平』は虚空を切り裂く。

「当たらないと意味はありません。」

裏拳をがら空きの側頭部にすかさず決める。

反動で体制を崩す織斑を叩きのめすように連続で拳を蹴りを正確に急所へ叩き込んでいく。

連続の攻撃の中みるみる削られるシールドエネルギーを見ながらなすすべのない織斑。

この差は日々の鍛錬の違いが浮き彫りになった瞬間でもある。

彩芽のかかと落としが一夏の

胸部に決まり、グラウンドに激突する。

砂煙が濛々と立ち上がり、観客の視覚を奪う。

その刹那、大きな衝撃と共に、戦闘終了の文字が空中投影ディスプレイに表示される。

静まり返る会場内。

「どうになりましたの？」

一夏が叩きつけられた瞬間顔を手で覆ったオルコットが覆っていた手を顔から離す。

「うむ…一夏が負けた。」

篠ノ之が俯く。

「まさか、イグニッション・ブーストの二重掛けで突貫していくとは…」

ボーダンオージェで見ていたボーデビツヒは一部始終を把握してい

た。

「どういう事よ！説明しなさいよ！」

凰は砂煙を睨むように眺める。

「かかと落としの後、4機のスラスタ―全機でイグニッション・ブーイストを掛け、その勢いのまま、一夏を殴った。あの勢いでは…一夏は…」

目を伏せ、口を強く結ぶボーデビツヒ。

「そんな！一夏！」

デュノアはすぐにも飛び出さん勢いで身を乗り出すが、シールドに阻まれグラウンドには出ることは出来ない。

砂煙がだんだんと晴れていく。

地面に寝転がる白。

地面に拳を突き立てる黒。

空中投影ディスプレイには『勝者…神代彩芽』と表示されている。

拳を地面から外し、深々と頭を下げる。

「今回は、僕の勝ちでしたね、織斑君。」

右手を織斑に差し出す。

「いてて…一方的だったな。やっぱり、鍛錬が足りないな、俺は。」

悔しそうに彩芽の右手を握り立ち上がる織斑。

「日々鍛錬ですよ、織斑君。それでは、後で。」

ゆっくと飛翔しピットに戻って行く彩芽。

「もっともっと強くなりたいな、俺。」

強く拳を握る織斑であった。

ピットに着き、ISを待機状態に戻す彩芽に織斑先生が近づいてゆく。

「神代、なかなかいい試合だったぞ。」

その言葉を残しピットから出て行く、織斑先生。

「ありがとうございます。先生のご指導の賜物です。」

彩芽はピンと背筋を伸ばし、頭を下げる。

その時、雪崩の如くピットに入ってくる篠ノ之、オルコット、凰、デュノア、ボーデビツヒ。

「「「「神代^{さん}(君)！」」「」」「」」

怒りオーラ全開の5人が神代に迫る。

「あ、え？なんですか、皆さんご一緒で。」

身の危険をひしひしと感じる彩芽が後ずさる。

「よくも、一夏の顔を殴ってくれたな。」

どこからともなく、木刀を取り出す篠ノ之。

「私の嫁だ…それ相応の事は覚悟してもらわないとな。」

目が据わり、腕部のプラズマ手刀がボーデビツヒの右手に装着されている。

「まったくですわね。」

オルコットの手にはスターライトMk.？が握られ、既に初弾が装填されている。

「神代、殺す！」

甲龍をフル装備で展開し、衝撃砲を最大限でチャージし、既に彩芽をロックオンしている。

「ちょっとやりすぎじゃないかな、神代君」

装甲をパージした状態で大型パイルバンカー『グレースケイル』が装着されている。

「えっと…殴ってないですよ、最後のは。」

そんな言葉は馬の耳に念仏状態で迫ってくる。

「あ、いたいた！彩芽！飯食いに行こうぜ！」

織斑がピットに駆け込んでくる。

「織斑君、いいところに！最後、顔なんか殴ってないですよ、僕。」

顔にスターライトMk.？を突きつけられた彩芽が叫ぶ。

「殴ってないぜ。むしろ、見事に肩の装甲の表面だけ削り取ったよな！それで、箒達は彩芽になにしてんだ？暴力反対だぞ。」

流石は、朴念仁の日本代表、織斑一夏である。

見事な空気の読めないっぷりである。

「「「「一夏^{さん}！」「」」「」」」

一斉に彩芽から織斑に標的を移す5人。

「心配してやったと言うのに、貴様と言う奴は！」

「一夏さんはもう少し、人の心を読んでいただきたい物ですわね！」

「「心配で損したよ、一夏。」

「嫁の癖に、私の心が読めんとは…許さん！」

「アンタは…一回、殺す！」

ちなみに、篠ノ之、オルコット、デュノア、ボーデビツヒ、凰の順である。

「えっ！俺？えええええ！死ぬ、俺、絶対死ぬ！」

織斑の断末魔と爆音がピットの中で響き渡った。

〔第二話 Black・VS・White〕 (後書き)

やべえW

書くことない・・・orz

〔第四話 Singing・Black・With・Old・Friends〕

どうも、作者です。

20日ぶりでございます。

ぜんぜん・・・書く暇ありませんでした^^;

ゆっくり更新ですが、皆さん、気長にお待ちください;;;

[第四話 Singing・Black・With・Old・Friends]

織斑との模擬戦から早数週間。

いつもの如く、彩芽の朝は早い。

織斑を起こさないように、さつさと着替えを済ませ、朝の鍛錬に出かけるべく、部屋の扉を開けると目の前には今まさに取っ手に手をかけようとしていたボーデビツヒと鉢合わせする。

「ボーデビツヒさん。おはようございます。織斑君ならまだ寝ていますよ。」

小さな声で挨拶をする彩芽。

「おはよう。寝ているならそれはそれでいい。なあ、一つ聞いてもいいか？」

なぜかもしもじするボーデビツヒ。

「ええ、なんなりと。」

部屋の扉を閉め、廊下に出る。

「夫婦とは包み隠さない関係と聞きましたので、包み隠さずに添い寝をするつもりなのだが、もっと攻撃力のある格好はないか？」

「なるほど：そんな間違えた常識を教えたのは誰です？おっと、話が逸れましたね。：なかなか、難しいですねえ：」

素早く突っ込むも顎に手を置き、寝起きの頭をフル回転させる。

この男、神代彩芽はお気付きかもしれないが少々天然なところのある男である。

「いいのがありますよ。さすがに朴念仁の織斑君でも全裸は引くかもしれませんが、ボーデビツヒさんの魅力に野獣と化す可能性も無きにしも非ず：と言うことで、織斑君のワイシャツです。意外とこれはパンチ力ありだと思えますよ。」

これは名案と腕を組み首肯する。

「ほう、一夏のワイシャツか：名案だな。ところで、一夏のワイシャツはどこにある？」

ごもつともな質問である。

「左の引き出しの上から三番目に入っていましたよ。では、ご武運を。」

そのままグラウンドに向かう彩芽であった。

それから一時間後の織斑はというと：

今にベッドの中で至福のまどろみ延長戦に突入していた。

織斑曰わく、まどろみタイムをあっさりと切り捨てられる彩芽は末恐ろしい奴なのだという。

いつものまどろみタイムにはない柔らかい物が身体に当たる事に織斑は気が付く。

「ん…」

柔らかな物体が声を出す。

その声に気が付き、まどろみの延長戦は一瞬で終わる。

一夏はこの声の人物を一瞬にして予感する。

ガバツと布団を捲り上げると彩芽の示した通り、一夏のワイシャツを着込んだボーデビツヒが横たわっていた。

「ラ、ラウラ。」

日差しがカーテンの隙間から差し込んでくる。

「ん…、もう、起きる時間か…。」

軽く伸びをするボーデビツヒの身体を日差しが照らす。

白いワイシャツから整ったボディラインが浮かび上がっては消える。

「なんで、俺のベッドで寝てるんだよ！」

ごもつとも。

「夫婦とは一緒に眠るのが当然だろう。」

ちなみに織斑はこの時、まどろみの延長戦を瞬時に終了させ、至って普通に会話をしたボーデビツヒに対して驚愕した。

「あー、確かにな。って誰が夫婦だ！さらに、俺のワイシャツどこから出したんだよ！」

一瞬、納得しかけた織斑だがなんとか反撃にでる。

「ん。神代に聞いた。左の引き出しの三番目だな。」

大きく胸を張るボーデビツヒに織斑は大きく肩を落とす。

「そうかい。彩芽の奴なに考えてるんだよ、まったく。」

いない人間に毒付いても仕方がないのだが、毒付いている織斑。

「ふむ。こういう起こし方もいいと彩芽に聞いたが、やはり、包み隠さない方がいいと言うことなのだな。」

勢いよくワイシャツを脱ごうとするボーデビツヒ。

「おい！ばか！やめろっ！」

左手で目を覆いながら、布団を拾い上げ掛けようとするが、自分で踏んでいた事に気が付かず、勢いでボーデビツヒに覆い被さるように倒れるが、ボーデビツヒは織斑の腕を掴み、軍の体術で織斑をホールドする。

「一夏、お前はもう少し体術を学んだ方がいいようだな。寝技なら私が教えてもいいぞ。」

そんな事を言いながらも織斑の腕はギリギリと絞まっていく。

「あーっ、いててっ！やめっ！ギブギブ！」

ベッドを三回叩きギブアップを宣言する。

その時、部屋の扉が開き、篠ノ之が入ってくる。

凍りつく部屋の空気。

一条纏わぬボーデビツヒが織斑にベッドの上で「寝」技をかけているのだ。

篠ノ之の背後にユラユラと怒りのオーラが溢れ出す。

「いててっ、箒、話せば分かる！」

痛みで冷や汗を流しているのではなく、篠ノ之の怒りに対してであるのは明らかである。

「問答無用！天誅！」

真剣が織斑に振り下ろされる。

「ああああああ！」

織斑の悲鳴が寮中に響いたのを、彩芽は知らぬまま、ラストランを

軽快に走り抜けた。

「あら、神代さん、おはようございますわ。」

学食で焼き魚定食を食べている彩芽に挨拶する、オルコット。

「おはようございます、オルコットさん。ご機嫌いかがですか？」

鮭の塩焼きを箸で綺麗に解しながらオルコットに笑顔で挨拶する彩芽。

「悪くありませんわ。相席よろしいですか？」

そう言いながら、隣の席に座るオルコット。

「そういえば、もうすぐ、臨海学校ですね。」

冷や奴にポン酢を垂らし、箸でひとつまみ薬味の生姜とネギごと口に運ぶ彩芽。

「そうですね。楽しみですわ。その神代さん、男性はビキニとワンピースはどちらがいいと思いますの？」

サラダを口に運ぶオルコット。

「それは…織斑君に直接聞いた方がい…あ、いえ、ごほん。」オルコットの後ろに何かのオーラを感じ、咳払いする彩芽。

「で、どちらですか？」

笑顔。

「そうですね…ビキニでしょうか。」

ほぐした鮭を炊きたてのご飯に乗せ、一緒に口に運ぶ。

ふわりと薫るご飯の甘味と鮭の程よい塩加減に舌包みを打つ。

「なるほどですわ。参考にさせていただきますわ。バスは一夏さんと座る予定ですね？」

彩芽をちゃんと見据えるオルコット。

「いえ、バスには乗りませんよ。僕、車恐怖症なんですよ。三年前の事故以来…。だから、バイクで行くことになってますから、織斑君の隣は皆さんで検討してください。」

合わせていた目を逸らし、俯くが再び満面の笑みを浮かべる。

「わかりましたわ。私、セシリアⅡオルコットが責任を持って隣はお守りしますわ!」

目に沢山の星を浮かべ彩芽を見つめるオルコット。

「え? いや、皆さんで検討してくださいと。」

花も恥じらう十代乙女が彩芽の話を聞くはずもなく話は進んでいくのであった。

その日の夕方

彩芽は月に一回の検査を受けるため、病院へ向かう。

来週に控えた、臨海学校の事で話して置く事もあり、一石二鳥だと彩芽は意気揚々と病院に向かい、診察を受ける。

「先生、来週の臨海学校の事なんですが、バイクで行く事にしました。」

ワイシャツのボタンを閉じる。

「そう。気をつけてね。今週の日曜日、外出届を出しておいたから。」

書類に何かを書き込む秋穂。

「はい? 外出届はもう出してますよ?」

先週、バイクで行くと決まった時に既に提出していたのだ。

「今週の日曜日、私休みなのよね。だから、臨海学校の買い物付き合っただげるわよ!」

今週の日曜日は朝からメンテに出していたバイクを取りに行つて、軽くツーリングを楽しむ予定だったのだが彩芽の予定は一瞬で葬り去られた。

「えっ? ちょっと待って。」

一瞬、頭の中の予定が真っ白になる彩芽をよそによしと一言告げ、

万年筆を白衣の胸ポケットに片付ける秋穂であった。

その週の日曜日…

毎朝のトレーニングを終え、朝食を取り、自室に戻ると織斑の姿はなく、着替えをさっさと済ませ、部屋を後にする。

この日は秋穂と臨海学校の買い物をする予定に勝手に決められており、これから待ち合わせ場所のショッピングモールに向かう。

待ち合わせ場所に着くやいなや携帯のバイブレーションがメールの受信を告げる。

ごめん、五分遅れるかも。

わかりましたとだけ返信し、側のベンチに腰掛ける。
少しの間ばーっと人の流れを見ている。

楽しそうな親子の姿がよく目に付く。

「彩芽〜！ごめん。ちょっと寝坊しちゃった。」

秋穂が走り寄ってくる。

「そんなに待ってないですよ。」

彩芽がベンチから立ち上がる。

「そうね。」

彩芽の腕をとる秋穂。

「エスコートしろと…かしこまりましたよ、先生。」

甘んじて受ける彩芽。

「ん？あれは…オルコットさんと凰さんとボーデビツヒさんの様で

すね…。」

見覚えのある三人が柱に隠れたり、茂みの影に消えたり、人ごみに紛れたり怪しい行動をしている。

「どれどれ？ あれは…たぶんだけど、尾行ね。何か面白い物が見れるかもね。」

そういう秋穂は軽快な足取りで後を追いつける。

「ちょっと、先生！」

彩芽をぐいぐいと引っ張っていく秋穂。

「…あのさあ。」

「…なんですか？」

あからさまに負のオーラが滲み出ているオルコットと凰

「…、ずーっと手え握ってない？」

「ずーっとかは分かりませんが、握ってますね。織斑君とデュノアさんですか。」

ひょいっと会話に乗っかる彩芽。

「…ええ、ずーっと握ってますわね。って、神代さん！！」

オルコットがひっくり返りそうになる。

「ちよっと！ あんた、なにしてんのよ！」

凰が叫ぶ。

「尾行、バレますよ？」

頭を低くする彩芽。

「まさか、この私の背後をとるとは…貴様、何者だ？」

ボーデビツヒは冷静に前に行く二人を捉えている。

「きゃー！ 三人共可愛いー！」 三人にダイブでもしそうな秋穂。

「先生、大人なんだから少し落ち着いて下さい。」

腕をしっかりと挟み、離さないようにする。

「あの、こちらの女性はどちらさまですか？」

少し身を引くオルコット。

「はい、僕の治療医兼保護者の深剣先生です。」

丁寧且つ、端的に紹介する彩芽。

「もう少し、色気のある紹介してよね、彩芽。ってか、彩芽ってこんな可愛い子達と勉強してるの？そのシャングリラの入場券はないの？」

口元の涎を拭う秋穂。

「ありませんから。あと、皆さんドン引きですから、更にちゃんと自己紹介してください、先生。」

一瞬で釘の打てるバナナが出来そうな冷たい視線を向ける彩芽。

「冗談、冗談！深剣秋穂です。秋穂先生って呼んでね！」
軽くウィンクして見せる。

「私は、セシリアⅡオルコットですわ。神代さんにはクラスお世話になってますわ。」

軽くスカートをつまみ、ふわりと頭を下げるオルコット。

「あたしは、凰Ⅱ鈴音よ。神代とは、隣のクラスよ。宜しく。って追うわよ！」

五人でぞろぞろと進み出す。

「私はラウラⅡボーデビツヒだ。宜しく頼む、秋穂先生。」
軽く頭を下げる。

「秋穂先生だって！素直で可愛いわ、ラウラちゃん。」
その時、秋穂の携帯が鳴る。

「急患ですか？」

三人は織斑とデュノアを目で追いかけているが三人共、血走っている。

「ごめんね、彩芽。買い物したら後で領収書ちゃんと出すのよ。じゃ、尾行頑張ってるね、セシリアちゃん、鈴音ちゃん、ラウラちゃん！彩芽は好きに使っていいからね！」

冗談を言いながら走り去る秋穂はさながら、台風のようなだった。

「なんだったの…あの人…。」「なんだったんでしょうね…。」

「さあ…忙しい人だな、神代。」

「ははは…」

乾いた笑い声を出すのが精一杯の彩芽。

「さて：尾行も楽しかったですが、そろそろ買い物をして次に行かないといけませんので、お先に抜けさせてもらいますよ。」

柱の影から出て、水着売り場へと足を進める彩芽を三人は呆然と眺めていた。

自分の水着などさっさと購入し、バイクを取りに向かおうと他の店に目もくれずに歩く彩芽。「彩芽！」

突然後ろから声を掛けられ、驚きながらも振り返る。

そこには中学を共に過ごした四人が立っていた。

「遊！慶太！修平！達也！」

優しい笑顔を浮かべ、四人に駆け寄る。

「三年振り！何回も病院行ったのに、面会謝絶だったからどうしたかと思ってたんだぞ！」

遊が彩芽の肩を軽く殴る。

「心配を掛けましたね、遊。」

軽く肩を殴り返す彩芽。

「もう会われへんのかと思うたわ。」

右手を差し出す、慶太。

「僕ですよ、慶太。また、会えて嬉しいです。」

握手を交わし、強く握る。

「うおー！彩芽！久しぶり！！会いたかったぞ！」

勢いよく、彩芽に抱きつく修平。

「あはは、本当に久しぶりですね、修平。」

軽くハグをする。

「まったく、渡したい物や話したいことが山ほどあり過ぎるんだよ！今度、時間あけとけよな！」

達也が彩芽を指差す。

「ええ、解りました。時間を作りますよ。」

両手を上げて笑う彩芽。

「みんな、どうしたのよ？私、一人で先に行っちゃったじゃないの。」

「

膨れ面で四人の間に割ってはいってくる女性。

「ん？もしかして、九条さん？」

昔の面影を頼りに記憶を引っ張り出す彩芽。

「え？もしかして、神代君！久しぶり！元気？」

九条は満面の笑みを彩芽に向ける。

「ええ、元気ですよ。ところで：今日は五人揃ってどうされたんです？」

四人はわかるが、九条がいる事に疑問を持つ彩芽。

「今日な、向こうの広場でイベントやるんだけど、出るんだよ、俺達。」

遊がチラシを取り出す。

『素人バンドいらっしやい！』と銘打たれている。

「まだ、バンド続けてくれてたんですね。」

チラシを受け取った手が少し震え始める。

「当然だろ。いつかお前とまた、やりたいってみんな思ってたんだからよ。」

チラシを彩芽の手から取り返し、胸のポケットにしまう、遊。

「今日は五人になって初めてのライブや。」

四人の顔を見回す慶太。

「九条さんもバンドに？」

彩芽は目を丸くする。

「うん。遊がどうしてもバンドを『強化』したいって言うから、キーボード兼ボーカルで入ったんだ。」

九条が胸を張り腕を組む。

「そして、今日、ここで彩芽に会ったのも、運命だよな。」

修平が達也の腕に肘打ちする。

「ここで会ったがなんとやらだな、行くぞ、彩芽。」

達也が彩芽の腕を掴む。

「え？え？意味が分からないんですが。」

周りを見渡す彩芽。

「よし！五人のつもりが六人になった『ユニオン・ソウル』の華々しいデビューだ！頼むぜ、リードボーカル！」

彩芽背中を強く叩く音が響く。

その頃、尾行トリオは織斑先生と山田先生と出会い、山田先生の計らいによる、織斑姉弟水入らず作戦（？）の被害（？）を受け山田先生、デュノア、オルコット、凰はブラブラとウィンドウショッピングとしゃれ込んでいた。

ボーデビツヒはいつの間にか居なくなっていた。

「なかなか、目に付くものがないわねえ。」

凰は一夏といた時間があまりに短かったせいか少し機嫌の悪い。

「お買い物も終わりましたし、そろそろ帰りませんこと？」

一夏の尾行に疲れたのか足取りの重いオルコット。

「そうだね。そろそろ帰ろうか。」

一夏とゆっくりと買い物を楽しんだデュノアは満面の笑みを浮かべている。

「そうですねえ、明日も学校ですから帰りましょうか。」

山田先生は時計で時間を確認し、出口の方を見る。

既に日差しは傾き初め、夕焼け空が窓いっぱいにひろがっていた。

「ねえ、あれ、神代じゃない？」

凰が広場のステージを指差す。

「確かに神代さんですわね。なんでステージの上にいるのでしょうかね。」

首を傾げるオルコット。

「分からないけど見に行ってみようよ！」

デュノアがステージに向かって歩き出す。

「そうですね、見に行ってみましょう。」

山田先生の一言で全員がステージに向かう。

「えーっと…ユニオン・ソウルです。」

彩芽がマイクの前に立ち、落ち着いた雰囲気話し出す。

「中学生の時に始めたバンドで、三年振りに新メンバーを加えての『リスタート』です。全員で精一杯の音を皆さんに届けます聞いて下さい。」

彩芽は振り返り、遊、慶太、修平、達也、九条、改めて、みずかの目を順に見ていく。

全員が優しい光を宿した瞳をしている。

首肯をする彩芽に全員が同じように首を振る。

それを見た彩芽は緊張で強張った身体がほぐれた気がした。

「聞いてください。『星のすみか』。」

正面を見据え、マイクを握る。達也のドラムスティックがカウントを始める。

息を大きく吸い込む彩芽。

カウント終了と同時に彩芽の声と達也のドラム、みずかのキーボードが一つの音のように流れ始める。

遅れて遊と修平のギター、慶太のベースが加わり、三年間の隙間を繋ぎ合わせるように、一つの音楽を紡ぎ出されて行く。

最後のフレーズを歌いきった瞬間、彩芽の頬を一筋の涙が濡らす。あの時、あの瞬間まで忘れようとしていた自分のやりたいことを出

来る事の喜びが溢れ出していた。

遊と修平が最後のフレーズを弾き終わり、会場が一瞬静まり返る。そして、拍手があちこちから漏れ出す。

いつの間にか、会場全体からの拍手が彩芽達を包み込んでいた。

「アンコールよ！アンコール！」

会場の最後列から聞き覚えのある声が聞こえる。

声の方を見ると、風が飛び跳ねてこちらに手を振っていた。

「そうですわ！アンコールですわ！」

両手を大きく振るオルコットとデュノア。

「頑張ってね！神代君！」

山田先生まで手を振っていた。

そして、会場全体からのアンコールに応えるべく、次の曲をいきいきと奏で出す、ユニオン・ソウルの面々の顔は満面の笑みだった。

翌日の昼休み：

いつもの学食でいつものメンバーで食事をする彩芽。

「なんだよ、みんな、連絡くれよな。俺も彩芽の歌聞きたかったぜ。」

「

醤油ラーメンをすすりながら愚痴る一夏。

「すごかったんだよ！会場全体が盛り上がってさ！」

デュノアは興奮覚めやらぬ様子で話す。

「神代さんがバンドなんて意外でしたわね。しかも、かなりお上手でしたし。今度私のピアノ伴奏で一曲セッションしませんこと？」
オルコットがピアノを弾く仕草をする。

「いいですね、是非。」

彩芽が相槌を打つ。

その時、学食の画面が切り替わる。
そこには昨日の彩芽が写っていた。

「ちょっと! どういう事ですか! えっ?」

慌てて立ち上がり、箸を落とす彩芽。

「へえ、上手いじゃないか、彩芽。」

画面を見ながらラーメンをすする。

こうして彩芽の意外な一面は学校中に広まった。

〔第四話 Singing・Black・With・Old・Friends〕

いかがでしたでしょうか？

本編はできるだけいじらないように書いてます。

では、また、次回お会いしましょう。

作者でした。

〔第五話 Ocean's Eleven〕 (前書き)

おはようございます。

作者です。

雨が増えてきましたね。

皆さん、どうおすごしでしょうか？

なんとか、5月中に5話までUPできました。

これから亀更新ですが、是非とも、ご贖に。

〔第五話 Ocean's Eleven〕

学校を出て一時間を過ぎた頃、トンネルを抜け出した先には青い海が広がっていた。

「いいですね、海！テンションも上がりますね。」

あたかも誰かに声をかけるように話す彩芽だが、バイクに跨っている為、一人である。

「：少し、寂しいものがありますね…。」

それから一言も発する事なく旅館にたどり着く事になった。

四台のバスから一組の生徒がぞろぞろと降りている横にバイクを着けて、フルフェイスのヘルメットを外す彩芽。

「お疲れ、彩芽！」

織斑が荷物をバスから出している

「お疲れ様。手伝いますよ。」ヘルメットをハンドルに掛け、荷物をトランクから運び出し始める。

「助かる。」

一夏も一緒になり、バックをどんどん外に出す。

五分もしないうちに全員分のバックが各自の手元に渡る。

「よし、織斑、神代ご苦労だった。それではここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ。」

「：「よろしくお願ひしまーす。」」

織斑先生のありがたいお言葉に続き、全員で挨拶をする。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね。」

きっちりと着物を着込んだ三十代ぐらいの女将が丁寧にお辞儀する。その姿を見て彩芽は秋穂もこの位落ち着いてくれればと、心の中で

眩いた。

「あら、こちらが噂の？」

織斑と目があったのか、織斑先生に尋ねる。

「ええ、まあ。今年は男子が二人もいるせいで浴場分けが難しくな
って申し訳ありません。」織斑先生が深々と頭を下げる

「いえいえ、そんな。頭をあげてください。」

慌てて頭を上げさせる女将。

「それにいい男の子達じゃありませんか。しっかりしてそんな感じ
を受けますよ。」

柔らかい笑顔は女将という立場よりも美しいモデルのようだと彩芽
は感じた。

「神代はそうかもしれませんが、こいつは感じがするだけですよ。
挨拶をしろ、馬鹿者。」

頭を押さえつけられる織斑。

「お、織斑一夏です。宜しくお願いします。」

「僕は神代彩芽と申します。三日間、宜しくお願いします。」深々と頭を下げる。

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲恵子です。」

織斑は若干緊張しているのか顔が強張っている。

「織斑君は女将さんが綺麗過ぎて緊張しているようですね。」彩芽
は少し綺麗過ぎてを強調して言う。

次の瞬間、四人のオーラが強くなったのを感じる。

「あらあら、御冗談を。誉めでも何もでませんよ？」

女将も満更でもない様子で彩芽の肩を叩く。

「それじゃあ、みなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は
別館の方で着替えられるようになってますから、そちらをご利用な
さってくださいな。場所が分からなければいつでも従業員に訊いて
くださいまし。」再び、頭を深く下げる女将。

「「はい」」

女子達は返事をするなり、旅館の中に入って行く。

「ね、ね、ね、おりむ、かーみん。」

のほんさんがゆっくりとこちらに近づいて来ていた。

「おりむとーかーみんって部屋どこ？ 同じ部屋ー？ 一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えて。」

ゆったりとのほんさんが言い終わった瞬間、場の空気がピンと張った糸のような緊張感に包まれる。

「いや、俺は知らない。彩芽は聞いてる？」

「いえ、僕も聞いていませんよ。」

「そか、廊下にでも寝るんじゃないの？」

「悪くありませんが、蚊帳は欲しいですね。」

山田先生曰わく、女子と寝泊まりさせる訳にはいきませんので、別の場所に用意してありますよっと言う事らしいのだが、彩芽も織斑も、全く聞かされていない。

「織斑、神代、お前たちの部屋はこっちだ。ついてこい。」

織斑先生に呼ばれ、その場は解散となった。

旅館は歴史を感じさせる造りと近代的な設備が見事に融和したモダンな装いになっている。

「見事な漆喰の壁ですね。」 彩芽はマジマジと壁を見つめる。

「分かるのか、彩芽？」

織斑も一緒になって壁を見る。

「何をやっている、行くぞ。」 つかつかと先を進む織斑先生に続く二人だった。

「ここだ。」

部屋の扉には『教員室』と書かれている。

「え？ ここって…」

織斑の口が金魚のようにパクパク動く。

「なるほど、そういう事ですか…納得です。」

彩芽は腕を組み、頷く。

「最初は二人で個室という話もあったんだが、就寝時間を守らずに部屋に殺到する女子が出るだろうからな。予防策として、私と同室になったわけだ。分かったか、織斑。」

非常に分かりやすい解答である。

「なるほど：虎穴に入らずんば虎子を得ずと：なるほど：。ってあれ？ 関羽？」

織斑先生のオーラが三国の猛将に見えたようだ。

「今のは完全に失言ですよ、織斑君。さて、お先に海に行ってますから、ごゆっくりどうぞ。」

彩芽はさっさと泳ぐための道具を小さめのバックに詰め、部屋から退散する。

庭園を眺める廊下に出る手前でポケットの中で携帯が着信を告げる。さっとポケットから取り出し着信を確認する。

風芽義兄さん

と告げている。

「もしもし、義兄さん？」
にいじまふうが にいじまかける
新島風芽、本名は新島翔。

四年前まで神代家の道場で修行していた彩芽の兄弟子。

神代の名を持たない初の師範代になり得る程の才能が有りながらも、四年前、高熱に侵され、両目の光を失ってしまう。

それを気に道場を去ることになったが、彩芽の姉・芽依めいと結ばれ、彩芽の義理の兄になるはずだった男である。

「よう、彩芽。元気にしてるか？」

優しい義兄の声が以前と変わっていない事に喜びを感じる彩芽。

「元気ですよ。義兄さんこそ、元気ですか？ 久しぶり過ぎて何を話

せばいいのか。」

少し舞い上がる彩芽。

「少し、落ち着けよ。『齋牙』の名が泣くぞ。ところで、彩芽、芽依のお墓には顔を出したのか？」

苦笑いしながら、厳しい所を着く風芽。

「すいません、いえ、まだです。バタバタしてて…。」

入学手続きに寮生活への順応と墓参りを後回しにして来た、彩芽。墓参りを後回しにして来たのは未だに、家族が生きていると想い続けたいと言う事なのかも知れないと風芽は思う。

しかし、亡くなった事実を受け止めさせる為に風芽は心を鬼にする。「そうか…じゃあ、夏休みに、一度一緒に行こう。話したいこともあるからな。また、連絡する。頑張れよ、彩芽。」

そう告げて、電話を切る風芽。

「風芽義兄さん…、おっと、そろそろ、準備をしに行かないと。」墓参りの事を忘れ去ろうとするように頭を横に振り、別館に歩みを進めようとした時、爆音と共に砂煙に巻き込まれる彩芽。

「なっ！何事です！」

渡り廊下に駆け込む彩芽。

そこにはデフォルトされた人参が突き刺さった光景だった。

「あれ？彩芽、どうして、ここに？」

ひっくり返ったままの織斑が素っ頓狂な声を出す。

「ちょっと、古い知人と電話をしていたものでして。ところで…この人参は一体。」

上から下までをじろじろと見る彩芽。

彩芽がデフォルト人参に触ろうとした刹那、ぱかっと真つ二つに割れる人参。

「うわっ！」

驚いて尻餅を着く彩芽。

「あっはっはっ！引っかったね、いっくん！」

中から現れたのは不思議の国のアリスのアリスが着ているような青

と白のドレスを着た、女性だった。
その女性の顔を見た瞬間、彩芽の脳裏を三年前の光景が走る。

燃え盛る炎の中、動く一体のISの姿。

八本の脚を持つISが舌打ちをして飛び立っていく。

そこで、一瞬ブラックアウトする景色。

次に写った景色は姉を腕に抱きしめたまま、立ち上がる事が出来ない彩芽の顔をまじまじと見つめる女性。

その女性の顔とよく似ている。いや、同じだ。

「お、お久しぶりです、東さん。」

東…まさか、あの女性が篠ノ乃東博士だったとは思ひもしない彩芽。
「うんうん。おひさだね。本当に久しいね。ところでいっくん。箒ちゃんはどこかな？さっきまで一緒だったよね？トイレ？」

キョロキョロと当たりを見回す篠ノ乃博士。

そして、彩芽と視線がぶつかる。

「お！お！君は、あの時の少年やあやあ、君もおひさだね！元気になったんだね！良かったよ！それじゃ、箒ちゃん探してくるから！じゃあね〜！」

ばんばんと肩を二回叩き、陸上選手も真っ青な速度で走り去る篠ノ乃博士を呆然と見ているしかなかった織斑と彩芽、空気に溶け込んだオルコットの3人だった。

「しかし、東さんが彩芽を知ってたなんて驚きだよ。」

更衣室に辿り着き、着替えはじめる織斑と彩芽。

「今の今まで、僕も忘れてましたからね。」

思いだそうとするが記憶が千切れたフィルムをつなぎ合わせたように飛び飛びで全容が掴めない。

「なあ、彩芽。三年前の事故の事、聞かせてくれないか？」

織斑がシャツを脱ぎながら彩芽を見る。

「あまり、よく覚えていませんよ…。三年前…」

桜吹雪が舞い散る夜道を、走る車の後部座席に仲良く並ぶ彩芽と芽依。

運転席と助手席に座る父、母は楽しそうに彩芽と芽依話をしている。不意に芽依が彩芽に話し掛け、彩芽が芽依の方を向いた。

その瞬間に閃光が走り、運転席と助手席が吹き飛び、炎が上がる。前輪とエンジンを失った車は錐揉みしながら、玩具のように跳ねる。爆発で飛んできた破片が彩芽の左腕を引きちぎる。

吹き出す鮮血。

芽依はその光景を目にし、叫ぶ。

そこで記憶は飛び飛びになる。はっきりと意識を取り戻した時には病院の天井があった。

「原因も何も分からないままです…。なぜ、僕だけ生き残ったのか、どうして姉さんのISを僕が使えるのかもです。」

上着を脱ぎ、待機状態の黒帝を外す。

「ひとつ、わかっているのは、左腕は元々、姉さんの腕だったって事です。」

上腕部の生々しい傷痕を強く握る彩芽。

「そうだったのか…でも、彩芽が生きてて良かったよ。死んでたら、今、この瞬間、俺は一人で女子だらけの海へ行かなきゃいけなかった訳だしな。」

真剣な顔を一瞬で柔らかい笑顔に帰る一夏。

「全く、君には勝てませんね。」

黒帝を腕に戻し、水着を着る。

「さあゝ、海だ！海だ！」

海水パンツに着替えた織斑はパーカーを羽織り、歩き出す。

「行きますよ、織斑君。」

「ああ！いざ、戦場へ！なんてな！」

更衣室の扉を開け、真夏の日差しの中に足を踏み入れるふたりだった。

「あ、織斑君と神代君だ！」

「う、うそっ！私の水着変じゃないよね！？大丈夫だよね！？」

「わ、わゝ、二人とも体かつこいゝ。鍛えてるねゝ。」

「織斑君、神代君、あとでビーチバレーしようよゝ。」

浜辺に出てすぐに女子数人と出会う。

「おー、時間あればいいぜ。」「では、僕は一足先にビーチバレーに参加させてもらいますよ。では、織斑君、後で。」

軽く手を上げ、ビーチバレーのコートへ向かう彩芽。

「神代君は、ビーチバレー強いの？」

ボールを軽く投げる織斑さん。

「どうでしょうか。やってみないとわかりませんよ？」

ボールを受け取る彩芽の目が光る。

「自信有りって訳ね。」

太陽の熱を吸収した砂浜は彩芽と織斑さんの闘気で更に熱を上げた。

それから数十分後：

「やりますね、織斑さん…。」「汗だくの彩芽。」

「神代君こそ…やるわね。7月のサマーデビルと呼ばれた私と対等にやり合うなんて…ここは一時休戦といきましょう。」「

肩で息をする櫛灘さん。

「ええ、構いませんよ。何か飲み物を買ってきますよ。何がいいですか？のほほんさんもどうですか？」

額の汗を拭う彩芽。

「おう、私、サイダー。」

のほほんさんは水着かどうかあやしい着ぐるみで飛び跳ねる。

休憩を終えた頃、織斑とデュノア、ボーデビツヒが話しているのを見つけた彩芽。

「織斑君！」

「さっきの約束！ビーチバレーしようよ！」

「わー、おりむーと対戦ー。ばきゅんばきゅーん。」

のほほんさん、櫛灘さん、彩芽は三人で片側のコートに立つ。

「じゃ、こっちはシャルとラウラでちょうど三対三だな。うし、はじめようぜ。」

10点ワンセットの試合が始まる。

さらに数十分後：

初球がラウラに直撃するアクシデントとラウラが脱兎のごとく海に走りさった以外は問題なく試合は進んでいく。

2セットが終わった時、ちょうど良くお昼の時間になった。

「うーむ：1対1か。」

織斑が唸る。

「どうもきりがよくないですねえ…。」

白黒はつきりしない事が気に入らない彩芽。

「ねえ、ところで、一夏と神代君は結局どこの部屋だったの？」
デュノアが織斑に尋ねる。

「あー、それ、私も聞きたい！」
興味津々の櫛灘。

「わたしも。冷たい床情報は共有しよう。」

のほほんさんの言葉にデュノアと櫛灘。

「えーと、織斑先生の部屋だぞ。」

夏の熱気が凍りつく。

「ですから、遊びに来るのは危険かと思いますよ。レベル1の勇者が装備なしで魔王の居城に殴り込むくらい危険です。」

「そ、そうね…。わざわざ鬼の寝床に入らなくても、食事の時間に会えるもんね…。」

その時、織斑の頭が鷲掴みにされる。

一同の首が軋んでいるかのようにぎこちなく動く。

「誰が魔王だ？鬼だ？」

「お、織斑：先生…。ご機嫌麗し：しゅう…。」

彩芽の顔がぎこちなく笑う。

「おう：神代、織斑、勝負がついていないようだな。いい物があるぞ。ほれっ。」

真っ赤な小さな旗を砂浜に突き刺す。

「ビーチフラッグスだ。どうだ？うってつけの勝負だろう？ちなみに負けた方は昼食後、特別に遠泳を許可しよう…とりあえず、五キロだな。嬉しいだろう？」

「「あ、ありがたき幸せ…。」」

彩芽と織斑は二人して跪く。

旗に足向けよう彩芽と織斑はうつ伏せになり、手を顎の下に組み、スタートの合図を待つ。

「よし、はじめ！」

織斑先生の合図の瞬間、立ち上がり旗に向かって全力疾走の二人。足の裏が焼ける感覚すら感じない程の全力疾走。

「おおおおお！」

「はあああああ！」

同時に跳躍し、旗に飛び込む。
舞い上がる砂。

旗を手に立ち上がる人影。

「取ったあああああ！魔王の弟、討ち取ったいいいい！」
旗を掲げる彩芽。

「ほう…よっぽど、織斑と遠泳したいようだな、神代。安心しろ、
ばっちりやらせてやるからな。」

織斑先生の口元は笑っているが目は全く笑っていなかった。

「彩芽、やっちゃったな。」

織斑は仲間が出来たとニヤリと笑った。

ばっちり、遠泳を泳ぎきり、気が付くと夕食の時間になっていた。
彩芽は席に着く前に櫛灘に声をかけられ、テーブル席で夕食を食べ
る。

「いやあ、身体を動かした後の食事は格別ですね。」

カワハギの刺身を醤油に軽くつけ口に運ぶ、彩芽。

「ほんと、おいしいよね。日本人で良かった。」

同じようにカワハギを口に運ぶ櫛灘。

座敷で食べている生徒が騒ぎ出す。

「あー、セシリアいいなあ。神代君、私も食べさせて。あーん。」
餌を待つ雛鳥の様に口を開ける櫛灘。

「食べさせてあげたいのですが、止めておいた方がいいのでは？」
周りの目が殺気立っている事を一瞬で察した彩芽。

「それに…ほら。」

いきなり、ふすまが開き、織斑先生が入ってくる。
注意される座敷組。

「あはは、止めといて正解だったね、あはは…。」
大人しく、自分で食べる櫛灘だった。

「いや、いい湯でしたね、織斑君。」

「まったくだな。二人だけであんなデカイ風呂って贅沢だよな。」
浴衣の肩からタオルをかけた彩芽と織斑は上機嫌で部屋にもどる。

「織斑先生がいませんね。」

「そうだな。なあ、彩芽、ゲームやらないか？」

テレビの下にあるゲーム機を指差す。

「いいですね、お相手しましょう。どうです？ 負けた方が勝った方にジュースをおごると言うことで。」

電源を入れる二人。

「面白そうだな。やってやるぜ。」

落ち物ゲームを始める二人。

その時、織斑先生が部屋に戻ってきた。

「ん、なんだ、二人してゲームか。詰まらん奴らだ。神代、櫛灘と今日はずいぶん仲良くなったみたいだな。」

少しニヤニヤする織斑先生。

「そうですね。織斑ーズのメンバー以外では今一番仲のいい友達ですかねえ。さて、僕は鍛錬に行きますので、姉弟で仲良くやってくださいね。」

さっさと着替えを済ませ、部屋を出る彩芽。

姉弟の時間も必要だろうと気を利かせた彩芽だった。

遊歩道を軽く走り、筋トレと頭の中で相手の動きを想定しながらの一人組み手をこなし、ロビーに戻ってきた彩芽。

「かーみん、かーみん、トランプしよう。」

ラウンジにのほほんさんと櫛灘を含め、4、5人のクラスメートが固まっていた。

「トランプですか…いいですよ！」

ラウンジに向かう彩芽。

「大富豪ですね？」

櫛灘の手札を覗く。

「そうそう…あ、私、パス。」

Kでパスする櫛灘。

「なかなか厳しい手札の様ですね。」

3と10となけなしのAが一枚。

「そうなんだよね。ああ…また、大貧民だよ。」

手札を置く櫛灘。

「じゃあ、僕も混ざらせてもらいますよ。」

トランプを手際良くまとめ、切り、配る彩芽。

「あら、トランプですか。私も少し混ぜて下さい。」

山田先生が現れる。

「どうぞ、どうぞ。」

こうして、就寝時間ギリギリまでロビーで熱い大富豪が行われたのは言うまでもない。

〔第五話 Ocean's Eleven〕 (後書き)

オリジナルのメンバーがもうすこし出てきたらキャラ紹介書きます
)。

〔第六話 Secret・Operation〕（前書き）

どうも、作者です。

今回はシナリオをほぼ遵守のため・・・台詞が・・・3巻そのまま・

・

やばいですか？やばいですよね？

〔第六話 Secret・Operation〕

太平洋沖…メルティス重工兵器研究島。

「おはようございます。東条先輩。」

ぱっちりとスーツを着こなした青年が部屋に入ってくる。

「おはよう、北川。いよいよ、最終日だな。」

同じようにスーツを着た30歳前後の男が窓際の席から立ち上がる。

「先輩、俺…。」

俯く、北川。

「お前はまだ若い。まだまだ、可能性があるんだ。この選択は正しいと思うぞ。」

軽く北川の肩を叩く、東条。

「ありがとうございます。」

深く頭を下げる北川。

「まずは…朝飯にしよう。」

廊下に出る。

二人は廊下を歩き、食堂に向かう。

「俺、日本に戻ったら、夢だったバーを始めようと思ってるんです。場所も決めて、準備してたんですよ。」

北川は楽しそうに自分の夢に向かって歩む様話す。

「そうか。なら、盆休みに少し飲みに行かせてもらおうかな。」

その姿を心の底から喜ぶ東条だった。

「もちろん。待ってます。」

にこやかに笑う北川。

次の瞬間、なんの前兆もなく吹き飛ぶ窓ガラス。

遅れて聞こえてくる轟音。

窓の外には全身が銀色の世界最高水準の兵器、ISが佇んでいた。

「La…♪」

抑揚の無い電子音声が歌う。

次の瞬間、放たれる無数の光の弾丸。

次々と二人に向かって降り注いで行く。

ありとあらゆる物が爆発し、粉々になる。

光の弾丸がなくなった時、銀色の翼を持った悪魔は再び、歌う。

「La…♪」

一度大きく翼を羽ばたかせ、大空をぐるりと一回転する。

「北川！北川！」

名前を叫ぶ東条の声に北川は返事をしなかった。

「IS：あいつが…北川が何をしたって言うんだ…」

強く拳を握ろう。

「潰す…あいだけは、ぶっ潰す！」

東条の胸が赤く光り、全身を包み込む。

光が消え去った時、既に東条は空を翔る一陣の光になっていた。

「しかし、ボーデビツヒさんが遅刻とは、今日はなかなか波乱に飛んだ一日になりそうですね。」

彩芽はボーデビツヒが答えているコア・ネットワークの説明を聞きながら呟く。

「不吉な事言うなよ、彩芽。」隣で同じ様にボーデビツヒの説明を聞く、織斑が返す。

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう。」
そう言われ、胸をなで下ろすボーデビツヒ。

「ところで、男子二人、次、無駄口を叩いたら…わかっているんだろうな？」

ギロリと彩芽と織斑を睨みつける。

「はい、すみませんでした。」

小さく縮み込む二人だった。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え。」
一同が同時に返事し、作業に取り掛かる。

「さて、専用パーツのない僕達はいつも以上に入念にメンテナンスしますか。」

意識を集中させ、黒帝を呼び出す。

その時、地響きが起き始める。

「ちーちゃ~~~~ん!!!」

砂煙を巻き上げながら走ってくる人影。

ハイパーセンサーで捉える。

篠ノ之束、その人である。

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあハグハグしよう！
愛を確かめ：へぶっ」

飛びかかった篠ノ之博士の顔面を鷲掴みにして受け止める、織斑先生
指が顔にめり込んでいる。

さすがはブリュンヒルデと関心する彩芽をよそに、織斑は織斑先生
のアイアンクローに戦々恐々としている。

過去によっぽどキツイトラウマがあるのだろうか
と彩芽は青ざめた織斑の顔から察する。

しかし、その完璧に決まったアイアンクローから意図もたやすく抜
け出す、篠ノ之博士。

「博士もかなりのやり手のようですね。」

軽く着地した博士は実の妹、篠ノ之箒の方を向く。

「やあ！」

「：どうも。」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おっ
きくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが。」

博士の頭の上に刀の鞘が振り下ろされる。

「殴りますよ。」

「既に殴ってますよ、篠ノ之さん。」
ついつい、突っ込む彩芽。

二人のやりとりを一同は眺める他ない状況である。

「はあ…。一年、手が止まっているぞ。こいつは無視してテストを続ける。」

その一言にきびきびと動き出す一年生達。

「ところで、頼んでおいたものは…？」

ためらいがちに篠ノ之が尋ねる。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

博士が空を指差す。

その指先に広がる空を見上げる一同。

次の瞬間、激しい衝撃が一同を襲う。

空から紅色の金属の塊が降ってきた。

砂埃が落ち着くや否や、紅色の金属は正面の壁を自ら開き、その中身を一同に見せる。

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

真紅の装甲を持つ機体は太陽の元でさらに輝きを増す。

「現行ISのスペックを超える機体…つまり、最高性能の機体ですか。しかも、最新鋭機。」フィッティングとパーソナライズが始まる。

高速で空中投影キーボードを6台同時に操作する博士。

既にフィッティングは終了しており、パーソナライズの作業が高速で進められていく。

次々に切り替わる画面すべてに目を通し的確な指示を飛ばす。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの？身内ってだけで。」

「だよねえ。なんかずるいよねえ。」

彩芽の隣にいた女子達が話し始める。

窘めようと彩芽が口を開こうとした瞬間、博士が反論する。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ。」

そう指さすが、反対の手は止まることはなく、キーボードを叩き続けている。

博士の発言は言い方はキツイもののその通りだと感じる彩芽だった。

「あとは自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくんと事故の子、白式と黒姫…じゃなかった、黒帝見せて。束さんは興味津々なだよ。」

「構いませんよ。」

前に出る彩芽。

織斑も白式を展開する。

「じゃー、いっくんからデータ見せてね。うりゃ！」

白式の装甲にコードを突き刺し、ディスプレイを展開し流れてくるデータを読み取る。

「ん…」不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろう？見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな？」

そう言いながらも動く手は動き続ける。

ちなみにフラグメントマップとは人間の遺伝子のような物だ。「束さん、そのことなんだけど、どうして男の俺と彩芽がISを使えるんですか？彩芽も気になるよな？」

織斑が彩芽を見る。

「確かに。気にはなりますね。分かりますか？博士？」

織斑と彩芽は同時に篠ノ之博士を見る。

「ん？ん…どうしてだろうね。私にもさっぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、いい？」

織斑と彩芽の顔を交互に見る篠ノ之博士。

「いい訳ないでしょ…。」

「分解は遠慮します…。」

「にゃはは、そう言うと思ったよん。まあ、自己進化するように作

ったから、こういうこともあるよ。あっはっはっ。」

笑い飛ばす篠ノ之博士。

「さてさて、次は事故の子の番だね。」

彩芽を見る篠ノ之博士。

「事故の子ですか：僕は神代彩芽と申します。お見知りおきを。」
深々と頭を下げる彩芽。

「ふむふむ、なかなか、礼儀正しいね！気に入ったよ、彩芽君だからさいっくん。」

いっくんとさいっくん：売れない芸人のような名である。

「あはは、さいっくんですか。」

少し引きつった笑顔の彩芽。

「さあさあ、さいっくんの黒帝もサクツと見せてもらおうよ。」

黒帝の装甲にコードを突き刺し、データを引き出していく博士。
ディスプレイが、空中に6つ投影される。

どれひとつとして彩芽の理解できる物はなかった。

「うーん。かなりおかしなフラグメントだねえ。しかも、色んな所にガタが来てる。君がこの子に無理をさせたなら、束さん、ぶんぶんだよ！」

彩芽にそう言いながらも、手は止まる事はない。

「無理をさせた覚えは無いんですが、すみません。」

何故か頭を下げる彩芽。

「ねえ、さいっくん、折角だから、この子、レストアしちゃう？そうだね、それがいいね、さすがは天才束さん！」

パチンと指を鳴らす。

「あの、まだ、返事はし…」

再びの強い衝撃と砂埃に彩芽の言葉は途切れる。

落ちてきたのは黒い大きな箱だった。

「今度はなんですか？」

彩芽は口の中に入った砂を吐き出しながら博士に問い掛ける。

「今日は、箒ちゃんの『紅椿』を届けに着たついでに、さいっくん

の新しいパッケージを持ってきたんだよねえ。さらにさらに追加でレストアまでしてあげちゃうなんて、至れり尽くせりだね。」

にっこりと笑う博士の笑顔は無邪気な子供のものであり、美しい淑女のようでもあった。

「さあさあ、始めるよ。さいくん、一回、降りて降りて。」

コードを黒い箱に差し直す博士。

「分かりました。」

展開したまま、黒帝から飛び降りる彩芽。

「OK。さくさくつと終わらせるねえ。」

黒い箱からマシンアームがせり出し、黒帝を箱に収容する。

箱のディスプレイには「しばらくお待ち下さい」とだけ書かれており、中の様子は伺えない。「あー、ごほんごほん。」

箒が咳払いする。

「こっちはまだ終わらないのですか？」

「んー、もう終わるよー。はい、5分経った。んじゃ、試運転も兼ねて飛んで見てよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ。」

「ええ、それでは試してみます。」

エアの抜ける音と同時に接続されていたケーブルが外れていく。

目を閉じ、篠ノ之が意識を集中させた瞬間、紅椿はもの凄い速度で飛翔する。

ハイパーセンサーの使えない彩芽の目には一瞬で消えたように見えた。

さらには、武装の試運転を開始する。

彩芽には殆ど見えていないが。

ミサイルポッドから次々と発射されたミサイルを一撃で全て粉碎して見せる篠ノ之と紅椿に全員が魅了され、言葉を失う。

「たっ、大変です！お、おお織斑先生！」

博士を厳しい目で見っていた織斑先生は山田先生の方を向く。

「どうした？」

「こ、こっ、これをっ！」

山田先生が織斑先生に小型端末を渡す。
画面を見た瞬間、織斑先生の顔が曇る。

「特命任務レベルA：現時刻より対策をはじめられたし…。」

「そ、それがそのハワイ沖で試験稼働をしていた…」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる。」

山田先生をたしなめる織斑先生。

「す、すみませんっ…」

慌てて口を閉じる山田先生。

「専用機持ちは？」

「ひ、ひとり欠席していますが、それ以外は。」

会話から手話に変わったのを見て彩芽は事の重大さを認識し始める。

「なあ、彩芽、これって…」

織斑も気が付いたようだ。

「ええ、かなりまずい事が起きているんでしょう。」

そんな会話をしていると織斑先生が急に声を大きくする。

「全員、注目！」

ざわめいていた生徒が一斉に話を止め、織斑先生を見る。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動に移る。各班、ISを片付けて旅館に戻れ！連絡があるまで各自室内で待機する事！以上だ！」

不足の事態にざわめき出す女子。

「とっとと戻れ！許可なく室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！」

「「はいっ！」「」」

織斑先生の一喝で全員がバタバタとISを片付けて行く。

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、デュノア、ボーデビツヒ、凰！それと篠ノ之、神代も来い！」

「はい！」

気合いの入った返事を篠ノ之がする。

「篠ノ之さん…大丈夫でしょうか？」

織斑に言い知れぬ不安を吐露する彩芽。

「分からない：でもやるしかないだろう？」

心配そうな顔をする織斑。

「そうですね：行きましょう。」

織斑先生の後をついて行く専用機持ち達だった。

「では、現状を説明する。二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS」「シルバリオ・ゴスペルが制御下を離れて暴走。管理空域を離脱後、メルテイス重工の兵器開発島を襲撃したと連絡があった。」

一瞬間を食らってポカンとする織斑の腕にに軽く肘をぶつけて意識を呼び戻す彩芽。

全員の厳しい顔付きにさらに驚いた織斑をよそに織斑先生は淡々と話を進める織斑先生。

「教員は訓練機で空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう。それでは、作戦会議をはじめめる意見があるものは挙手するように。」

「はい。」

オルコットが手を挙げる。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します。」

厳しい顔付きを変える事なくオルコットは言い切った。

「わかった。ただし、これらは最重要機密だ。けて口外するな。したときは諸君は査問委員会による裁判と二年以上の監視が着く。」
「了解しました。」

開示されたデータを元に会議が進んでいく。

現在、ISのレストア中の彩芽は小型端末を見ている。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型：わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね。」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから向こうが有利。」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ。」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。」

「データを見るだけで僕の黒帝ではかなり分が悪いようですね。なんとか盾くらいにはなれそうです。」

彩芽、オルコット、凰、デュノア、ボーデビツヒは意見を交わしあう。

「偵察は行…えないんでしょうね、きっと。」

彩芽はスペックを再確認して口を閉じる。

「無理だ。現在も超音速飛行を続けている。アプローチは一回が限界だろう。」

「一回きりのチャンス…ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね。」

山田先生の言葉に全員が織斑を見る。

「え…?」

自分を指差し、彩芽を見る織斑。

「ええ、貴方ですよ。」

「あんたの零落白夜で落とすのよ。」

「それしかありませんわね。ただ、問題は…。」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか。」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけない。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう。」

5人は既に作戦を練り始めている。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし、覚悟がないなら無理強いはいしない。」

「その時は、僕にやらせてもらえませんか…やれる事を」

そう彩芽が言うのを遮り、織斑が喋り出す。

「やります。俺がやってみせます。」

彩芽は織斑の顔を見る。

先ほどの及び腰ではなく、戦う気力に溢れた顔をしていた。

「よし、それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

その時、ディスプレイに警告の文字が表示される。

薄暗い仮指令所は赤く照らされる。

「何事だ！」

織斑先生が山田先生に問い掛ける。

「えっ、えっと、シルバリオ・ゴスペルの後方に新たな機影を確認…アンノウンです！」

シルバリオ・ゴスペルの速度に追いつかない物の、超音速で飛行する機影がもう一機現れたのだ。

「一機だけでも厄介なのに二機か…厄介な事になった。」

織斑先生が腕を組み、踵を返す。

「では、アンノウンは僕が落とします。」

「しかし、お前の機体は、今レストア中だろう。」

織斑先生が彩芽を見る。

「いえ、もう大丈夫のようですよ…そうでしょ？、篠ノ之博士。」

天井に話しかける彩芽。

「はっはっはっ。バレてたか。」

天井から博士の頭が逆さに生える。

「山田先生、室外への強制退去を。」

「とうっ★」

軽やかに着地する博士。

「ちーちゃん、ちーちゃん。いい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！聞いて聞いて！ここは断・然！紅椿の出番なんだよっ！」「なに？」

思わず、手を話す織斑先生。

「紅椿のスペックデータ見てみて！パッケージなんかなくても超高速機動が出来るんだよ！」数枚の空中投影ディスプレイが織斑先生を囲む。

「パッケージなしで…と言うことは…。」

山田先生が呟く。

「第四世代…」

ボーデビツヒが続ける。

現在第三世代のIS開発に世界が躍起になってかかっているにも関わらず、博士は机上の空論である第四世代を既に完成させた事になる。

「にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい。」

「束、やりすぎるなど言っただはだぞ。」

一瞬の沈黙を破り織斑先生が篠ノ之博士を睨む。

「そうだった？えへへ、ついつい熱中しちゃったんだよ。あと、さいくん、お待たせ。天才・束さんの特別フルチューンだよ！さらにさらに、君の黒帝の専用パッケージもインストール済みだからいけるはずだよ。」

黒い腕輪を彩芽に手渡す博士。

「色々、ありがとうございます、博士。」

頭を下げる彩芽。

「そのパッケージはさいくんのお姉ちゃんが使うはずだった『キヤノンボール・ファスト』専用パッケージの疾風を改造した物だから、しっかり使いこなしてね。」

「はい！」

身が引き締める彩芽。

「よし！では目標の追跡及び撃墜は織斑、篠ノ之、神代に行って貰う。」

「ちょっと、待って下さい、わたくしとブルーティアーズでも超高速戦闘は可能です。それに、神代さんは全く訓練をしていないずぶ

の素人ですわ！」

オルコットが声を荒げる。

「そのパッケージはインストールしてあるのか？」

「それは…まだですが…。」

痛いところを突く織斑先生の言葉に勢いを失うオルコット。

「では、作戦開始は30分後だ。各員は直ちに準備にかかれ！」

織斑先生が手を叩くのを合図に各員が準備に取りかかる。

彩芽は機材の搬入に取りかかる。

「神代。お前はオルコットから高速戦闘のレクチャーを受けろ。」

「了解です。」

機材を指示された場所に運び、オルコットを探す彩芽。

オルコットから織斑がレクチャーを受けていた。

オルコットの顔は華やかで、まさに、恋する乙女を代表するようだった。

「これは入り辛いですね…。」

しばらく様子を見る彩芽。

すると、凰、デュノア、ボーデビツヒ、さらには山田先生までが乱入する。

「まったく、あの人達は…。」

やれやれと彩芽は頭を横に振る。

「おーい！彩芽！こっち来て高速戦闘のレクチャー一緒に受けようぜ！」

織斑が彩芽を見つけて手招きしている。

「今、行きます！」

彩芽は笑顔で掛けていく。

必ず、作戦を成功させると決意を新たにして。

〔第六話 Secret・Operation〕（後書き）

冒頭はオリジナル要素です。
次回、決戦！

〔第七話 Fall・White〕（前書き）

どうも、作者です。

第七話です。

読んでいただいてる方々には大変感謝しております。
どうぞ、これからもご贔屓に。

〔第七話 Fall・White〕

午前11時半

7月の晴れ渡った空の下、織斑、篠ノ之、彩芽は砂浜に並んでいる。

「彩芽、なんか、1人だけ少し離れてないか？」

プライベートチャンネルで通信して来る織斑。

「どうしてかは直ぐに解りますよ。」

軽く返事する。

三人が目を合わせ、頷く。

「来い、白式。」

「行くぞ、紅椿。」

「行きますよ、黒帝。」

眩いの粒子が三人を包み込む。

0, 5秒。

まずまずの装着時間である。

「彩芽：随分、幅がデカイな…。」

一夏の顔が引きつる。

「ええ、さすがに、やり過ぎですね…。」

肩部から前方に流線に張り出したアーマーを装備し、背部に四機ある大型スラスターを肩部アーマーに二機ずつ接続している。

開いた背中の中には四機の大型プロペラントタンクを一機。

更に追加の大型スラスターを一機搭載している。

肩部アーマーの両側面には腕よりも少し長いくらいの戦闘機のような翼が折り畳まれている。

脚部は両側面に小型のフレキシブルバーニアが各一機ずつ装備されている。

「じゃあ、箒、彩芽。よろしく頼む。」

「こちらこそ、よろしく願います。」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回

だけは特別だぞ。」

彩芽は篠ノ之の様子がおかしい事にいち早く気が付く。

「織斑先生：篠ノ之さんは大丈夫ですか？浮かれているようにも見えますが…」

プライベートチャンネルで織斑先生に話し掛ける彩芽。

「うむ：浮かれているな。だが、篠ノ之の心配よりも、自分の心配をしろ。お前はアンノウンと闘う事になる：解っているとは思うが無理はするな。」

「了解です。やれるだけやります。」

「よし。死ぬなよ。」

プライベートチャンネルが切断される。

『織斑、神代、篠ノ之、聞こえるか？』

オープンチャンネルから織斑先生の声が聞こえる。

頷き返事をする三人。

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。アンノウンとの戦闘もある、短時間での決着を心がけろ。』「了解。」

織斑が返事をする。

「私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

篠ノ之の口調はやはりどこか弾んでいる。

何か嫌な予感を感じる彩芽。

「神代、大丈夫か？」

織斑先生に話し掛けられている事にハッと気が付く彩芽。

「大丈夫です。問題ありません。」

意識を集中する彩芽。

「では、はじめ！」

作戦開始。

同時に上昇するも篠ノ之の紅椿には瞬間加速速度が追いつかない黒帝は出遅れる。

「は、早い。」

イグニッション・ブーストと同等…もしくは、それ以上の速度であ

る。

目標高度500メートルに到達し、肩の翼を広げる。

「遅いぞ、神代。」

織斑、篠ノ之が上空で待機していた。

「すみません、暫時衛星リンク確立：情報照合完了。目標二機の位置確認。紅椿に情報転送。では、お先に行かせてもらいますよ！」
加速力の違いを目の当たりにし先行を決める彩芽。

全スラスターに火を入れ、加速を始める。

「私たちが前を飛ぶ、ダウンフォースを使って加速を維持しろ、神代。」

十分に加速したにも関わらずあっさりと黒帝を抜き去る紅椿。

「了解。」

真後ろにぴったりと着ける彩芽。

「アンノウン確認、一夏、神代、加速するぞ！接触は10秒後だ、集中しろ！」

全スラスターをフルブーストさせ、紅椿になんとか追いつがる黒帝。

「アンノウンを抜かずぞ！神代、気をつけろ！」

更に加速する紅椿。

「そちらこそ、ご武運を！」

アンノウンを抜かずやいなや急旋回してアンノウンに向かって正面から突貫する彩芽。

アンノウンを目視する。

全身を赤い装甲に身を包み、背中に二本の剣を搭載している。ISのように、手足が大型化している様子はなく、サイズも人間をほんの少し大きくしただけにとどまっている。

「止まって下さい！ここは現在、封鎖空域になっています！」

警告を促す彩芽。

「うるさい！そこをどけええええ！」

『アンノウン、所持武装のロック解除を確認、初弾装填。敵機よりロックオンを確認。』

電子音声が彩芽に伝える。

手に持っているライフルを構えるアンノウン。

「仕方ありません：こちらも行きます！」

ビームを発射するアンノウン。

「くっ！」

急速旋回するも右肩に被弾するアーマ―の表面装甲が熱で融解する。そのまま、突貫し彩芽がアンノウンのライフルを蹴り飛ばす。

空中を錐揉みしながら落ちるライフル。

「ちっ！」

アンノウンは舌打ちをして背中中の剣を抜く。

「止まって下さい！僕達は、命を受けてここにいます！あなたは違うはずだ！」

再び、呼びかける。

「何度も言わせるな！そこをどけ！目の前で部下を：やっと、自分のやりたいことをやれるようになった奴をあいっは、撃ちやがった！だから、あいっは、あいっだけは許せない！上司として、いや、1人の友人として！」

剣を構え、突撃してくるアンノウン。

「だからと言って、あなたのやろうとしている事は間違っています！」

同じように突貫する彩芽。

「邪魔をするなあ！」

正確に心臓の位置に向けて切っ先を突き出す、アンノウン。

体を微妙に動かし、切っ先を上手くかわす彩芽。

一進一退の攻防が続く。

彩芽のISでの実戦不足とアンノウンの実戦経験の差は歴然で、彩芽の古武術も軽くかわされる。

「もう一度言います、即座に停止して、この空域から離脱してください。」

彩芽は両手を大きく広げ、アンノウン：東条の前に立ちはだかる。

東条は目の前で両手を大きく広げた、ISのパイロットの黒いバイザー越しの瞳を見た時、北川がやってきた時の若く強い光を帯びた瞳を思い出し、ふと我に帰る。

「こちらはメルティス重工所属、オリジナル1。先ほどの攻撃を謝罪する。これより、この空域より撤退する。」

オープンチャンネルで告げ、剣を背中へのウェポンラックに戻す。

「ご理解感謝します。部下の方は残念でした。この事態は必ず、完全に関わらせます。僕と友人達の手で。」

強く拳を握る彩芽。

「そうか…頼んだ。俺は東条優吾だ。君の名前は？」

東条は彩芽に尋ねる。

「僕は、神代彩芽と申します。」

その名を聞いた時、東条は驚く。

しかし、その顔は、マスクで隠れており、彩芽は見えない。

「神代君か…。また、会うことになるだろう。その時、話せる事があったら聞かせてくれ…。それじゃ、武運を祈る。」

東条は踵を返し、空域から撤退していく。

「神代…彩芽…。貴女が俺に巡り合わせたのか？芽依さん。」東条は呟く。

誰もいない、青い青い空の真ん中で。

「神代、ご苦労だった。このまま、南西に迎え。織斑と篠ノ之が戦

闘中だ。援護に回れ。」

織斑先生からのプライベートチャンネル通信が入る。

「了解、直ぐに向かいます。」先ほど移動と戦闘で使用したエネルギーをプロペラントタンクから補強する。

『全タンク内エネルギーの消費完了を確認、パージしますか?』電子音声が返答を求める。

「パージを選択します。」

そう告げると接続されていた部位の炸裂ボルト爆発し、タンクが全てパージされる。

「さあ、行きますよ、黒帝!」スラスタを解放し、一気に加速する。

ハイパーセンサーが織斑と篠ノ之、シルバリオ・ゴスペルを捉える。

織斑の零落白夜を紙一重で避ける。

光弾の雨を紙一重で交わし、篠ノ之が隙を作るが織斑は海面に向かって全速力で向かう。

そこには居るはずのない船がいた。

光弾をかき消す織斑の手に持つ雪片式型の光は消え失せ、実態剣に戻る。

「くっ!もっと加速を!」

その時の二人の会話は解らないが、彩芽には一つ解っている事があった。

それはこれが実戦であるということだ。

シルバリオ・ゴスペルが戦意を無くした篠ノ之に照準が絞られる。

織斑はエネルギー切れ覚悟でのイグニッション・ブースト。

時間が引き延ばされていく。

一秒が十秒、十秒が三十秒になったようにゆっくりと織斑が放たれ

る光弾の雨の中に飛び込んでいく。

「ぐあああああつ！」

篠ノ之の庇うように抱きしめ、背中に光弾が降り注ぐ。
閃光が途切れた後、織斑は海へと落下する。

篠ノ之はその場で呆然と立ち尽くしていた。

「篠ノ之さん！織斑君の救出を！！！」

プライベートチャンネルでの通信を送るが反応がない。

加速したまま、海へ飛び込み、織斑を捕まえ、再び、上昇する。

「篠ノ之さん！しっかりして下さい！」

彩芽は篠ノ之に届けと大声で叫ぶ。

その声に篠ノ之はピクリと反応する。

「私は…一夏！一夏！」

篠ノ之の前で彩芽は傷付いた織斑を抱いたまま停止する。

「織斑君を連れて、離脱して下さい。」

織斑を篠ノ之に差し出す。

「だが…まだ、私はやれる！」目に涙を浮かべる篠ノ之。

「いい加減にして下さい！今の貴女じゃ何も出来ない！力に酔いしれ、溺れるだけでは何も出来はしない！早く、一夏を連れて、離脱して下さい！」

彩芽は篠ノ之にそう言い、踵を返す。

「一夏をお願いします。時間は稼ぎますから…。」

振り返る事なく、篠ノ之に告げる。

「すまない…離脱する。」

戦闘空域を離脱していく、織斑と篠ノ之。

いつの間にか、織斑を一夏と呼んでいた事に彩芽は気が付く。「さて、とりあえず、時間を稼がせて貰いますよ。」

シルバリオ・ゴスペルを睨みつける彩芽。

「La…♪」

電子音声が歌う。

スラスターの砲門が開き、一斉に光弾が発射される。

光弾の雨が彩芽に降り注ぐが彩芽は加速を止める事なく、シルバリオ・ゴスペルの突撃する。

光弾と光弾の間を縫う様に避ける。

しかし、次から次へと襲い来る光弾を全て避ける事は難しく、数発が彩芽に当たり爆発する。

爆発する度にエネルギー残量が削り取られていく。

しかし、怯むことなく、突撃する。

ついに、疾風の右肩アーマーが吹き飛ぶ。

「ちい！疾風をパージ！ノーマルモードに移行！」

炸裂ボルトが疾風を弾き飛ばす。

通常なら意識が飛んでいるようなターンやアップダウンを繰り返し、確実に接近していく。

右へ左へ、上に下、前、後ろ、ありとあらゆる方向へ回避する。

東海の雨が止む。

一気に接近し、シルバリオ・ゴスペルにキツく握りしめた拳を振り下ろす。

「はあああああ！」

拳を、彩芽の思いをシルバリオ・ゴスペルに打ち込んでいく。その時、シルバリオ・ゴスペルの砲門が開き、光弾の雨が彩芽を襲う。真っ白な光の中、あらゆる方向から襲ってくる衝撃をなんとか耐える。

シールドエネルギーの残量がみるみる減っていく。

200:100:50。

「おおおおおおお！届けえええ！」

拳を光の中になんとか打ち込む彩芽。

ゆっくりと進む拳がシルバリオ・ゴスペルを捉える。

小さな金属音がする。

次の瞬間、シルバリオ・ゴスペルが動きを止める。

「と…とまった？」

彩芽が呟く。

拳を引っ込める彩芽。

『なんとか、停止しようだな…ご苦労だった。急いで戻れ。』
織斑先生からの通信が入る。

「了解。それよりも、織む…一夏は大丈夫ですか？」

彩芽は織斑を一夏と呼ぶ事になんの違和感も覚えなかった。

友人として、戦友として背中を預けるに値すると彩芽が確信したからである。

旅館へ戻るため、シルバリオ・ゴスペルに背を向けた瞬間、一つの砲門が開く。

『敵機より、ロックオン確認。』

電子音声が彩芽の耳に届いた時には一発の光弾は彩芽の背中に着弾していた。

「うああああ!!」

背中で、光弾が爆発し、吹き飛ばされる彩芽。

『神代、大丈夫か！シルバリオ・ゴスペルは再び機能を停止した。

急いで戻れ、お前も今のままでは戦えないだろう。』

ダメージレベルがCに達するか否かの瀬戸際である事を示した文字がハイパーセンサーに表示されている。

「作戦は…失敗ですか…。」

彩芽は小さく呟く。

『ああ…失敗だが、みんなよくやった。もう一度チャンスが出来たんだからな。』

それだけを伝え、通信を切る織斑先生。

旅館に戻るだけで精一杯のエネルギーしかない。

「くそっ、くそっ、くっそおおおおお！」

彩芽はその場を後にするしかないのだった。

出発した砂浜に降り立つやいなや、黒帝は光の粒子に戻る。

「神代、大丈夫か？早く医務室へ！」

織斑先生のその声を最後に彩芽の意識は仄暗い闇の中に落ちていった。

メルティス重工研究島…

「北川…。」

集中治療室の前に座る東条。

「優吾：北川君を助けるには、SGコアを再び付けるしかない…北川君の状態からコアがなんとか再生してはくれるだろうが、コアとの融合が進み、取り外せなくなるだろう…。」

白衣を着た銀髪の白衣を着た東条と年の変わらない男性がそう言いながら東条の隣に腰掛ける。

「俺と同じ状態って事だな…。」

東条は左の胸に手を置く。

「ああ…どうする…このまま、死なせてやるのも、一つの手だぞ…。」

白衣の内ポケットからタバコの箱を取り出す。

「ここは禁煙だぞ…ヒューゴ。」

下を向いたまま、ヒューゴと呼ばれた白衣の男をたしなめる。

「おっと…どうするかは、お前が決める。だが、長くは保たないぞ…。友人として一つアドバイスだ…コアが融合しても違う生き方は出来る。」

タバコを内ポケットにしまい、立ち上がる、ヒューゴ。

「そうだな…ヒューゴ、頼む、俺は恨まれてもいい、北川を死なせないでくれ、俺はあいつの夢を叶えさせてやりたいんだ…頼む。」
白衣を掴む東条。

「分かった…すぐに準備に入る。お前は少し休め…奥さんが心配してたぞ。」

ヒューゴは軽く笑って見せ、集中治療室に入っていった。

「これで…いいよな…。」

床に歪んで写る自分に問いかける東条だった。

〔第七話 F a l l ・ W h i t e 〕 （後書き）

オリジナルキャラと兵器登場です。

次回のあと、キャラ紹介とI Sの紹介もします。
では、また。

〔第八話 **Dressy・White**〕（前書き）

どうも、作者です。

最近、暑いですね。

6月中にUPしようとかんばってましたが・・・気がついたら7月でした。

〔第八話　Dressy・White〕

三年前に家族で住んでいた家のソファ―に腰掛ける彩芽。
懐かしい柔らかさに身も心も預ける。

おもむろにテレビを付ける。

その時、リビングの扉が開く。「ただいま、彩芽。」

芽依が入ってくる。

「お帰りなさい。姉さん。」

彩芽は振り返り、芽依の顔を見る。

「彩芽、そのアイドル好きなの？」

五人組みがテレビで歌い踊っている。

「いや、そういう訳じゃないですよ。」

テレビを切り、ソファ―から立ち上がる。

「お茶を淹れますから座っていてください。」

なんとも居心地のいい空間に彩芽はずっとここに居たいと思う。

「彩芽…」

芽依が彩芽を呼ぶ。

「どうしたんですか？姉さん。」

振り返ると芽依は黒帝…黒姫を装着していた。

「ねえ、彩芽、あなたは、シルバリオ・ゴスペルに勝ちたい？」

気が付くと懐かしいリビングは既に消え去り、黒い薔薇の咲く庭園に佇んでいた。

「勝ちたいです…。僕は負けるわけにはいきません…親友の為に自分の為にも。」

彩芽は強く強く拳を握りしめる。

「そう…じゃあ、早く目を覚まさない。ここはあなたのいる場所じゃないわ…。」

庭園のゲートを指差す芽依。

「はい。行ってきます、姉さん。」

ゲートに向かい駆け出す彩芽。

「彩芽！あなたに、力を。」

芽依の言葉を遮り、彩芽が話す。「じゃあ、敵を倒す力じゃなくて、親友を仲間を守る力を下さい。敵を倒す力は、ここにありますから。」

振り返る事なく、強く握った拳を芽依に見えるように振り上げ彩芽は叫ぶ。

「行ってらっしゃい、彩芽。」

「行ってきます、姉さん。」

そう告げ、光の溢れるゲートの中を走り抜ける彩芽出会った。

「ん。」

ゆっくりと目を開ける彩芽。

「目を覚まして良かった。」

目の前には山田先生の顔が広がっていた。

「先生、どの位、意識を失っていましたか？」

体を起こすと体中に包帯が捲かれていたが、痛みは感じなかった。

「ちょうど、三時間位ですね。神代君はむちゃをし過ぎです。いくら、友達が危険だからといってあなたがやられたら助けた友達が悲しみます！」

山田先生の目には涙が溜まっていた。

「すみません：軽率でした。」座ったまま、頭を下げる彩芽。「山

田先生！大変です！」

他のクラスの先生が彩芽の病室に飛び込んで来る。

「どうしたんですか？」

部屋の入り口に体を向ける山田先生。

「一組と二組の専用機持ちが無許可で出撃しました！」

「どうして、そんな事に！」

山田先生他の先生は急いで部屋を出て行った。

隣では一夏が眠っている。

部屋の中には彩芽と一夏の二人だけになっていた。

「一夏はゆっくり休んでいてください：僕は行ってきます。」彩芽は布団を綺麗にたたんで襖を開けようと手を掛ける。

「一人でどこに行くんだよ、彩芽：いてて：俺も行くぜ。」

一夏の声に彩芽は驚き、振り返る。

「大丈夫ですか？一夏。もう少し、休んだ方がいいですよ。」一夏の隣に座る彩芽。

「休んでる場合じゃない：あいつがみんなが読んでるんだ：だから行かなきゃならないんだ：。」

ゆっくりと立ち上がる一夏。

「一夏もタフですね：まあ、僕も負けてませんけどね。」彩芽も立ち上がる。

「あれ、俺の事、名前で呼ぶようになったのか？なんか親友になつたみたいだな。」

一夏に拳を突き出す。

「まあ、この学園じゃ唯一の男友達ですからね、それに、戦友ですから。」

一夏の拳に彩芽が拳をぶつける。

「さあて、急いで行かなきゃな。」

「ええ、一刻の猶予も無いかもしれないからね：でも言うっておきますが、完全に命令違反ですよ？」

悪戯っぽく笑う彩芽。

「上等！って彩芽も指示もなしに戦闘するなってアンノウンに言ってたじゃないか。」

同じように悪戯っぽく笑う一夏。

「おっと、痛いところを突きますね：でも、あの人と約束したんですよ、この件は僕と僕の友人できちんと片を付けると。」「そっか、じゃあ、約束も護らないとな！」

声を出して笑う二人。

襖を同時に開き、綺麗に整えられたら日本庭園に降りる二人。

お互いの顔を見て一度だけ頷く二人。

「来い！白式！」

「行きますよ、黒帝！」

同時に機体を呼び出す二人。

一夏の白式は戦闘前に見た形と形状が変化している。

スラスターが二機から四機になり左腕には多機能腕部、『雪羅』が装着されている。

「一夏、白式の形状、変わりましたよね？」

「ああ、どうもセカンド・シフトしたみたいだな。彩芽の黒帝もなんか肩の形状、変わったよな？セカンド・シフトか？」

データを確認する一夏。

黒帝は右肩と左肩にそれぞれ小型のシールドを装備している。

「いえ、これは戦闘経験値が一定を過ぎたので現れた追加武装の一つです：名を『阿吽』といいます。」

黒帝からデータが送られ、自分の装備している新しい装備を確認する。

「よし、行くぜ、彩芽。」

「ええ、行きましょう、一夏。」

同時に上空に飛び上がり、仲間の元へ向かう。

「そんな！白式と黒帝まで、無許可で出撃しました！」

山田先生は慌てふためく。

「馬鹿者ども！」

織斑先生は机を叩く。

ドンという思い音が暗い広間に広がる。

無許可で出撃した全員がプライベートチャンネル及びオープンチャンネルに制限をかけている。

「どうにも出来んな：奴らに賭けるしかあるまい…。」
織斑先生は静かに目を閉じた。

「捉えた！ 箒！！」

『雪羅』を変形させ、エネルギーをチャージする一夏。

「荷電粒子砲発射後一気に行きます。一夏は、篠ノ之さんの援護を！」

「了解、行くぜ！」

荷電粒子砲が発射される。

同時にイグニッション・ブーストをかける彩芽。

荷電粒子砲がシルバリオ・ゴスペルに直撃し、大きく態勢を崩す。

「はあっ！」

イグニッション・ブーストの加速力を乗せた蹴りをシルバリオ・ゴスペルの胸部に叩き込む彩芽。

スラスターですばやく態勢を立て直すシルバリオ・ゴスペル。

「まだまだあああ！」

更にイグニッション・ブーストをさらにかける。

膝蹴りを顎先に命中させる。

『敵機の情報を更新：攻撃レベルAで対処する。』

翼を大きく広げ光弾を一斉掃射する。

「何度も、同じ手は効きませんよ！ 阿吽を対エネルギー兵器モードで射出！」

彩芽の一言に反応して肩の接続ドッグから離れ、彩芽の廻りを浮遊する。

光弾の雨に向かって直進する。阿吽が降り注ぐ光弾を弾く。

光弾の雨を抜ける。

シルバリオ・ゴスペルを海面へ向けて蹴り下ろす。

「行きましたよ、一夏！」

「待たせたな！」

『雪羅』から零落白夜の爪が伸び、絶対防御に阻まれたものの着実にダメージを与える。

「よそ見している隙はありませんよ！」

彩芽が両拳で隙を作る暇なく、殴る。

シルバリオ・ゴスペルは態勢を崩したまま、スラスターを使い、彩芽の攻撃範囲を抜ける。

「俺を忘れるなよな！」

彩芽が距離を詰めようとした時、翼の砲門が開く。

「何度も何度も！」

左腕の『雪羅』が変形して光の幕を張る。

すべてのエネルギー攻撃が無効化される。

零落白夜のシールドだ。

『状況変化。最大攻撃力を使用する。』

翼がシルバリオ・ゴスペル自身に巻きつき、エネルギーの繭になる。

「一夏、まずいですよ！」

「分かってる！」

二人は同時に動く。

全方位へのエネルギー弾が降り注ぐ。

一夏は近くの凰に、彩芽は『阿吽』をデュノア、ボーデビツヒに、彩芽自身がオルコットの前に立ちほだかる。

「神代さん、これでもわたくしは代表候補生ですわ。」

「その通りだ、今、やるべきは私達を庇うことではないだろう。」

「言って、神代君、僕たちは大丈夫だから！」

彩芽は三人に背中を押される。

「了解。」

それだけを告げ、イグニッション・ブーストで光弾の中へ飛び込んでいく。

一夏も同じように飛び込む。

「はあああああ！」

「ぜらああああ！」

彩芽の一撃がシルバリオ・ゴスペルの動きを止める。
すかさず、一夏の零落白夜が翼を断ち切る。

2撃目は回避され、その間に翼が再構築され、光弾の雨が降り注ぐ。

「ちいっ！」

彩芽が後方に一度下がる。

エネルギー残量が10%を切っている。

「一夏、エネルギーが！」

「こっちもだ！」

二人が諦めかけた時、金色の輝きを帯びた『紅椿』が一夏の側で停止し、篠ノ乃が触れる。

「神代、お前のエネルギーも回復してやる。」

篠ノ乃が彩芽に触れる。

しかし、エネルギーは回復しない。

「どうなっている？なぜ、回復しない！」

篠ノ乃が何度も装甲に触れる。「大丈夫ですよ。今は一夏と目の前の敵に集中して下さい、箒さん。僕は下がります。一夏！頼みます！」

彩芽は後方へ下がる。

「任せてくれ、彩芽！」

力をなくしかけていた『雪片式型』の光刃は出力を上げ、大型化している。

一夏、箒の見事な連携を離れていく背中を感じる。

「お疲れ、神代。あんたもよくやったわ。」

凰が隣に並んで立つ。

「後は、あの二人に任せるしかない…悔しいがな。」

ボーデビツヒは上空で行われる戦闘を見つめる。

「僕たち、やれるだけはやったよね？」

デュノアがオルコットを見る。

「ええ、やりましたわ…必ず勝ちますわ、あの二人でしたら。」

オルコットも空を見上げる。

エネルギー弾を放つシルバリオ・ゴスペルに向かって、零落白夜の刃を突き出し、突撃する一夏。

エネルギー刃がシルバリオ・ゴスペルの胴体に突き刺さる。

「後、一撃！一撃入れられれば…。」

彩芽は呟く。

「神代さん…まだISの起動は出来ますわね？」

オルコットが彩芽をみる。

「はい、出来ますよ。でも、残量がほぼ皆無です。」

「十分だな、神代、黒帝を起動させろ。」

ボーデビツヒが近づいてくる。

「分かりました。」

彩芽が黒帝を起動させる。

「じゃ、しっかり受け取りなさいよ！神代！」

凰がISの腕だけを起動させ、一本のケーブルを出す。

「一夏を助けてあげて。」

デュノアも同じ様にケーブルを出し、黒帝に繋ぐ。

「こ、これは…。」

エネルギー残量が35%にまで回復する。

「デュノアさん、凰さん、ボーデビツヒさん、オルコットさん…皆さんの思い、受け取りました！」

彩芽がスラスターを展開し、ふわりと空中に舞う。

「ちょっと、神代！あたしの事は鈴って呼びなさいよ！名字だと違和感あるのよ！」

鈴が叫ぶ。

「では、私もラウラと呼べ！嫁の親友にはそう呼んでもらいたい。少し照れるラウラ。」

「じゃあ、僕もシャルロットでいいよ、彩芽！」

ニッコリと笑うシャルロット。

「なら、わたくしもセシリアとお呼びに下さいな。私も彩芽さんとお呼びしますので。」

髪をかきあげ笑うセシリア。

「分かりました。では、ラウラさん、シャルロットさん、鈴さん、セシリアさん、皆さんの力を借ります。」

そう告げ、一気にシルバリオ・ゴスペルの背中に向かって飛ぶ。

「いっけえええ！」

彩芽が拳を突き上げる。

「「はあああああ！」」

彩芽と一夏の叫びが一つになりこだまする。

白銀の鎧は光の粒子に変わり、スーツ姿のパイロットが彩芽の腕の中で意識を失っている。

「はあ、はあ、サンキュー、彩芽、最後は危なかったぜ。」

一夏が彩芽を見る。

「いえ、みんなの力を借りました…みんなで勝ち取った勝利ですよ。」

海に落とさないよう、しっかりとパイロットを抱き寄せる彩芽。

「終わったな。」

「ああ…、やっと、な。」

一夏の隣に箒が並ぶ。

気が付けば空は蒼から朱に変わっていた。

「作戦完了…と言いたところだが、お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるからそのつもりでいろ。」

「はい。」

彩芽達は既に30分以上も正座状態で織斑先生の有り難いお話を聞いている。

勝利の余韻を楽しむ暇はまったくの皆無である。

「あ、あの、織斑先生：そろそろ：このへんで：怪我人も：いますし、ね？」

怒り爆発の織斑先生とは反対に山田先生はおろおろしながらも救急箱や水分補給パックなどをせわしなく運んでいる。

「ふん：まあ、よくやった。全員よく無事に帰ってきたな。」背中を向けた織斑先生の背中には何か照れのようなものを見た彩芽だった。

その後、全員が検査を受け、夕食の時間になる。

彩芽は一夏の隣に座り、一口一口をじっくりと味わう。

「えーっと、醤油はーっと」

一夏が醤油差しを探している。

「これ、どうぞ。」

彩芽が醤油差しを差し出す。

「お、サンキューな、彩芽！」醤油を皿に注ぎ、刺身を一切れ、口に運ぶ。

口に入れた瞬間、顔色が変化する。

「いったたたたたっ！彩芽！わさび醤油！いってー！」

言葉にならない言葉を発し、水を一气飲みする。

「あははは。本当にかかるとは思いませんでした！あははは！」腹を押さえて笑う彩芽。

「お前も、味わえ！」

わさび醤油たっぷり刺身を一切れ、口に放り込む一夏。

「あはははっ：ぐっ：つつつつっ！やりましたね！」

彩芽も同じように水をがぶ飲みする彩芽。

その時、彩芽と一夏の真後ろの襖が開く。

「神代：織斑：大人しく飯は食えんのか：？大人しくなるまで、トレーニングでもしてもらおうか？」

背後の阿修羅に汗が噴き出す二人。

「「いえ、大丈夫です。」」

静かに食事をする二人の姿を見て一同が笑った。

風の吹き抜ける岬の手摺りに腰掛ける女性が一人。

木に身を預けるスーツ姿の女性が何かを話しているのを少し離れたところから見ている彩芽。

話の内容はよく聞こえないが、束が一人になるまで、身を潜めるつものの彩芽に不意に声がかけられる。

「神代：そこにいるんだろ？出て来い。」

織斑先生は最初から気が付いていたようだった。

「やれやれ：気付かれていましたか…。」

茂みから身を乗り出す彩芽。

「やあ、さいっくん：私に聞きたいことがあるんだよね？どうして、あそこにいたのか…。」

振り向く事なく、篠ノ乃博士が彩芽に声をかける。

「はい：聞かせて下さい、真実を。」

彩芽は篠ノ乃博士の背中を見つめる。

「あの時、私はさいっくんのお姉さんのISを回収しに行ったの：あれは危険な存在だったから。それ以上でもそれ以下でもない。まあ、あの変な女の人に回収はさせてもらえなかったけど…。」

脚をバタバタと振り始める。

「そうですか：では事故の瞬間は知らないと…？八脚のISについて知りませんか？」

彩芽は唯一思い出したヒントを絞り出す。

「束さんにも解らないかな。ごめんね。」

「いえ：ありがとうございました…。」

彩芽は踵を返す。

次の瞬間強い風が吹き、束の気配が消えた。

「神代：聞きたいことは聞けたか？」

「はい：十分ではないですが。」

織斑先生はそれだけを言い、彩芽を見送るのだった。

月の光が窓から差し込む部屋の中でベッドに突っ伏して眠る東条。

「先輩：先輩：。」

東条は目を覚ます。

「んっ：済まない、いつの間にか眠ってたようだ。もう大丈夫なのか？北川。」

目をこすり時計を見る。

時計は夜中の一時を指していた。

「ええ、もう大丈夫です：。」少し、上体を起こす、北川。

「すまない：こうするしか、方法が無かったんだ：恨むなら恨んでもいい：。」

東条は北川をしっかりと見る。

「何言ってるんですか：死んで全部終わりより、どんな状態でも生きてれば：どうにかかりますよ。」

北川は笑う。

「そうか：。今日、神代彩芽君に会ったよ：たまたまなのか運命なのか：。」

東条は再び床を見る。

「そうですか：三年前の話は：？」

北川は東条を見ている。

「話している余裕がなかった。話すべき状況じゃなかったからな：。」

「そうですか：完全に治ったら、会いに行きましよう：真実を伝える為に：。」

北川は拳を強く握る。

「ああ：そうしよう。」

東条は明るく照らす月を見つめ、決意を固める。

翌朝：

朝食後、ISと専用装備の撤収作業をこなす。

10時過ぎに作業が終わり、クラスメートはバスに乗り込み、出発の時を待っている。

彩芽も同じようにバイクに跨り待っている。

夏の炎天下、走っていないバイクの上は恐ろしく暑い。

「ねえ、君が織斑一夏くん？」突然後ろから声を掛けられる。

「いえ、僕は違いますよ。一夏ならバスの中です。」

ヘルメットを外し、バスを指差す彩芽。

「なら、君は神代彩芽くんね。へえ。」

ふわりと香る柑橘系のコロンがなんとも爽やかなイメージを演出している。

「もう、体は大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫よ。ありがとう。ちゅっ。」

頬にキスされる。

「え？あの？」

彩芽の頬が熱くなる。

「昨日のお礼よ、黒のエンペラーさん。ねえ、白いナイトさんはこのバスかしら？」

一組のバスを差す。

「ええ、そうですよ。」

彩芽は肯定する。

黒い帝だけに：肯定…。

彩芽は一夏の悪い癖が移ったと心の中で笑う。

「今のはあまり、面白くないわね。じゃあ、またね、バイイ。」
何故分かったのかと聞こうとした時にはバスの入り口に回り込んでいた。

それから数分後、バスの車内が騒がしくなり、やっぱりなど彩芽はヘルメットをかぶり、バイザーを下ろし、エンジンをかけるのであった。

〔第九話 **Black・In・Summer・Vacation**〕（前書き）

どうも、作者です。

一ヶ月ぶりでございます・・・。

言い訳聞いてもらえますか？

データ飛びました。

以上。

おまたせいたしました。人物紹介の前に本編UPします。
いよいよ、夏休みです！

〔第九話 Black・In・Summer・Vacation〕

8月、うだるような暑さの延長で暑い夜になっている。

ここは、一年食堂。

夏休みの為、半分以上の生徒が帰省しており、学園内は静かな物である。

そんな中、彩芽と一夏は夕飯をともにしている。

「やっぱり、暑い時は、熱いキムチ鍋だよな、彩芽。」

良く煮えた豚肉と白菜を鍋から器に移す一夏。

「いやあ、まったくですね。やっぱり夏はスタミナですね。」同じように器に移し、熱いまま口に運ぶ彩芽。

二人の額に浮かぶ汗。

滴る赤いキムチの汁。

女子ばかりの学園で女子が激減したせいかな、ここ一週間、彩芽と一夏は忘れかけていた男を取り戻すため、男臭い事を日々鍛錬と続けている。

炎天下の中、筋トレ、マラソン、ガリガリ君が当たるまで買い続け食べ続ける、模擬戦、格闘訓練、剣術、モモ鉄徹夜対戦：etc. この一週間で少しワイルドになった二人に廻りの女子は違和感を覚えるかと思いきや、これはこれでありと納得していた。

「さあ、最後の締めはどうします？僕はうどんなんですけど…？一夏は？」

箸を置き、水を一気に飲み干す。

「うどん？いやいや、ごはんだろう？」

最後の豚肉を口に放り込み、租借する。

「やはりですか…では仕方ありません、行きますよ？」

「臨むところ！行くぜ！」

「「最初はグー！ジャンケンポン！」」

彩芽はチョキ、一夏はパー。

「頂きましたよ！うどんふたたまお願いします！」

赤いスープにうどんが沈んでゆく。

「彩芽は、帰省しないのか？」

器に入ったスープを飲み干す一夏。

「帰りますよ、明日から。」

同じようにスープを飲み干す彩芽。

「明日からかよ！あっそうだ、俺も今度帰るから良かったら家に遊びに来いよ？」

鍋をかき混ぜ、うどんを取る一夏。

うどんはすっかり赤く染まっている。

「ええ、是非、行かせてもらいます。」

そうして、がつつりとスタミナを付け、夜は更けていく。

翌朝

「それじゃ、一夏、数日間空けます。何かあったら連絡下さいね。」
ポストンバックを背負い、扉に向かう彩芽。

「ああ、彩芽も気をつけろよな。あ、あと……いや、なんでもない。」

一夏は何かを言おうとしたが思い直し止める。

「言わなくてもわかってますよ。ちゃんと向き合うときが来たんだって。」

ドアを開く。

暑くなった空気が涼しい部屋の中に流れ込む。

「あ、そういえば、一夏、レポート提出してないんじゃないですか？」

先日提出しなければならなかったレポートが遅れていた事を思い出

す。

「あつ、しまった。出しに行くかな。」

机の上のレポートをクリアファイルに入れる。

「じゃー、途中まで一緒に行こうぜ。」

「ええ、構いませんよ。」

連れ立って部屋を後にする2人であった。

「さあ、僕はこっちですから、ここで。」

「ああ、そっか、じゃ、気をつけてな！」

軽く手を上げる。

「ええ、では、一夏も羽目を外しすぎないように気をつけて下さいよ。」

悪戯っぽく笑う彩芽。

「わかってるって！じゃあな！」

一夏も悪戯っぽく笑い職員室に入っていく。

それを見届け、校門向かって歩き出す。

校門に着き、ポケットに手をつ込み携帯を探す彩芽。

「あつ！しまった！」

枕の横のテーブルに置いたままだということに気が付き戻る。

廊下を戻り、部屋の前に着く。「失礼ね！とにかく、明日遅れん

じゃないわよ！」

鈴の声が廊下に響き渡る。

「あれ？鈴さんじゃないですか。こんなところでどうしたんです？ガッツポーズまで決めて。」

カバンを床に下ろす。

「彩芽！何でもないわよ！なんでも！あははは、じゃ、またね！」

スキップに近い足取りであつと言う間に姿を消す鈴であった。首を傾げながら部屋のドアを開ける。

「あれ？彩芽？どうした？」

一夏の右頬が腫れている。

「それはこっちのセリフですよ。鈴さんに何をしたんですか？」
やれやれと言わんばかりに首を振る。

「あはは…よく分らん。」

相変わらずの朴念仁ぶりに肩を落とす彩芽。

「まったく…貴方と言う人は…。携帯を忘れたので取りに戻ったんですよ。」

苦笑いを浮かべ、机から携帯を取りに再び入り口に向かう。

「あはは、そかそか。気を付けてな。」

「ええ、わかってますよ、十分に。」

軽く笑い扉を締め廊下を歩く彩芽であった。

再び、校門に向かって歩き出す。

窓から見えるグラウンドにはランニングで汗を流す生徒。

深い緑の葉をそよ風に揺らす木々。

いつもは、着替えや授業に向かうのに全力疾走で、景色をゆっくり楽しむ事があまりなかったせいかな、新鮮に見える気した彩芽。

ふと、腕時計を見る。

「さあ、少し急がないと行けませんね。」

結局、少し足早に歩いている事に苦笑いを浮かべる彩芽であった。

夏の日差しが容赦なく降り注ぐ校門の前に日差しをギラギラと反射する白いロールスロイスが一台止まる。

運転席からダブルのスーツを着こなした執事が姿を表し、後部座席のドアを開ける。

「やっと帰ってまいりましたわ。」

セシリアが太陽を眩しそうに見つめる。

「おや？セシリアさんじゃないですか。お帰りなさい。」

彩芽はカバンを担ぎなおしながら声をかける。

「あら、彩芽さん、帰省ですか？気を付けてくださいね。」

「ええ、ありがとうございます。」

「あら？そちらの方が織斑様ですか？」

笑顔の良く似合うメイド服の女性が彩芽を見る。

「いえ、僕は一夏じゃありませんよ。神代彩芽と申します。」カバンを置き、きっちりと礼をする。

「これはご丁寧に、私はセシリア様にお仕えするメイドでチェルシーブランドと申します。以後、お見知りおきを。それでは、荷物をお部屋に運びますので、失礼します。」

恭しく頭を下げるチェルシー。これがメイドかと、なぜか深く感心する彩芽であった。

「ん？お、セシリアと彩芽。彩芽、今日はよく足止めを食らう日だな。」

「まったくですよ。」

「よっ」

右手を上げて挨拶する一夏。

「一夏さん、一週間振りですわね。ごきげんよう。」

スカートを摘み、優雅に挨拶するセシリア。

そして、フリーズするセシリア。

「セシリア？」

一夏が心配そうに話しかける。

「はっ!？」

その時、彩芽の携帯が鳴る。

「ちょっと失礼します。」

一度席を外し、電話を取る彩芽。

「もしもし？先生。もうすぐ、学校を出ます。はい？ええ、分かりました。ではスーパーの前ですね。それじゃ。」

学校を出る時に連絡するのをすっかり忘れていた彩芽。

心配した秋穂がわざわざ連絡をしてきたのだ。

「それでは、僕は…」

「彩芽さん！少しお茶に付き合って下さいませんか？一夏さんと一緒に。」

彩芽の話を遮ったセシリアの笑顔はどこか不機嫌そうだ。

「いや、あの、僕にも予定が…」

「レディの誘いを、まさか、断るつもりではありませんわよねえ…？」

セシリアの背後に不穏な負のオーラが膨らむ。

「あ、いえ、よ、喜んで、お付き合いさせて頂きます…。」
結局、折れる彩芽であった。

ところ変わって、ここは秋穂の自宅である。

脱いだ衣服が床に転がり、コンビニ弁当の容器が机に散乱している。

「彩芽ったら、約束の時間、絶対に遅れる予定だったわね…。」

携帯をバックにしまい、唯一綺麗なソファアの上に寝転がり伸びをする。

テレビのリモコンを取り、チャンネルを回す。

特に面白い番組もなく直ぐに電源を落とす。

「ふう…。」

一息着いた時、自宅の電話が鳴る。

電話の相手に驚く秋穂だった。

「ね、ね、あれ、一年生の織斑君と神代君じゃない？」

「ホントだ！初めて生で見た！」

「やーん、可愛い。年下っていうのも、案外いいわね。」「私は神代君かなあ。なんか大人っぽくていいよねえ。」「神代君

の腕の筋肉すごい！細く見えるのに鍛えてる。出来たら全部見てみたい。」

そんな会話が聞こえよがしのように聞こえてくる。

が、彩芽はいかにこの居づらい席を立つかを模索していた。

セシリアはふてくされ面でカフェオレをかき回している。

そして一夏は困惑した顔でアイスレモンティーを飲んでいる。彩芽はその間に挟まれ、オレンジティーをちびちびと飲んではセシリアと一夏の顔を交互に見る。

逃げ場なし…。

彩芽はそう悟る。

時間はどんどん過ぎていく。

「いや、あのな？セシリア。どうしてそんなに機嫌が悪いんだ？…も、もしかして、俺のせいかな？」

一夏が意を決して口を開く。

「そうですね。」

「即答かよ…。」

うなだれる一夏。

再び訪れる沈黙。

涼しいはずの店内で冷や汗を流す彩芽と一夏。

長い沈黙…と言っても一分くらいだが、永遠にも等しいと言っても過言ではない。

その時、一夏が何かを名案を思いついたと言わんばかりの顔が彩芽を見る。

「セシリア。」

一夏が口を開く。

「…はい？」

チラッと一夏を見るセシリア。生唾を飲み込み、一夏とセシリアの顔を交互に見る彩芽。

「ここに行かないか？」

一夏がポケットから 何かのチケットを取り出す。

「：はい？」

チケットを見たセシリアの顔が一気に晴れ渡る。

「行かない：か：。」

チケットをポケットに戻そうとする一夏。

その手をがっしりと掴むセシリア。

「いえ！行きます！行きますわ！」

さっきまでと同じ人物とは思えないくらいの変わりようだが、十代の恋する乙女である。

「そ、そうか。良かった。」

にっこりと笑う彩芽。

「それでいつ行くのですか？」セシリアが手帳を取り出す。

「急で悪いんだけど、明日なんだ。待ち合わせはゲート前に10時な。」

一夏にしては積極的だなと思った彩芽だが、何か嫌な予感を感じ始める。

「わかりましたわ！明日の10時ですわね！必ず、必ず行きますわ！それでは一夏さん、彩芽さん！準備がありますのでこれで失礼しますわ！」

意気揚々とカフェを後にするセシリアの背中を見送る彩芽と一夏であつた。

「あ、まずい：そろそろ行かないと。」

あまりの気まずい空気に秋穂との約束をすっかり忘れていた彩芽。

「そうだったな。門まで送るよ。」

二人して席を立つ。

「一つ聞いてもいいですか、一夏。」

「なんだよ、彩芽。」

「さっきのチケット、よく手に入りましたね。かなり人気で手に入らないって聞きましたけど。」

その時、部屋の前でガッツポーズをしていた鈴の姿を思い出す彩芽。

「ああ、これ、鈴に買わされたんだよ。昔からそうなんだよなあ。」

「えっ？」

分かっていたとは言え、彩芽は驚く。

「昔もさあ」

「いやいや、そうじゃなくて、あげちゃまずかったんじゃない？」

「俺も行きたかったんだけどさ、明日なんか、白式のデータ取りた
いって山田先生に言われちゃってさ。だから、勿体ないからセシリ
アにあげたんだけど、なんかまずかったか？」

合理的と言えば合理的な解答に言葉を詰まらせる彩芽。

「いや、まずいと言えはまずいですが：一応、鈴さんに連絡してお
いた方がいいですよ。って：急ぎますので、失礼！」

走り出す彩芽の背中に一夏が声をかけるも、右手をふるだけの挨拶
で済みます。

駅まで全力疾走する。

駅の電光掲示板には一分後に発射する電車の文字。

駅の改札を抜け、階段を駆け上がり駆け下りる。

発車のブザーが鳴り響く中、車内に転がるように滑り込む彩芽。

『本日も当線特急をご利用頂きましては誠に：』

「と！特急！しまった！」

秋穂の家は特急の停まらない駅にあるため、完全に待ち合わせには
遅刻する計算になる。

降りるはずの駅が目の前を通過していく。

そして、駅がみるみる離れていく。

「あゝ、とりあえず、メール。」

携帯を取り出し、メールを送る彩芽。

あつと言う間に停車駅から4つ先の駅へ。

駅に到着し、扉が開くやいなや、全力疾走で隣のホームへ向かう。

なんとか、各駅に乗り込み、息を整える。

時計をみると既に待ち合わせ五分钟前である。

電車は焦る彩芽の心とは裏腹にきっちり安全運転で各駅に止まった。

「すみません！秋穂さん！」

彩芽はスーパーの前で深々と頭を下げる。

「いや、いいから！こんなところで！恥ずかしいじゃない！」顔を真っ赤にする秋穂。

「いえ、遅刻などあるまじき行為！」
土下座する勢いである。

「分かった！分かったから止めなさいって！」
周りがジロジロと見始める。

なんでもありませんからと周りに声をかける秋穂。

「さあ、買い物よ、買い物！行くわよ、彩芽！」
いそいそと店の中に入る。

「あ！待って下さいよ！先生！」
後を追って店に入る彩芽を見届ける周囲の人々であった。

「全く、恥ずかしいにも程があるわよ！あんなところで大声だして！」

買い物カートに長ネギを入れる秋穂。

「いやあ、すみません。」

買い物カートを押しながら今日の夕飯のメニューが何かを考える。

「先生！今日は夕飯なんですか？」

材料からは全くと言って良いほど、メニューが浮かばない。

「彩芽！病院の外で先生って呼ばないでよ。お姉様とか女王様とか呼びなさい。」

ジャガイモとニンジンをかゴに放り込む。

「じゃあ、秋穂さん、今日はカレーか何かですか？」

ジャガイモ、ニンジン、タマネギが入っているかゴをみる彩芽。

「なーんにも、考えてないわよ？彩芽が作ってくれるんでしょ？」

椎茸を同じ様に放り込み、彩芽を見つめる。

「えゝ？僕ですかゝ？」

カートに放り込まれる野菜を見ながら呟く。

「ちこくしたのは、誰かしら？」

冷たい視線を彩芽に送る秋穂。

「あはは、ですよねゝゝ。」

メニューを考える彩芽をよそに鼻歌混じりで買い物続ける秋穂であつた。

結局、夕飯はカレーに決まり、秋穂の家に着いた彩芽と秋穂。

開く玄関。

先に玄関にあがる秋穂。

「お邪魔します。」

つつい他人行儀になる彩芽。「はい、やり直し！ていつ！」彩芽のおでこにデコピンを一発入れる。

「いてっ！えゝつと、あの、ただいま。」

照れくさそうに笑う彩芽。

「はい、おかえりなさい、彩芽。」

彩芽を満面の笑みで迎える秋穂。

その秋穂の笑顔を見てさらに赤くなる彩芽。

「どうしたの？彩芽。」

秋穂は首を傾げる。

「え？あはは、なんでもないです！」

慌てて靴を脱ぐ彩芽。

「そっか、ならいいけど。」

秋穂はカバンを自分の部屋に放り投げる。

「じゃあ、パツと夕飯準備しますね。」

荷物を軽々と持ち上げ、リビングの扉を開ける。

目の前に広がるは地獄絵か：彩芽は扉を閉め、なかった事にする。

「さあ、寮に戻ろう。」

買い物袋を廊下に下ろし、玄関にで靴を履こうとする彩芽。

「ちょっと！彩芽！彩芽くくん？どこ行くの？」

彩芽の腕を掴む秋穂。

「はい？寮に戻るんですよ。」冷たい笑顔を秋穂に向ける彩芽。

「またまた、冗談を。」

「いえ、100%本気ですから。」

彩芽は両方の靴を履き、玄関の取っ手に手をかける。

「えくん、彩芽。」

腕にまとわりつく秋穂。

「まったく：どうやってたらあなるんですか？」

パンドラの箱の蓋を指差す彩芽。

「うーん、普通に生活したら？」

まったく悪びれる事なく言っただけの秋穂。

「はあ。じゃあ、とりあえず、部屋の片付けからですね。」靴を

脱ぎ、再び、パンドラの箱を開ける。

「まったくもって、足の踏み場もない：。」

「あるわよ、ほら！」

なんとも器用にソファーに移動する秋穂。

「そういうのは足の踏み場が無いって言うんですよ！」

足元のゴミを片付け始める彩芽。

紙ゴミ、プラスチック、アルミ、スチール：どんどん仕分けしていく。

「おー、さすが彩芽。早い早い。」

ソファーに胡座をかいている秋穂。

「秋穂さんも片付けて下さいよ！」

そう言いながらも手を止める事はない。

「は〜い。」

渋々と言った様子でテーブルの上にあったペットボトルやコンビニのゴミを片付け始める秋穂。

「秋穂さん：脱いだ下着くらい洗濯機に入れて下さいよ。」

黒の布地に花柄のレースがあしらわれたブラジャーをつまみ上げる彩芽。

「彩芽のエッチ〜。そういう下着が好み？意外にませてるわね〜。」
イタズラっぽく笑う。

「からかうのは止めて下さい。まったくだらしなさすぎです！」
ブラを廊下側に放り投げる。

「ちえ〜、つままないの〜。」 「そんなだから貰い手が見つからないんですよ。」

ぼそりと彩芽が呟く。

「聞こえてるわよ：彩芽：言っではいけないことを言ったわね：。」
ぶわっと音が出そうな程の勢いで黒いオーラが秋穂を包み込む。

「あはは：冗談ですよ：冗談：はは：。」

黒いオーラに飲み込まれていく彩芽であった。

それから二時間：

「ごちそうさま〜。やっぱり、人の作った料理は格別ねえ〜。」
グラスに残った烏龍茶を飲み干す秋穂。

「さあ、片付けちゃいますから、先にお風呂どうぞ。」
皿を重ねてキッチンに運ぶ彩芽。

「はい。ねえ、彩芽、一緒に入る？」

わざわざキッチンまで入ってくる秋穂。

「はい、いいですよ。」

あっさりと了承する彩芽。

「もう、彩芽ってば、冗談を真に受けるんだから。」

秋穂が笑う。

「いえ、本気ですよ。」

真顔の彩芽。

「え？本気の本気？」

秋穂の顔が赤くなる。

「本気の本気です。……ってそんなわけじゃないですか。顔、赤いですよ、秋穂さん。」

カチャカチャと食器を洗い始める彩芽。

「そ！そんな事ないわよ！冗談なのは分かってたわよ！お、お風呂入ってくるわね！」

ずかずかと自分の部屋に戻っていく秋穂。

クスクスと笑いながら洗い物を続ける彩芽であった。

風呂も終わり、まったりとテレビを見たりしているのすっかり日付が変わる間際になっていた事に気が付き、布団を用意する彩芽。

「さあ、今日はそろそろ寝ましょうか、秋穂さん。」

「そうね、おやすみ、彩芽。」

投げキスをしそくさと布団に入り込む秋穂。

「おやすみなさい、秋穂さん。……って！自分の部屋にベッドあるでしょ！」

掛け布団を捲り上げる彩芽。

「え、いいじゃない！なんなら、一緒に寝る？」

片側に寄る秋穂。

「もう一つ布団ありますか？」「有ってもないわ。」

「なんですか、それ？」

「いいから、布団に入りなさいよ。」

渋々と、秋穂の隣に寝転がる彩芽。

心臓が早鐘を打ちはじめる。

お互いに背中を向けて寝転がる。

「ねえ：彩芽は私が保護者代わりを申し出た時、どう思った？」

いつもの軽い話し方ではなく病院でみせる先生としての秋穂の声。

「そうですね、はっきり言って：嬉しかったですよ。」

「そう：あのね、彩芽と待ち合わせする前に彩芽の叔父さんから連絡があったの：。」

秋穂は彩芽の背中を見るように寝返りを打つ。

「叔父さんからですか：どういう用件ですか？」

彩芽はソファアの脚を見つめながら答える。

「あなたを引き取る準備をしてるって。」

彩芽の背中に手を伸ばす。

「秋穂さんはなんて答えたんですか？」

彩芽は背中に触れる秋穂の手の暖かさにはっとする。

「私は：彩芽に決めさせますとだけ答えたわ：だから、あなたが決めて、彩芽：。私の所に残るか、叔父さんの所へ戻るかは：。」

秋穂は彩芽の首に腕を絡め、背中を抱きしめる。

「じゃあ、僕の答えは決まっています。先生と：いえ、秋穂さんと一緒にいたいです。」

首に回された腕に触れる彩芽。

「うん、わかった：。じゃ、明日、電話しましょ。」

「いえ、直接会います：、一緒に行ってくださいませんか？」

彩芽が秋穂の腕を掴む。

「うん、いいよ。」

秋穂はそう呟き、彩芽をより優しく抱きしめた。

〔第九話 **Black・In・Summer・Vacation**〕（後書き）

みなさんはデータばックアップどうしてますか？

作者はぜーんぶP Cの中にいれていたもので・・・P C逝ったら終わりだということに気がつきませんでした（笑）

ちゃんとS DカードかU S Bに保存しないとだめですね。

では、また、次回お会いしましょう！＞作者でした！ハハ

番外編 オリキャラ紹介（1～5話）（前書き）

前々回から告知していたオリキャラ紹介です。

番外編 オリキャラ紹介（1〜5話）

オリキャラ紹介。

神代彩芽

18歳

身長…176cm

体重…65kg

好きな物…豆腐、歌

嫌いな物…古漬け

性格は冷静沈着に見えて実は熱いタイプ。

話し方が誰に対しても敬語なのは姉の芽依がかわいいからという理由で小さい頃に強要したのがそのまま残ったため。

中学一年の半ばまではくそがつく程のマジメ君で友人らしい友人は古武術と勉強くらいだったが後述の友人が出来た事により変わっていく。

古武術『神代流』の最強の名「齋芽」を持つ。

神代三年前に家族で交通事故で処理された出来事の中一人生き残る。上記で左腕を失うも姉の腕を移植され現在に至るが、拒絶反応などは一切なく完治するまでの時間も異常なまでに早かった。

拒絶反応、完治までの時間に関しては左腕縫合部に待機状態のIS『黒帝』が何らかの影響を与えているが詳細は不明。

本作の主人公ですが、作家的には結構影が薄い気がします。

神代彩芽専用IS『黒帝』

第2世代

全身を黒い装甲で覆うIS。

装甲と装甲の継ぎ目に赤い光を放つスリットがある。

第2世代ながらも、第3世代、続く第4世代に向けてのテスト機で性能は高い。

武装は己の拳と形の違う両脚だけとなっている。

常に自分の拳を使うため、シールドエネルギーを消費する。

背部には四機的大型スラスターが装備されており、ダブル・イグニッション・ブーストが使用可能だが、エネルギーの消費が激しい。

上記の二点から運用時間は短い。

なお、現在は篠ノ乃博士によるレストアを受け、内部のパーツが現在最新の物に変わっている。

黒帝専用パッケージ『疾風』

当初は芽依専用IS『黒姫』用の開発されていた超高速機動用パッケージを篠ノ乃博士が改造し、『黒帝』用にしたもの。

スラスター出力の増強及び空気抵抗低減を目的としている。

エネルギーの消費が著しく増加しているため、各所にプロペラントタンクを装備している。

タンクはパージが可能となっている。

深剣秋穂

29歳と13ヶ月

身長…165cm

体重…秘密

好きな物…仕事、お酒、面白い事

嫌いな物…面白くない事。

性格は明るく、人当たりがよく人気者。

外科所属で難しいオペもこなす敏腕の女医だが、未だにもらい手がない。

そんな事は本人はまったく気にしていない。

曰わく、仕事と彩芽が恋人。

彩芽の事故の最初の発見者で自分の病院に搬送し芽依、彩芽のオペをほぼ同時に行う。

また、芽依の最後の願いを聞き入れ、芽依の腕を彩芽の腕に移植した本人。

彩芽がISを起動させられる事を知り、その件を治療の為に隠す。
本作のヒロイン。

斎藤遊

19歳

身長…170cm

体重…65kg

好きな物…バンド、ギター、ポテトサラダ、どんちゃん騒ぎ

嫌いな物…ホットケーキ

彩芽の中学の時の同級生。

『ユニオン・ソウル』のリーダーでリードギター兼、コーラス。

性格は通常は軽い感じをしているが、本当は仲間思い。

彩芽との出会った頃は彩芽をただのネクラな奴だくらいにしか思っていないかったが、彩芽の声に自分の夢を託す。

夢はバンドでメジャーデビューする事。

眞弓慶太

19歳

身長…175cm

体重…70kg

好きな物…読書、ベース、緑茶、寝ること。

嫌いな物…騒がしい奴、睡眠妨害、濡れ煎餅

彩芽の同級生。

『ユニオン・ソウル』のベース兼、低音コーラス。

左利き。

遊曰わく、左利きがいると、なんか、左右に羽を広げてるみたいで
かっこいいとの事。

寡黙な奴だが、曲がったことは許せないタイプ。

どんなアップテンポの曲でも、自分のスタイルを崩す事なく奏でる。

彩芽と出会ってすぐの時は、彩芽を同じような静かに過ごす奴と踏
んでいたが、遊達と過ごす中で変わっていく様を遊達の悪い影響と
思っている。

藤田修平

身長…165cm

体重…65kg

好きな物…筋トレ、ギター（アコースティックも含む）

嫌いな物…犬、身長のことを言う奴

『ユニオン・ソウル』のギター兼高音コーラス

彩芽の代わりに何曲か歌う歌がある。

セカンドボーカル

身長が低いことをやたらと気にしている。

遊と二人揃うとかなり騒がしい。

性格は少し熱くなりやすく、周りに時々迷惑をかける。

他のメンバーはいつもの事と気にしていないが冷めた時に異様なほどの落ち込みを見せる。

彩芽と出会った当初、気いらないを理由に喧嘩をけしかけ、一発も当てられずに遊と慶太に止められた。

千葉達也

18歳

身長…177cm

体重…60kg

好きな物…ドラム、セロリ、猫

嫌いな物…狭いところ、暗いところ

『ユニオン・ソウル』のドラム担当。

冷静でリーダーよりも統率力にたけた、サブリーダー。

『ユニオン・ソウル』一番の男前。

遊とは幼稚園からの腐れ縁でなんだかんだと仲がいい。

中学の三年間、彩芽とはずっと同じクラスで学年成績のトップを争うほどの秀才だが、別段、トップなどに興味がある訳でもなく淡々としていた。

彩芽とはたまに授業内容を話す中でクラスから変な奴呼ばわりされている理由がわからなかった。

九条みずか

18歳

身長…155cm

体重…45kg

好きな物…お菓子、ブログ更新、犬

嫌いな物…馬鹿な男、パクチー、ニンニク

『ユニオン・ソウル』新メンバーでキーボード兼ボーカル。

彩芽の抜けた『ユニオン・ソウル』のボーカルとして参入した。

中学の時、文化祭での演奏を聞いてから参入を希望していた。

幼少よりピアノを習っており、腕前はかなりの物。

性格は天上天下唯我独尊。

世界の中心で宇宙を廻すといっても過言ではない。

しかし、実際は優しい思いやりもある。

彩芽とは中学一年と三年が同じクラスで何かと彩芽に世話を焼いていた。

恋愛の対象ではないが、何かと気にかかる存在。

神代芽依

享年18歳

身長…165cm

体重…55kg

好きな物…彩芽、豆腐

嫌いな物…弱い男、牛乳

彩芽の姉にして神代家の長女。かなりのブラコンで事あるごとに彩

芽に絡んでいた。

事故の数日前にIS学園を卒業し、イスルギへ研究員兼テストパイロットとして入社する予定だった。

病院に搬送後、秋穂に彩芽の事を頼み、自らの命を持って彩芽を助け、帰らぬ人となった。

新島翔（風牙）

23歳

身長…185cm

体重…80kg

好きな物…芽依、彩芽、格闘技

嫌いな物…弱音、お酒、タバコ

彩芽の兄弟子にして彩芽の憧れだった存在。

格闘技の才能は彩芽をも凌駕し、次期『齋芽』の名を継ぐに相応しいと言われてきたがある日、熱病に侵され両目の光を失い、神代流をさる。

完全に見えない訳ではなく、光は認識している。

番外編 オリキャラ紹介（1～5話） （後書き）

本編もできるだけ早く書いていけたらと思います。

駄文ではございますが、お付き合いの程宜しくお願いいたします。

第十話〔Black・Is・Going・Trip・With・Unions〕

おはようございます、作者です。

あれよあれよと言う間に3万アクセス・5千ユニークになりました。

本当にありがとうございます。

どんどん書いてUPできるように頑張ります。

では、お楽しみ下さい。

第十話〔Black・Is・Going・Trip・With・Union S

「しかし、昨日の啖呵は良かったわねえ。私危なく惚れそうになったわ。」

ニヤニヤと机に肘を付き彩芽の運んでくる昼食のチャーハンを待つ秋穂。

先日：

朝早くに秋穂の家を出て彩芽の叔父に会いに行った二人。

叔父の一言に彩芽が発した言葉がこれである：

「僕が居ることによって彼女が不幸になると言うなら、僕は出て行きます！ だけど！ 彼女、秋穂さんはそうは言っていない！ だから！僕は彼女の傍にいます！彼女に幸せだと言ってもらえるように努力します！」どこからどう聞いても結婚の挨拶かなにかである。

「また、その話ですか！もう良いじゃないですか！」慌てふためく彩芽。

「はいはい。じゃー、いただきます。」

机に置かれた昼食に舌包みを打つ秋穂。

「いただきます。」

自分の作ったチャーハンを口に運ぶ彩芽。

「そういえば、旅行の準備は進んでるの？」

「ええ、だいたい纏まっていますよ。」

彩芽は既にボストンバックを用意してある。

「私まだなんだよねえ。」

うって変わってまったく準備していない秋穂。

「明日から行くんですよ？大丈夫ですか？」

彩芽はさっさと昼食を食べ終わる。

「何を持って行こうか悩んじゃって。彩芽、一緒に選んでよ。」

秋穂も食べ終わる。

「仕方ありませんね。では片付けが終わったら部屋に行きますから先に始めて下さい。」

皿を片付ける彩芽。

「はい。」

秋穂は烏龍茶を一気に飲み干し、部屋に戻っていく。

洗い物を終わらせ、秋穂の部屋の扉をノックする。

「はい、どうぞ。」

「失礼します…ってなんて格好してるんですか！」

彩芽は顔を背ける。

それもそのはずである下着姿で服を選んでいた。

「ん？ああ、水着みたいなもんじゃない。気にしないで。」

なんて事ないと言いたげに胸を張る秋穂。

「とにかく、服着て下さいね！」

扉を閉める彩芽だった。

それから数時間、たった二泊の旅行のはずなのに凄い量の荷物を旅行用のキャリアに詰める事になった。

「おはようございます！」

遊が意気揚々と車に乗ってやってきた。

「おはようございます。遊、今日はやたらとテンションが上がってますね。」

彩芽は二人分の荷物を歩道の隅に置き、トランクを開ける。

「おはよう、彩芽。」

「おはようさん、彩芽。」

「ういーす、彩芽！」

「おはよー、彩芽。」

面々が朝の挨拶をする。

「おはようございます、達也、慶太、修平、みずか。」
彩芽もにこやかに笑う。

「さあ行くか？って、急遽参加の先生は？」
遊がウインカーを消すがすぐにつける。

「ああ、もうきますよ。」

「おまたせ♪いやあ、準備に時間がかかったわねえ♪」
全員が哑然とする。

浮き輪にシュノーケルと水中メガネ、足ヒレ、ビーチボール。

「この人が、彩芽の保護者兼主治医？大丈夫か…？」
慶太の冷静なツッコミ。

「ダメかもしれません…。」
肩を落とす彩芽。

「ノリノリね…。」

「いいねえ、そういうの俺好き！」

「俺も俺も！」

みずか、遊、修平の順である。

「んな事よりよ、彩芽、大丈夫か？車怖いんだろ？」
達也が彩芽の心配をする。

「ええ…。でも、怖がってるだけじゃ前には進めないんです。だから、僕は。」

震える腕に力を入れ拳を作る。

「大丈夫よ、彩芽、私もいるし、みんなもいるわ。何も怖くなんかないよ。」

秋穂が彩芽の拳を両手で包み込む。

「そうそう、先生の言う通りだ。心配すんなよ、彩芽。」

遊が優しい顔をする。

全員が同じ表情を見せる。

「みんな…よろしくお願いします。」

頭を深々と下げる彩芽。

「任せなさいって。」

親指を立て、ドヤ顔で彩芽を諭す秋穂。

「その格好で言われても信頼出来ませんよ、先生。」

彩芽が冷たい目で見える。

「確かにな…。」

秋穂意外全員が声を揃える。

彩芽は自ら歩みを進め、車に乗り込む。

震えが止まらない。

「大丈夫か？」

慶太がタオルを渡す。

「だ…大丈夫です…よ？」

タオルを受け取り汗を拭く。

「ねえ…粗治療過ぎない？」

みずかが助手席から振り返り彩芽を見る。

「彩芽、大丈夫か？おい、どうしよう、達也！」

なぜかオロオロする修平。

「お前がオロオロしてどうすんだよ。」

達也は冷静に突っ込む。

走り出して早30分。

もう数時間も乗っているような錯覚を覚える彩芽。

「何か…、気を紛らわせるものはないですか？」

彩芽が遊に尋ねる。

「おう！その言葉を待ってたぜい！お前が自分の限界に来たときの為に用意しておいたぜ！」デジタルオーディオをナビに繋ぐ遊。

「行くぞ、お前ら！ロックンロール！」

夏にはぴったりなアップテンポの音楽がスピーカーから流れ出す。しかし、スピーカーから流れ出す音楽には言の葉は乗っていない。遊、慶太、修平、達也、みずかはコーラス部分と自分の担当部分だけを歌う。

その状態が4曲続く。

「なあ、彩芽、お前が歌わなきゃ、歌が完成しないんだ…歌ってくれよ。」

遊が間奏の始まりに呟く。

「そうよ、彩芽歌って。」

「お前なら出来る。」

「一緒に歌おうぜ、リードボーカル。」

「ゆっくりでいいからついて来いよ。」

みずか、慶太、修平、達也が各々自分の言葉で思いを伝える。

「彩芽…歌いなさい。自分とみんなの為に。」

秋穂が彩芽の背中を押す。

間奏が終わり、遊、達也がコーラスをハモる。

彩芽は呟くように言の葉を紡ぎ出していく。

1フレーズ1フレーズ声が大きくなる。

サビに入る頃にはいつものように歌っていた。

彩芽、遊、慶太、修平、達也、みずかの声が、言葉が重なり、一つの音を創り、車内一杯に広がっていく。

一曲終わる頃には彩芽の顔色は元に戻り、変な汗はかいていない状態になっていた。

「やれば出来んじゃないか、彩芽。」

「なんとかなるものですね。さあ、もう一曲行きましょう！」完全に克服は仕切れていないものの目的地に着くまで彩芽達は歌い続けた。

「着いた〜！おー！海だあ♪」

秋穂とみずかの声が重なる。

青い海、白い砂、海と空の境界がはつきりしないくらいの青空が広がっている。

「ん〜、お疲れさ〜ん。」

遊の肩を揉む慶太。

「お疲れ〜！」

遊は缶コーヒーを開ける。

「一人乾杯とかないわ〜。」

修平がトランクを開ける。

「彩芽、お疲れさん。俺達とな大丈夫だったろ？」

達也が彩芽の背中を叩く。

「痛いですよ、達也！でも乗れました：ありがとうございます、みんな。」

全員の顔を見る彩芽。

「おう！俺ら、仲間じゃん？」遊が彩芽の肩を肘で小突く。

「彩芽、いい友達を持ったわねえ〜。」

ハンカチで目元を拭う秋穂。

「嘘泣きは通用しませんよ、秋穂さん。でも、ありがとうございます。」

「うん。」

見つめ合う二人。

「はい、ラブラブのところわりいんだけど、荷物運べや、このリア

充が！」

遊がトランクから鞆を放り投げる。

「はい、運びますよ。って何も投げなくても！」

なんとか鞆をキャッチする彩芽。

「ちっ…。当たらなかったか…リア充には死を…。」

修平が虚ろな目で見ている。

「彩芽、よろしくするのはいいけど、こいつらの目の前ではするなよ。こいつら今日の旅行のために並々ならぬ無駄な努力をしてきた愚か者達だからな。」達也が荷物を地面に置く。

「「無駄とか言うな！」」

遊と修平が声を揃え達也を睨む。

「本当、バカよね。慶太まで一緒に行ったのは驚きだったけどね。」みづかが三人を見る。

「俺は人数合わせや。見てて目を覆いたくなるような惨劇やったぞ。」

顔を片手で覆う。

「お前が真剣にやらなかったからだぞ！」

「そうだぜ！慶太！お前のせいだ！」

遊と修平が慶太を責める。

「あほか！俺はメルアド交換したぞ！」

慶太の爆弾発言。

「「何！貴様！いつのまに！」」

驚愕し肩を落とす遊と修平。

「慶太、ひっそりとやるわね。」

「そうだな。」

みづかと達也は二人して感心している。

「あの、話がまったく読めないんですが…。」

彩芽は今のやり取りを傍観するしかなかった。

「ああ、悪い悪い。こいつら、今日の旅行で彼女を連れて行くのかなんとかで合コンを繰り返してたんだよ。四回か確か…。」

達也が思い出すように指折り数える。

「ああ、なるほど。それで人数合わせの慶太はちゃっかりメールアドレスを交換したと。」なるほどと相づちを打つ彩芽。

「なるほどねえ。案外やるのね、あの子。」

秋穂もなるほどと相づちを打つ。

この言い争いは部屋に荷物を全部運ぶまで続いた。

「へー、オーシャンビューのリゾートマンションなんかよく借りましたね。」

彩芽が部屋の窓から見える海を見渡す。

「おう。ちょっととした知り合いが持ってたな二泊三日だけ貸してくれるっていうからさ。」

遊がエアコンのスイッチを入れる。

「ここ、凄い設備が充実してるわね。ゴルフ、テニス、スカッシュ、プール、卓球にゲームセンター、カラオケ。」

テーブルの上の設備の一覧を見る秋穂。

「まあ、とりあえず、海でしょう、海！」

徐に服を脱ぎ出す遊と修平。

「一番乗りは頂いた。」

二人が水着になり、玄関に向かう。

「さあ、俺達も着替えよう。」3LDKのマンションで一部屋は荷物置き場、一部屋が男子部屋、もう一部屋が女子部屋になっている。それぞれの部屋に入って行く、慶太、達也、彩芽、みずか水着のままリビングに取り残される秋穂。

「んー！平和ねえー♪」

ソファで伸びをする秋穂であった。

着替えが終わり、海に出る一行。

「遅いぞ、みんな!」

既にずぶ濡れになった遊と修平が待っていた。

「遊達が早すぎるのよ!」

みずかがツッコむ。

「ところで、あれ、何ですか?」

彩芽が白い栈橋を指差す。

「ああ、あれは飛び込み台だな。見本見せてやれよ、修平。」

「あいよ!!!」

修平が全力で栈橋を走り抜ける。

跳躍。

跳ね上がる水柱。

「とまあ、こんな風に使うのが青春だな。」

遊がそれだけを言い残し走り出す。

それを見て走り出す慶太と達也。

「あ! 待って下さいよ!」

彩芽も慌てて走り出す。

「秋穂さん、私たちも行きましょう」

みずかが秋穂の手を取る。

「ええ、行きましょう!」

四本の水柱が立つ。

「はいはい、どいてどいて!」 みずかと秋穂が栈橋を走ってくる。

「彩芽、受け止めてね!」 既に秋穂は彩芽に向かって一直線に

向かっている。

「え? ちよっと! 秋穂さん!」 慌てて手を伸ばす彩芽。

「彩芽!」

本当に彩芽に向かって跳躍する。

彩芽にはスローモーションに感じられた一瞬。

だんだんと近く秋穂。

しかし、顔に近いてくるのは秋穂の胸だった。

ふゆんとした感触が顔全体で感じる。

そして、次の瞬間には水の中でひっくり返っていた。

「ぷはっ！何するんですか！秋穂さん。」

そう言いながらもしっかりと抱き留めている彩芽。

「もう、彩芽のエッチ！」

秋穂が顔を赤らめる。

「はっ？あ！」

左手は手には収まりきらないたわわな果実が…。

「あ、すいません！」

慌てて離れる彩芽。

「「彩芽…てめえ…おいしい思いしやがってえ！」」

遊と修平が彩芽に向かって泳ぎ出す。

「え？ちよつと！」

遊に羽交い締めになされる彩芽。「その左手が…その左手が…！」

修平の吐息が激しくなる。

「揉め、修平！その小憎たらしい、左手を！」

遊の目に火がついている。

「くっ！仕方ありません！」

彩芽が遊の羽交い締めをするりと抜ける。

「な！止まれ、修平！」

「人は急には止まれません！」激しく頭をぶつける二人。

「自業自得ね、二人とも。」

「ああ、そうだな。」

達也とみずかが相槌を打つ。

「そういうえば、彩芽。その左腕のがISか？」

慶太が待機状態の『黒帝』をつつく。

「はい、これが僕のIS『黒帝』です。言っても待機状態ですけどね。」

左腕を慶太に見せる。

「なあ、一回装備して見せてくれよ。」

復活した遊が鼻の頭をさすりなる。

鼻の頭が真っ赤になっている。

「ダメなんですよ。そういう規約があるので。」

残念ながらと首を振る彩芽。

「ちえゝつまらないなあ。」

「あははゝすみません。」

彩芽が謝る。

「謝るほどじゃないっての。それより、お昼にしようぜ。腹減ったよ。」

修平が腹を押さえる。

「そうね。野郎共！なんか買ってきてよ。私達は砂浜で待ってるから。ね、秋穂さん。」

みずかが秋穂にウィンクする。

「そうね。せっかく若い男を侍らせているんだもんね。」

さっさと砂浜に戻る二人。

「よし、買い出しは二人で十分だろ。ここは公平に彩芽ともう一人はじゃんけんで決めようぜ。」

遊が肩を回し始める。

「「賛成。」」

残りの三人が同じように肩を回し始める。

「ちよっと！おかしくないですか？今の！」

彩芽は既に買い出し確定状態に納得いかない。

「今のがおかしいと思った奴いるか？」

遊の顔は何を馬鹿なと言わんばかりの顔である。

「いや、全然おかしくない。」残りの三人が顔を横に振る。

「いやいや、納得いきませんよ！今のおかしいと思った方挙手」

誰一人上がらない。

「な、満場一致だ。という訳で彩芽ともう一人だ！いくぞ！じゃんけん！ぽん！」

白熱のじゃんけんが行われた。

「ちっ。まさか、ドストレートで負けるとはな。」

達也がさっき負けたチョコキを悔しそうに眺める。

「ははは。そんな事もありますよ。」

売店まで砂浜を歩く。

何やら周りの視線が気になり始める二人。

「なんか、見られてないですか：僕達。」

「ああ、思いつき見られてるな：なんだってんだ。
なぜか、早足になる二人。」

「ねえ！二人とも今日何してんの？」

突然目の前に二人の女性が立ちはだかる。

「はい？友人と泳ぎに着たんですけど、何か？」

親切に答える彩芽。

「へえ、そうなんだ。私達と少し一緒に泳がない？」

二人ともビキニを着こなした世に言う美女である。

「あはは：お誘いは有り難いんですが。」

「すまないが、他をあたってくれ。それでも今は忙しいんだ。
彩芽、達也は自分なりに断り、二人の横をすり抜ける。」

達也と彩芽は二人でいると声をかけられる確率がかなり高い。
だが、二人ともあっさりと断るのがいつものパターンである。

あの二人曰わく、『万死に値する』だそうだ。

「さあ、女王様方、本日の昼食にございます。」

うやうやしくみずかと秋穂の前に料理を置く二人。

「おう、召使い、飯はまだか？」

遊があぐらをかきながら言う。

「ほらよ…どうぞ、お召し上がりになってくださいでございます、くそやろう共様。」

達也が焼きそばと焼もろこしとフランクフルトなどが入った袋を放り投げる。

「そういえば、達也と彩芽さつき、逆ナンされてなかった？」みずかが焼きそばを頬張る。

「ああ、あれか、ウザったいから丁重に断った。」

「あの二人なら他に良い人見つかりますよ。」

サラッとお断りした二人。

「お前ら！親友の俺達に会いを提供しようとかそういう考えはないのかよ！」

修平が涙を流しながら叫ぶ。

「そんなもん知るか。代わってやれるなら代わってやるよ。なあ、彩芽。」

しれっと言い放つ達也。

「そうですね。代わりますよ。」

彩芽も簡単に言い放つ。

「くっそお！こいつら…こいつら！」

「地獄に落ちやがれ！」

泣きながら浜辺を全力疾走していく修平と遊。

「さあ、五月蠅いのも居なくなっただし、飯にするか。」

「そうやな。彩芽も食おうや。」

「ええ、そうしましょう。」

残りの男はゆっくりと昼飯を楽しんだ。

「ふう〜。1日遊んだな。」

部屋に戻ってきた一行はリビングでそれぞれくつろいでいる。

「遊、あのダンボールはなんですか？」

部屋の隅に堂々と座り込んでいる横1.5m縦1m奥行き0.5m位のダンボールがある。

「ああ、あれか、開けて見れば分かる。開けてみるよ。」
ソファーから顔を出す遊。

「ええ、開けてみます。」

彩芽はダンボールを開ける。

「花火じゃないですか！いいですね！」

「いいわねえ、風流ね。」

秋穂も花火を覗き込む。

「ってか、こんなに大量にどないすんねん。」

ダンボール一杯に打ち上げ花火と手持ち花火が入っている。

「全部上げんぞう！」

修平が部屋から出てくる。

頭には寝癖が着いている。

「じゃー、晩御飯食べたらやろうよ！」

そうして、晩御飯のカレーを準備し、もの凄い勢いで食べた一行であった。

「よっしゃー！見る奴は居なさそうやけど、花火上げますか！彩芽、修平、慶太、達也！並べるぞ！」

打ち上げ花火を砂浜に置き始める遊。

どんどん砂浜に花火をセットする男達。

「よし、一発目はこんなもんでいいか。」

遊がどんどん着火していく。

打ち上がる色とりどりの花火。

「たまやー！」

みずかが叫ぶ。

「かぎやー！」

秋穂が返す。

どんだん打ち上がる花火に外に出てくる人達。

「おいおい、そこまでかよ。」達也が苦笑いする。

「まあ、ええやないか、祭りや祭り。」

慶太が笑う。

「はーい、どうぞ。」

外に出てきた子ども達に手持ち花火を配る秋穂とみずか。

小さな花火大会は彩芽達の脳裏に色濃く焼き付けられるまで続いた。

最後の線香花火の火種が音もなく落ちる。

「あーあ、終わっちゃいましたね。」

水バケツに線香花火をつける。「何言ってんだよ。まだ1日目が終わっただけだ。後2日ある。さあ、片付けて今日は寝ようぜ。」

7人はてきぱきと片付けを済ませ、日付が代わる頃に疲れた身体を布団に沈めるのであった。

第十一話〔Singing・At・Twilight〕（前書き）

どうも、作者です。

いつもご愛読ありがとうございます。

夏休み編まだまだ続きます！

では、本編です。

第十一話〔Singing・At・Twilight〕

午前3時…

「くそ眠い…。」

慶太が呟く。

「はああ、一体何が釣れるんだよ。」

大あくびをする達也。

「まあまあ、とりあえず、やるしかないならやりましょうよ。」

彩芽は平然としている。

「そうだぞ。今は大人しく太公望しようぜ。」

「ああ、まったくだ。ちっ…当たり前すらねえ。」

修平と遊が再び、仕掛けを海に投げる。

なぜ早朝から釣りに興じているかと言うと…昨日の夜に遡る。

昨日午後11時…

「そいえば…明日の朝食はどうするの?」

発端は秋穂のこの言葉から始まった。

「え? 食材使って何か作りましょう。食べに行くのは勿体無いですよ。」

彩芽がソファアを立つ。

「作る? 食材なんか無いわよ? 夕飯のカレーの分で終了よ。」みずかが空のダンボールを持ってくる。

「食材準備したの誰やつけ?」慶太が遊を見る。

「食材は俺じゃねえ、こいつ。」

修平を指差す。

「ここは海の幸が旨いらしいからな。敢えて、食材は現地調達にしてみた。」

両手を腰に当て胸を張る修平。「いやいやいや、おかしくね？海の幸は現地調達にしてもいいけどさ、野菜とか肉はよ？」

達也の鋭い指摘。

「ん、現地調達だ。あと、預かってた食材でこれ買つといた。」
五本の釣り竿を出す。

「馬鹿か…。」

「うむ。馬鹿だ。」

「馬鹿ね。」

「馬鹿ですね。」

「阿呆やな。」

「馬鹿みたいね。」

遊、達也、みずか、彩芽、慶太、秋穂が同時に呟く。

「ひでえ：俺はエンターテイメントを提供しよう。」

「お前の提供したのはエンターテイメントじゃねえよ！サバイバルだつうの。」

遊が軽く怒りを露わにする。

「もう、言っても仕方ないから明日は3時起床で釣り大会だ。とりあえず、朝飯分だな。」

達也がその場を仕切る。

「それ以外の食材は、修平に買ってきてもらいましょうか。」彩芽がにっこり修平を見る。

「え？俺一人？」

修平が彩芽を見る。

「それは、一人ですよ…わかってますよね？」

顔は笑顔のまま冷たく言い放つ。

「だ…だよね…。」

顔を逸らす修平。

「とにかく、今日は寝るか。」

慶太が部屋に向かい、その後、五分で全員が床についた。

そして現在に至る。

「釣れないとヤバいで。食いつぱぐれる。」

慶太が仕掛けを投げる。

「おっ！来た！」

遊の竿がしなる。

「やりましたね！」

網を持って彩芽が遊に近づく。

「待望の一匹目！」

上がったのは鰺だった。

「よっしゃ！遊に続け！」

活気づく面々。

その後、人数分の鰺を釣り、意気揚々と部屋に戻る男達だった。

「ご馳走様でした。」

一同が手を合わせる。

「しかし、良かったな、直売の自販機あってさ。」

達也が皿を重ねる。

「まったくや。無かったらご飯と鰺と具のない味噌汁だけになるとこやったで。」

ちなみに、男子陣は3時ごろから6時までかけて人数分を釣っている。誰一人、釣りの才能はないようだ。

朝食のメニューはご飯、ほうれん草の味噌汁、生卵、鰺の塩焼き、

鰯の刺身である。

「さあて。飯食ったから、テニスでもやらんか？」

慶太がペットボトルに残ったお茶を飲み干す。

「いいねえ！やろう！」

遊が立ち上がる。

「では、決まりのようですね。さくつと片付けを済ませてしまいますから皆さんは準備をお願いしますね。」

皿をキッチンに運ぶ彩芽。

「片付けなら私も手伝うわよ。」

秋穂が残りの皿を運び出す。

「では、秋穂さん、お願いします。」

エプロンを結びながら顔を出す彩芽。

「あいつ…いい嫁になるなあ…。」

しみじみと呟く遊。

「嫁？婿やろ？」

慶太が横目で突っ込む。

そしてテニスコート。

二面ある内の一つを借りる。

夏の朝とはいえ気温は絶賛上昇中である。

「あっちい…まだ8時前なのにこの暑さかよ。」

達也がラケットを握りコートに立つ。

「じゃあ、行きますよ。」

彩芽がボールを空に向かって投げ、サーブする。

「ちっ！いいサーブするな！」レシーブ。

ラリーが続く。

「あいつら…よくあそこまでラリー続くよな…。」

遊がスポーツドリンクを飲む。「まったくよね。」

暑さに少しうんざりしたように日陰に逃げ込むみずか。

「んゝ、あつゝ」

ベンチで寝転がり、寝息を立てる慶太。

「よく寝れるよな…こいつ。」座る所がなくフェンスに背中を預ける修平。

秋穂は今日の朝刊に目を通している。

「よっしゃ！取った！」

達也がガッツポーズを決める。

「やられました。さあ、交代ですよ。」

彩芽がコートを出す。

「ねえ！達也！私とダブルス組もうよ！」

みずかがラケットを持ちコートに出る。

「んじゃ、修平と俺がペアだな」

「おう。行くぜ、相棒。」

ラケットを肩に乗せ、堂々とコートに立つ二人。

「サーブ、譲るぞ？」

ボールを遊に投げる達也。

「サーブはそっちからでいいぜ。」

投げられたボールをそのまま投げ返す遊。

「じゃあ、お言葉に甘えて…行くぞ！」

高々と空を舞うボール。

フォームの整ったサーブが放たれる。

ボールがコートに当たる。

そのまま、フェンスに直撃するボール。

「動けよな…修平。」

「取れるか…あんなサーブ。」一步も動けなかった二人。

「どうした？それじゃ、試合にならんぞ。」

新しいボールを取る達也。

「おう。今のはサーブで点をやったまでよ。」

遊が構え直す。

「そうか。じゃー、本気でいかせてもらおう。」

それから遊達がサーブをあげる事なく試合は終了する。

テニスラケットを受付に返し、部屋に戻る途中のこと：

「ねえねえ、ここ、貸しスタジオあるんだって。見に行かない？」
みずかがパンフレットの地図を指差す。

「へえー、行こうぜ、せっかく楽器も持ってきたしな。」

修平が飛び跳ねる。

「おう、お前が買い出しから戻ったらな。」

達也が顔をタオルで拭う。

「え？ それ、まじな話だったの？」

立ち止まる修平。

「え？ 冗談だと思ってたんですか？」

彩芽が修平の肩を掴む。

「よし、さっさと行ってこい。」

車のキーを修平に渡す遊。

「くっそう！ 行ってきます！」 泣きながら走り出す修平。

「はいはい、いてらー。」

慶太が手を振る。

それから修平が戻るまで二時間、残りのメンバーはのんびり過ごした。

「意外とちゃんとしたスタジオですね。」

彩芽が中でワクワクしたような表情を見せる。

「案外、彩芽も子供っぽい顔するのね。新発見だわ。」
手帳にメモを取る秋穂。

「いったい何をメモしてるんですか？」

彩芽が秋穂の手帳を覗く。

手帳には『彩芽の成長記録』と書かれていた。

「なんです…これ…。」

冷たい笑顔を秋穂に向ける彩芽。

「うん、彩芽の成長記録だよ？」

同じようににっこり笑う秋穂。

「そうじゃなくて、何で、こんなものつけてるんですか？って話です。」

「ああ、保護者の義務ね。」 「そんな物が義務化されたなんて聞いたとありません。没収です。」

渡しなさいと手を出す彩芽。

「いやだ。取れるものなら取ってみなさい！」

胸の谷間に手帳を押し込む秋穂。

「くっ！卑怯ですよ！」

手を引っ込める彩芽。

「ほーらほーら！お姉さんの胸に手を入れてみたら♪」

胸をやたらと強調する秋穂。

「あー、バカップルはほっといてさっさと用意しよかー。」

慶太がケースからベースを取り出す。

「そうだな…準備、準備っとう。」

遊もギターを取り出す。

彩芽と秋穂のやりとりを完全に無視して準備するメンバーであった。

「よしっと…おい！そこでいちゃついてる二人組！」
遊がわざわざマイクで呼びかける。

振り返る彩芽。

その隙に手帳をしまう秋穂。

「あ！しまった！」

秋穂の方を向くとすでに手帳は消えていた。

「お前らがイチャイチャしてる間に準備終わっちゃったよ！あ、彩芽！お前がない間に進化した俺たちの歌を聞けよ！」

達也のドラムスティックがカウントを開始しドラムとギター、ベースと全員の声が重なりアップテンポの曲を奏でる。

慶太が低音域を、修平が高音域を、それを補助する用に間で歌う遊。コーラスに徹する達也とみずか。

奏でられる音楽は三年前に比べて格段にうまくなっている。

以前歌った時に比べでもうまくなっている。

かなり、練習して来た事がすぐにわかった。

曲が終わるまで一瞬たりとも目を離せなかった彩芽。

「どうよ！どうよ！」

遊が彩芽を見る。

「すごいです！びっくりしましたよ！じゃー、次は僕の進化を見てもらいますよ！」

マイクを取り、アカペラで歌い出す彩芽。

三年前は歌えなかった、ラップを歌う彩芽。

慶太がハモリ始める。

修平がスタンドのマイクを抜き彩芽に近づく。

肩組し共に歌い出す修平。

遊もマイクを取り、修平の反対で彩芽の肩を取り、歌い出す。達也とみずかはそれを笑顔で見ている。

秋穂は彩芽の活き活きとした姿を見て嬉しそうに笑う。

歌い終わると全員が歓喜の声を上げ、満面の笑みだった。

そして夕方になり、海に見えるプールサイドで夕日を見る彩芽達。

「綺麗だね、彩芽。」

秋穂が彩芽を見る。

夕焼けに染まる秋穂の笑顔にドキドキする彩芽。

「はい、綺麗ですね。」

ぎこちない笑顔を秋穂に見せる彩芽。

「お前も素直じゃないな。」

達也が呟く。

「ほんまやで。」

慶太が笑う。

「な！なんですか！二人して！」

彩芽が慌てて二人に突っ込む。

「じゃー、さっきの綺麗は何に対して言ったのかな？」

みずかがニヤニヤしながら

彩芽に訪ねる。

「え？」

いきなりの確信を突く質問に声が裏返る彩芽。

「ぷっ！わかりやすいな」

声を出して笑う遊。

「彩芽、言わなくても分かってるよ。」

満面の笑みで彩芽を見る秋穂。「はは、そうですか…良かったです。」

「

下を向く彩芽。

「でも、彩芽の口から聞きたいな…。」

秋穂が彩芽を上目使いで見る。

「言えよ。」

「言うやろ？」

「言うよな、当然。」

「ここで言わなきゃ、男じゃないわね。」

「言っちゃえよ！」

遊、慶太、達也、みずか、修平が全員ニヤニヤしながら彩芽を見る。
「…」

彩芽がぼそぼそと何かを言う。

「ああ？聞こえんなあ？」遊が耳を傾ける。

「わかりました！言います！ちゃんと言います！秋穂さん！凄く綺麗です！」

真っ赤な顔の彩芽が叫ぶ。

「あ、ありがとう、なんか、そういうされると、恥ずかしいかな…少し。」

目を丸くする秋穂。

本当に言われるとは思っていなかったようで、驚いているものものどこかうれしそうに笑っていた。

「なあ、一曲どうだ？」

アコースティックギターを持ち出す修平。

「準備いいな。んじゃ一曲。」修平がアコースティックギターでメロディーを奏でる。

彩芽が歌い始める。

遊、達也、修平、慶太の順に声を重ねていく。

アコースティックと波の音だけの演奏。

優しく吹くそよ風。

ゆっくりと海に沈んでいく太陽。

周りには大切な仲間達。

全員が笑っている。

修平が最後のコードを奏でる。

そよ風の中の心地いい残響。

残響はそよ風が吹き抜けるのと同時に消えていった。

ちらほらと聞こえる拍手。

周りを見渡すとカップルや家族連れがちらほらとプールサイドに来ていた。

「ねえ、もう一曲お願い出来ないかな？」

カップルに声を掛けられる。

左の薬指には真新しいダイヤの指輪が夕焼けで美しく輝いていた。

「ええ、喜んで。少し、時間を頂けますか？」

彩芽はにっこりと笑う。

「ええ、どうして？」

優しい笑みは幸せで溢れていた。

「秘密です。10分後に来てもらえますか？」

再びにっこり笑う彩芽。

「わかったわ。じゃ、10分後に…。」

旦那の腕を取り、嬉しそうに去っていくカップル。

「遊、ベースとエレキ一本を取ってきて下さい。」

「わかった。」

遊は何かを察し足早に去る。

「達也も、一式は無理でしょうから、簡単なセットを。修平も手伝ってください。」

「わかった。お前も世話焼きだな…。」

「いいじゃないか。やろうぜ。」

達也と修平も移動する。

「みずかと慶太もキーボードをお願いします。」

「はい。」

「わかった。」

二人も取りに行く。

「私は？」

秋穂が自分を指差す。

「秋穂さんには僕を手伝ってもらいますよ。」

彩芽が何かを企んでいるのは明快だった。

そして、10分後のプールサイド。

太陽は半分が海に沈み、空はオレンジと濃いブルーの二層になっている。

「急ピッチすぎる…。」

遊が肩で息をしている。

「まったく、人使い荒いで…彩芽。」

「ははは。さて、そろそろ、お客様がいらっしゃいますよ。」額の汗を拭う彩芽。

「よし！ いっちよ、おみまいするか！」

修平の背中を叩く、遊。

「いって！ 見舞ってやろじゃないの！」

アコースティックギターを肩から下げる。

「見舞うって…なんか違うだろ。」

達也がドラムの調整を済ませる。

「あ！ 来たよ！」

みずかが手を振る。

「ようこそ。ちょうど準備が整ったところです。さあ、どうぞ。」

プールの真ん中にテーブルと椅子が用意されている。

椅子を引く彩芽と秋穂。

「では、ごゆっくりと。」

彩芽はマイクを握り、プールサイドの遊達の元に向かい、用意されているマイクスタンドにマイクをセットする。

「では、早速一曲。オリオンをなぞる。」

みずかのキーボード、達也のドラム、慶太のベースで静かだったプールサイドは音で満たされていく。

遊のギター、彩芽の声、修平のコラス。

一曲終わる頃には歌い始める前より、人が増えていた。
二曲目、三曲目とアップテンポの曲を演奏する。

「何かリクエストはありますか？」

マイクで声を掛ける彩芽。

「じゃあ：Stand・by・meを：。」

テーブルの上の曲目から選曲するカップル。

「かしこまりました。」

恭しく頭を下げる彩芽。

ロックバラード調にアレンジしたStand・by・meが夕闇に溶けて消えていく。

拍手が起こる。

「ありがとうございます。とても素敵な時間でした。」
カップルの男が立ち上がり頭を下げる。

「いえ、これはささやかな、僕達からの贈り物です。」

彩芽はにっこりと笑う。

そして、片付けだけで夜はどんどんと更けていくが、誰一人疲れた顔をすることなく一日を終えるのだった。

「ぬあゝ、二泊三日でも結構遊べたな。」

ラーメンをすすする修平。

ここは帰りのサービスエリア。

「そうですね。楽しかったですよ。」

彩芽は烏龍茶と親子丼を食べている。

「車、ずいぶん慣れたみたいね。良かったわ。」

秋穂はカツ丼を頬張る。

「しかし、このサービスエリア：飯うまいな：。」
達也はカレーを食べている。

「せなや…でも、うどんの汁なんで関東風なんや…。」

黒い汁に浸かるうどんにやや不満な顔をする慶太。

「ピザもまあまあね。」

既に半分がみずかの腹の中に消えている。

「お前…本気で一枚いく気みたいだな…。」

遊がパスタを口に運びながら呟く。

「なんか言った？」

ギロリと遊を睨みつけながらピザにかぶりつくみずか。

「いや…別に…。」

遊は小さくなりながらパスタを食べる。

その時、彩芽の携帯がなる。

「ちよつと失礼します。」

席を立つ彩芽。

「風芽義兄さん」

着信画面にはそう出ている。

来るときが来たのだと彩芽は電話に出る。

「もしもし、義兄さん？」

「ああ、久しぶりだな、彩芽。」

風芽の落ち着いた声が彩芽の耳に届く。

「どうだ？一緒に行かないか？まだ、決心が付かないか？」

風芽は彩芽に優しく語りかける。

「決心は付きました。明後日はどうですか？」

彩芽から切り出す。

「明後日か…大丈夫だ。じゃー、駅に九時にな。」

「分かりました。」

それだけを告げ、電話を切る。

「おーい！彩芽！行くぞ！」

手を振る仲間達に笑いかけながら走り寄る彩芽の中には事実と向き合うだけの強い思いがあった。

第十一話〔S i n g i n g ・ A t ・ T w i l i g h t〕（後書き）

どうでしたでしょうか？

お気に入り登録がすこしずつ増えてきました。

本当にありがとうございます。

読んでいただいている皆さんに最大級の感謝を。

第十二話〔Stand・Before・A・Dear・Person〕

（前書き）

どうも作者です。

今月は結構更新できました。

これも、皆さんが読んでくれているからですね^^
ありがとうございます。

今回はかなり短いです・・・。

では、また、後書きで^^^

第十二話〔Stand・Before・A・Dear・Person〕

「おはようさん、彩芽。」

時刻は朝の８時半を少し過ぎた頃。

「おはようございます、風芽義兄さん。って早すぎませんか？」

時計と風芽の顔を交互に見る彩芽。

「そうだな。少し早く着きすぎたなとは思ってたんだが、問題ないだろ？お前も来たんだしな。」

「まあ、そうですね。では、行きましょう。」

「そうだな。」

二人は改札を抜け、ホームに向かう。

タイミングよく、電車がホームに滑り込んでくる。

「今日についているようだな。」

風芽は笑ってみせる。

「そうみたいです。しかも、座れそうですね。」

彩芽も笑ってみせる。

二人並んで七人掛けシートに座る。

電車はゆっくりと走り出す。

車内で二人は三年の時間を埋めるように語る。

今までの出来事、これからの事、他愛もない話、笑った話、学校の仲間の話、バンドを再び始めた話、彩芽はいつもよりも饒舌に話す。

風芽はそれを楽しそうに聞いている。

端から見れば仲の良い兄弟のようにも見える。

時間はあつと言う間に過ぎ、下車駅まで各駅で来ていた。

「あつと言う間でしたね、義兄さん。」

彩芽は話したりなさそうに風芽に話しかける。

「まったくだな。さあ、行くぞ、彩芽。」

電車を降り、改札を抜け歩く。

出勤ラッシュも終わり、静かな街をゆつくりと歩く二人。

「花を買っていいよ。」

カントリー調にまとめられたら店内には色とりどりの花々が並べられている。

「あら？また、いらしてくださいね。」

白いエプロンをした女性が店の奥から出てくる。

「ええ：また、見繕って貰えませんか？今の季節にぴったりな花束を：。」

「はい、かしこまりました。さっきも同じ様なオーダーをいただいたんですよ。あら、今日はお連れの方がいらっしゃるんですね。どこかでお会いした事あるかしら：？」

首を傾げる。

「そうなんですか。同じ様な事を考える人はいるものですね。」風芽は笑う。

「あ、初めましてですね。直接はないと思いますよ。」
新たに現れたIS使いとして一時ながらお茶の間を騒がせたのだ、見覚えがあるのは当然と言えば当然と彩芽は内心思う。

「出来るまで少しゆっくりして下さいね。」

「はい。」

彩芽はなんとなく店を見て回る。

「はい、出来ましたよ。」

にこやかな笑顔の店員は風芽に花束を2つ手渡す。

「いつも、すまない。」

手渡された花束を抱え、笑う風芽。

「いえ、あの、また、いらしていただけますか？」

少しだが頬を赤らめる店員。

「ええ：もちろん。」

風芽は優しく微笑みかけ、店を出る。

緩やかな坂を登っていく。

「義兄さんもなかなかやりますね。」

彩芽はにやにやしながら風芽を見る。

「なんの話だ？」

本当にわからないという様子で首を傾げる風芽。

「本気で言ってるんですか？」彩芽は驚く。

「ああ、全くわからんぞ。はっきり言え、彩芽。」

「では、僭越ながら、さっきの店員さん、義兄さんに恋してますよ。」

こんな所にも朴念仁がいたかと頭をかく彩芽。

「ばかな、俺の目が殆ど見えていないのも知っているんだぞ。あり得ん。もっと、いい人がいるさ……きつとな。」

風芽は軽く笑ってみせる。

「義兄さん、そのハンディキャップを気にする事なく、義兄さんを好きになった女性ですよ。大切にすべきです。」

彩芽は風芽の肩を掴む。

「随分、熱くなるな、彩芽。お前にそんな風に言われるとは思ってもしなかったよ。昔は鍛錬と勉強だけが友達みたいな顔してたのにな。お前も大切にしたい人に出会ったようだな。」

ニヤリと含み笑いをする風芽。

「今、僕の話をしている訳じゃありませんよ！」
慌てる彩芽。

「まあ、いいじゃないか。お前も男だからな。」
声をあげて笑う風芽。

「だが、俺も少し考えてみる事にする。」
突然、真剣な顔をする風芽。

「是非、そうして下さい。」

彩芽は掴んでいた風芽の肩を離す。

再び坂を登る二人。

スーツを着た二人組とすれ違う。

二人は彩芽を見て、軽くお辞儀をする。
彩芽も軽くお辞儀を返す。

どこかで会った気がするが思い出せない彩芽。
気のせいだろうと、再び坂を登る彩芽であった。

桶に水を溜め、柄杓とタオルを持ちきちんと並んだ墓石の列を抜けていく。

その中の一つの前で止まる。

『神代家代々之墓』

と彫り込まれている。

そこには真新しい花束が置かれていた。

「誰か来たんでしょか。」

「その様だな。」

綺麗に磨かれた墓石、返られている水。

「せっかくなので、もう一度磨いておきましょうか。」

タオルを濡らす彩芽。

「そうだな。」

何かが解せないという顔の風芽。

10分足らずで磨き終わり、線香に火を付け、台に置く。

煙がゆっくりと天に登っていく。

「父さん、母さん、姉さん、来ましたよ。三年ぶりですね。」彩芽はしゃがみ込んで墓石の向こう側に眠る家族に話しかける。

「怪我也この通り全快でどこも異常はありません。あと…。」左腕を突き出し、見せる。

「姉さん、左腕をありがとうございます。痛くなかったですか？ 先生手術上手だからきつと痛くなかったんでしょうね…。」言葉が詰まる彩芽。

「僕は今、姉さんと同じIS学園に通ってるんですよ。驚いたでし

よ？姉さんのISが僕に力を貸してくれているんです。この力で今度は僕が大切な人達を守ってみせます：最後に来るのが遅くなっ
てすいませんでした。また、来ます。」

立ち上がり、背を向ける彩芽。空を見上げる彩芽の頬を一筋の涙が伝う。

「彩芽、行くか…。」

それだけを告げ、歩き出す風芽。

「ええ、義兄さん。」

二人は墓地を後にするのであった。

坂を下り、駅に着いたと同時に大雨が降り出す。

「いいタイミングでしたね。」「全くだ、さあ、帰ろう。」

そうして二人は帰路に着くのだった。

雨は激しくなり、雷も鳴り始める。

霧の立ちこめる人々の眠る地に傘もささずに一人佇む男がいる。

全身黒色服に身を包み、深い深い闇のような黒い髪、その見えな
い井戸の様な暗い瞳。

「あの二人は相変わらずなれ合っているのか…。」

神代家代々之墓と掛かれた墓石を一瞥する。

「まあ、いい：アイツがやっと出てきたんだ：近いうちに挨拶でも
行くか。」

ニヤリと笑い、すーっと霧に溶けるように姿は消えていった。

第十二話〔Stand・Before・A・Dear・Person〕

（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回のUPも出来るだけ早くできるようにがんばります。

最後になりましたが、読者の皆様に最大の感謝を。

第十三話 [My・Gift・To・You] (前書き)

どうも、作者です。

もう少し夏休み編が続きます。

夏休みはオリジナルがほとんどになる予定です。

第十三話 [My・Gift・To・You]

時間は12時半、彩芽は一人で異常な程、汗をかいている。

場所は喫茶店内のカウンター席、目の前にはキレイに食べ終わったハヤシライスの皿。

手にはお金を支払おうと出した財布。

そして、問題はここにあった。

遡ること二時間前：

「ご馳走様でした。」

いつものように秋穂と朝食をとった彩芽。

「お粗末様でした。ところで、秋穂さん。そろそろ、冷蔵庫の中の食材が底を付きそうなので買い物へと思っているのですが、暇ですよね？」

食べ終えた食器を下げる彩芽。「暇って言えば暇かなあ。買い物に行くだけじゃつまらないからデ…」

ートにでもと言おうとした秋穂の言葉を遮り、秋穂の仕事用の携帯が鳴る。

慌てて電話に出る秋穂。

真剣な顔で対応する秋穂の様子から邪魔をしないようにキッチンに移動する彩芽。

「彩芽、ごめん。買い物は行けそうにない。」

せわしなく動き回る秋穂を見ながら食器を洗う。

「彩芽、…借しと…」

秋穂が何かを言ったが聞き取れなかった。

「なんですか？秋穂さん。」
聞き返す彩芽。

「だからうちよつと…」

何かをひっくり返す音でまた聞こえない。

「いいですよ！持ってって下さい！」

どうせたいした物ではないだろうと彩芽は2つ返事をした。

そして現在…

財布に穴が開くのではないかと思う程覗き込む彩芽。

「あ、あの、すみません…。」彩芽は恐る恐る店員に声を掛ける。

「は…い？お会計ですか？」

カウンターの向こう側にいる店員がにっこりと彩芽に笑いかける。

「はい…あの、非常に言いにくいのですが…」

彩芽は生唾を飲む。

「はい？」

笑顔を崩さない店員。

「あの…実は、財布の中身を忘れまして…」

だらだらっ汗を流す彩芽。

「え…それは…困ったわね…」

笑顔から困り顔に変わっていく。

「はい…する気はなかったとはいえ、無銭飲食を…してしまいました。」

手首をくつつけて手を出す。

「え？ぷっ…あははは。そこまでしないわよ。タダで訳にはいかないけど、食事代分アルバイトしていきなさい。」

再び笑顔に戻る店員。

話を聞くと店員ではなく店長だったらしい。

「じゃー、よろしくね、彩芽君。」

「はい、頑張ります!」

エプロンを着け、スポンジに洗剤を付ける。

シンクに少し溜まり始めている食器を洗い始める彩芽であった。

昼の忙しい時間も過ぎ、ゆったりとお茶を楽しむ客が増える。

ゆったりとしたBGMが店内に広がって行く。

「彩芽君、お疲れ様。随分手慣れてるわね。」

コーヒーを入れながら彩芽に話しかける店長。

「そうですか?」

最後の皿を洗い、食器乾燥機に入れる彩芽。

「そうよ。ねえ、彩芽君はこの学校に通ってるの?」

ウェイトレスに出来上がったコーヒーを渡す。

「IS学園ですよ。」

にっこりと笑いながら新しく下げられてきたコーヒークップとグラスを洗う。

その時、カランカランと来客を知らせる鐘になる。

「いらっしやいませー。」

店長は微笑みながら声を掛ける。

「いらっしやいませー。って織斑先生に山田先生!」

洗っていた皿を落としそうになる彩芽。

「ん? 神代か、こんなところで何をしている?」

いつものスーツ姿ではなく、私服姿の織斑先生。

「あゝ、神代君、こんにちは。」

ひらひらと手を振る山田先生はいつもと変わらない様子だった。

「あら？この綺麗な女性2人とも彩芽君の知り合いなの？意外と隅に置けないわね。」

クスクスと笑いながら檸檬を漬けた水を出す店長。

「店長！冗談はやめて下さいよ！このお二方は僕の担任と副担任の先生なんですから。」

「ふふふ、分かっているわよう。ところで、ご注文はどうされますか。」

完全にからかわれた彩芽。

「私はブレンドコーヒーを。」檸檬水の入ったグラスをカウンターに置く織斑先生。

「私はショートケーキと紅茶のセットで。」

各々の個性がはっきりと分かる注文をする。

「はい、かしこまりました。少々、お待ち下さい。」

きつちりと頭を下げ、コーヒーを入れに移動する。

「神代、どうしてこんなところで皿洗いをしている？アルバイトは禁止だぞ。寮に戻ったら特別メニューの訓練を準備しておいてやるからその気だな。」

彩芽を睨み付ける織斑先生。

その眼光はまさに修羅そのものである。

「まあまあ、織斑先生、神代君にも何か理由があるんじゃないですか？ね、神代君。」

柔らかな笑顔を向ける山田先生。

織斑先生とは対照的に山田先生の顔はまさに女神である。

「あの…、実は…」

彩芽は恐る恐る、今の状況を二人に説明するのであった。

「なるほど…昼食を食べた方がいいが、財布の中身が無く、皿洗いをしていると言う訳か。」

運ばれたコーヒーに口を付ける織斑先生。

「そういう理由なら仕方ないですよ？ 織斑先生。」
満面の笑みを織斑先生に向ける山田先生。

「ふむ：財布の中身くらい確認しておけ、馬鹿者。」
再び、コーヒーに口を付ける織斑先生。

「あはは、すみません。」
苦笑いを浮かべる彩芽。

「でも、神代君、エプロンよく似合いますね。将来、喫茶店でも開いたらどうですか？」

ショートケーキをニコニコしながら口に運ぶ山田先生。

「そうですね。それも悪くはないかもしれませんね。」
彩芽は笑いながら答える。

「その時はここに修行に来ればいいわよ？ みっちり教えてあげるから。」

四人は声を出して笑った。

それから数時間が立ち、喫茶店としては終了の時間になる。

「今日はごめんなさいね、長時間手伝ってもらっちゃって。」最後の片付けを済ませる店長。「いいえ、良い経験になりました。こちらこそありがとうございました。」

彩芽はエプロンを外し、近くの椅子に掛ける。

「ねえ、コーヒー一杯飲んでいらない？ 奢るわよ？」
洗い立てのコーヒーカップを2つだし、サイフォンを取り出し、豆をミルでゆっくりとゆっくりとする。

カリカリカリとミルの音だけが店の中を支配する。

窓からはオレンジの日差しが差し込んでいる。

ついついボーっと外を眺める彩芽。

「はい。彩芽君、コーヒー。」いつの間にかカウンターの外に出て彩芽の隣にコーヒーカップを2つ持って立っていた店長。

「あ、ありがとうございます。頂きます。」

カップから上る湯気から薫るコーヒーの薫を胸いっぱい吸い込む。そして、口を付ける。

口の中に広がる程よい苦味。

喉を通り抜けて行った後に残る薫りを楽しむ。

「はあ。すごく美味しいです。」

「そう、よかった。」

その時、来客を告げる鐘が鳴り、独りの男性が入って来る。

「お疲れ様。ん？バイトの人だったの？」

優しい笑みを浮かべる男性。

「ふふ、違うわ。今日だけ少し手伝ってもらったのよ。」

男性に微笑みかける店長。

「そうなんだ。」

カウンターに入り、棚から真新しい腰巻きのエプロンを取り出す。

「ふう、ご馳走様でした。」

カップをカウンターに下げる。

「うまかっただろ？俺のお薦めはチョコレート・コーヒーだけどな。」

カップをシンクに漬ける男性が彩芽に笑いかける。

「そうなんですか。また、頂きに来ます。」

「そうするといい。」

棚から磨かれたカクテルグラスやショットグラスを並べていく。昼は喫茶店、夜はショットバーになるんだと彩芽は認識する。

「それでは、僕はそろそろ失礼します。今日はいろいろありがとうございました。うございました。」

深々と頭を下げる彩芽。

「こちらこそ、長々とごめんなさいね。あと、これ、今日のアルバイト代よ。五時間分マイナス食事代の分だけだね。」

いたずらっぽく笑いながら茶封筒を取り出す店長。

「頂けませんよ、それは。元は僕が財布の中身を忘れたのが悪いんですから。」

彩芽は封筒を受け取らない。

「貰っておくといい。自分のした仕事に対する正当な評価なんだから。」

グラスの準備を終え、軽く手を洗うマスター。

「じゃー、すいません、頂戴します。ありがとうございます。」
封筒を受け取り、鞆にしまう。

「いいえ、また来てね。」

最後に眩しいほどの笑顔で見送る店長。

彩芽は扉の鐘を聞き届け、店を後にする。

夕方のオレンジの中を一人歩く彩芽。

ふと、雑貨屋のショーウィンドウに飾られている小さめのクロスのペンダントが目に残る。

財布にお金が入っていない事を思い出し、諦めかけるが、さっきも買った茶封筒を行儀が悪いが開けてみる。

中には五千円と手紙が一枚。

今日はすごく助かったわ。

ありがとうね。

これはお礼の気持ちだからね。彼女にでもプレゼント買ってあげたら？

それじゃ！また、お店に来てね！

B Y店長こと、金井

クロスのペンダントの値段を見る。

四千九百円。

小さくガッツポーズをする彩芽。

早速、店に入り、店員に声をかけ、ペンダントを持ってきてもらう。

「ご自宅用ですか？プレゼント用ですか？」

店員は彩芽に尋ねる。

「自宅：あ、いえ、プレゼント用で。」

彩芽はなんとなく照れくさそうに笑う。

準備が出来るまでブラブラと店内を見て回る。

「お待たせしました。」

小さな紙袋を手に店員が彩芽の前に現れる。

「あ、ありがとうございます。」

彩芽は先ほどどうって変わっていつもの笑顔を店員に向ける。

「ありがとうございます、またのご来店お待ちしております。」

彩芽は軽い足取りで自宅に戻っていく。

結局、コンビニでお金を下ろし、スーパーで買い物をして家に帰る。

家に着いた頃には、すっかり夜の深い青に包まれた空。

家の照明はついていない。

玄関の照明を入れ、廊下を歩く。

リビングにつながるドアを開けると暑い空気が廊下に流れ出してくる。

リビングの窓を全て開け放ち、空気を入れ換える。

小さな紙袋とスーパーのビニール袋をテーブルに置き、夕飯の準備をする彩芽。

夕飯にラップをかけ、風呂に入る。

風呂から上がった後も帰ってこない秋穂を待ちながらソファーに寝転がりテレビの電源を入れる。

真剣に見るでもなく、さらっと流していく。

午後10時のニュースが始まり、キャスターが何かを話始めたところで彩芽の記憶が途切れる。

「…が…彩…彩芽!」

秋穂に呼ばれてハッと目を覚ます。

「あ、秋穂さん、お帰りなさい。あれ…寝てたみたいですね…。」
眠そうに目をこする彩芽。

「ソファーなんかで寝てたら寝違えるわよ?」

優しく笑う秋穂。

「そうですね…そういうえば、今、何時ですか…?夕飯は…?」慌てて上体を起こす彩芽。

「もう、日付が変わってるわ。ごめんね、遅くなって。」

「お疲れ様でした。大丈夫でしたか?」

すっかり目を覚まし、ソファーに座り直す彩芽。

「うん、大丈夫だったわ。夕飯は明日頂くわ。」

彩芽の隣に座る秋穂。

「そうですか、よかったです。あ、そうだ。」

ソファーから立ち上がり、テーブルの上におかれている小さな紙袋をとり、ソファーに戻る彩芽。

そして、まじまじと秋穂の顔を見る彩芽。

「え…彩芽…どうしたの?顔になんか、付いてる?」

彩芽の瞳に写る自分の顔を確認する秋穂。

「あ…いや、その。」

なぜか緊張する彩芽。

「なんだか、歯切れが悪いわね？」

秋穂の頭の上には疑問符が浮かんで見える。

彩芽は心の中で平常心と言う言葉を連呼している。

カッと目を見開く彩芽。

「彩芽：彩芽君？大丈夫？」

若干、身を離す秋穂。

「はい、大丈夫です。あの：これ、秋：秋穂さんに：。」

小さな紙袋を秋穂に差し出す彩芽。

微妙に手が震えている。

「私に？開けてもいい？」

秋穂の目が輝く。

「はい、どうぞ。」

紙袋の中から淡いピンクのリボンで結ばれた白い小さな箱を取り出す。

そっとリボンを外し、箱の蓋を開ける。

中には小さなクロスのペンダントが入っていた。

「わぁ、可愛い。これ、私に？」

彩芽の顔を見つめる秋穂。

「はい：いつもお世話になってるので：そのお礼です：そんな良いものではありませんけど：。」

顔が熱くなっていく。

「早速付けてみるね。」

秋穂が首にペンダントを付けるがなかなかホックがかからない。

「ごめん、彩芽、ホックとめて。」

彩芽に背中を向け、長い髪を手で持ち上げる。

秋穂の首の女性的なラインにドキッとする彩芽。

「はい、出来ましたよ。」

なんとかホックをとめる彩芽。「ありがと。どうかな？似合うかな？」

優しい笑みを浮かべる秋穂。

「はい：とても良く似合ってます。」

ネックレスをつけている姿を想像して買ったが実際につけた秋穂は想像以上に似合っていた。少し照れたような彩芽の顔を見て秋穂は彩芽に抱きつく。

「あ！秋穂さん？ど：どうしたんですか？」

彩芽の顔は真っ赤になり、心拍数も急激に上がっていく。

「ありがとう。すごく嬉しいよ。」

満面の笑みを彩芽に向ける秋穂。

その笑顔を見て、彩芽はプレゼントを贈って良かったと心の底から思った。

そして、この笑顔を守り続けていくと誓ったのだった。

「ふうー、あつと言う間にお昼ね。」

秋穂は診察室の中で軽く伸びをする。

「あれ？先生がペンダントなんかしてるの珍しいですね。」

看護師の一人が胸元に光るクロスのペンダントに気が付く。

「うん：もらったんだ。今は私だけと黒曜の帝から。」

看護師はよく分からないと言う顔をしているが秋穂は終始、笑顔だった。

そして、黒曜の帝が作った昨日の晩御飯を詰めたお弁当を食べに席を立つのだった。

第十三話 [My・Gift・To・You] (後書き)

いかがでしたでしょうか？

出来るだけ、早く更新を目指してがんばります。

最後に、読んでくださった皆さんに最大の感謝を。

第十四話〔E s c a p e ! L i k e ・ A ・ R u n n i n g ・ H e r e 〕

（前書き）

どうも、作者です。

ようやく暑いのも去ったかとおもってましたけど、なんかまた、暑くなりましたね。

体調崩したりしてませんか？

第十四話〔Escape! Like・A・Running・Here〕

「ふう、平和だな、山田先生。」

窓の外の入道雲を見る織斑先生。

「そうですね。ん。ん。」

山田先生も同じように窓の外を見て、伸びをする。

聞こえてくる蟬の声の中にツクツクボウシの声が混じっていた。

「よし、たまには奴らを揉んでやる事にしよう。」

「はい？ 奴らとは？」

予想は付いているが一応確認する山田先生の頬を一筋の汗が流れる。

「決まっているだろう。織斑と神代の二人だ。」

軽く笑って見せる織斑先生の顔見て苦笑いを浮かべる山田先生だった。

「そうと決まればさっさと準備して、奴らの部屋に向かうでしょう。」

二人は職員室に向かって歩いて行くのだった。

「ふう、やっと終わった。」一夏は肩を回す。

廊下を歩いてる時、何やら大量の荷物を運ぶ生徒がいたので、手伝ったのだが、思いのほか量が多かった為、かなりの重労働だった。

『よし、たまには奴らを揉んでやる事にしよう。』

織斑先生の声に思わず、壁に張り付き、耳を澄ます一夏。

奴らとは自分と彩芽の事を指していることを直感で感じた一夏。

『決まっているだろう。織斑と神代の二人だ。』

やっぱりと肩を落とす一夏。

しかし、肩を落としている場合ではないと来た廊下を戻り、自室を目指した。

「平和ですね。」

ベットに寝転びながら、部屋の窓から見える入道雲と聞こえてくる蟬の声聞く。

「あ、ツクツクボウシ…、もう時期、秋ですか…。」

目を天井に向け、軽く瞑る。

ゆっくりと意識が沈んで行く。

その時、スゴイ勢いで扉が開き、一夏が駆け込んで来る。

「彩芽！起きてくれ！緊急事態だ！」

血相を変えて彩芽を無理やり起こしにかかる一夏。

「なんですか？何があったんですか？」

軽く伸びをする彩芽。

「千冬姉が…この部屋に俺たちを特訓する為に来る…。」

口にするのも恐ろしいと言わんばかりの一夏。

「な！逃げましょう！今すぐ！速攻！一分一秒でも早く！」

ベットから跳ね起き、必要最小限の装備だけを持つ。

「よし、行くぞ！」

「はい！行きましょう！」

全力疾走で部屋を出て行く二人だった。

「おほん。一夏さん、いらっしゃいますか？」

セシリアが部屋のドアをノックする。

まったく返事がない。

「む？セシリア、何をやってるのだ？」

箒が後ろに立っていた。

「あら、箒さん、ご機嫌よう。何って決まっていますわ。少し早いで

すが、一夏さんをランチにお誘いにあがったのですわ。」

セシリアは軽くスカートを摘み頭を下げる。

「ほう、奇遇だな。私もそのつもりで来たのだがな。」

腕を組みセシリアを見る箒。

「申し訳ありませんが、今日は私が先にここに来ましたから、私に権利があると思いますわ。」

ずいっと一歩前に出る。

「何を言う、私は幼なじみだ、あいつが私の誘いを断るはずなからう。」

幼なじみと言うポジションを全面に押し出す箒。

視線と視線がぶつかり、火花を散らす。

「おい、お前たち、こんなところで何をしている?」

睨み合うセシリアと箒がびくつと固まる。

まるで、首の関節が錆びたようにギリギリと音を立ててゆっくりと横を向く。

一気に噴き出す汗。

その視線の先には織斑先生が立っていた。

「こ、こんにちは、織斑、先生。」

「ど…どうも…」

ぎこちない笑顔を織斑先生に向けるセシリアと箒。

「うむ。別段、用事がないならそこをどいて貰おうか。」

セシリアと箒は無言で道を空ける。

「織斑! 神代! いるか!」

ドンドンと木製の扉を叩く。

返事が全くない。

「ふむ。」

諦める様に背を向ける織斑先生。

一步、二歩と廊下を歩き、振り返り、息を吸い込み、思いっきり、ドアを蹴る。

木製のドアは衝撃に耐えきれず、木片をばらまきながら部屋の中に倒れる。

「なんだ、出掛けていたか。」何か、惜しそうな顔をする織斑先生。
「あのー、織斑先生、もしかして、織斑君と神代君をお探しですか？」

騒ぎを聞きつけた櫛灘が恐る恐る、織斑先生に問いかける。

「櫛灘、あの二人がどこに行ったか知ってるのか？」

織斑先生が櫛灘を見る。

「いえ、つい五分位前に全力で走る二人が校門の方へ行くのが見えたので。」

なぜかビクビクする櫛灘。

「ほう…奴ら、逃げたか…。ふふふ、面白い。オルコット、篠ノ之、奴らを捕まえるぞ。」

ニヤリと笑う織斑先生の目は狩人の目をしていた。

「とりあえず、街に出て来たのはいいとして、どうするかな…。」

駅の改札を抜けて広場のベンチに座る一夏。

「そうですねー。とりあえず、お昼にしますか？」

近くのファーストフード店を指差す彩芽。

「そうだな。そうするか。」

二人はファーストフード店に入り、少し早めの昼食を取る。

彩芽はBLTサンドのセットを、一夏はダブルチーズバーガーのサラダセットを頼み、二階の駅に面したカウンターに座る。

「それにしても、いきなり、特訓なんて何考えてるんだろうな、千冬姉は…。」

ダブルチーズバーガーにかぶりつく一夏。

「それはわかりませんが、とりあえず、僕達の平和な一日が危なくなるところでしたね。」

ポテトを二・三本まとめて口に運ぶ彩芽。

ふと、窓の外を見る一夏。

「彩芽：彩芽、あれあれ。」

窓の外を指差す一夏。

「どうしたんで：ぶっ！」

とっさに頭下げる彩芽。

眼下の広場には見慣れた制服に身を包んだ金髪の女性と黒髪をポニーテールにした女性、さらには黒のサマースーツを着た黒髪ロングの女性。

前者の二人だけなら遊びに来たのも分かるが、後者がいる事で逃走した一夏、彩芽を追ってきた事が目に見える。

「セシリアと箒、あと、千冬姉：どうする彩芽。」

テーブルに頭をくつつけて話す一夏。

「とにかく、今は、街の方に行くのを待ちましょう。」

同じ様に、頭をテーブルにくつつけて答える彩芽。

端から見ればかなり怪しい奴らに見えることだろう。

そっと顔を上げ、外を見る一夏。

「とりあえず、行ってみたいだな。」

再び、頭を下ろす一夏。

「さあ、どうしますか？」

BLTサンドを急ピッチで腹に放り込む彩芽。

「とりあえず：千冬姉達の裏を付く、つまりは、俺たちが行きそうに無いところを回る。」

ダブルチーズバーガーを包んでいた紙をくしゃくしゃにしてトレイに置く一夏。

「うまく、門限まで逃げ切れれば勝ちですね。さあ、行きますよ！」
姿勢を低くしたまま席を立つ彩芽と一夏。

この時、二人はある事にまったく気が付いていなかった。

この逃亡劇の根幹を揺るがすほどの事を。

一夏、彩芽逃走から30分。

「奴らめ、うまく逃げているようだな…だが、確実に捕まえてやろうじゃないか。」

箒の目が織斑先生のように狩人の目になる。

「どうして、わたくしまで、このような事をしなければなりませんの？それに織斑先生の姿が見えませんが…。」
憂鬱そうな顔のセシリア。

「先生は別行動を取るそうだ。どうだ、今日、一夏達を先に捕まえた方が明日、一夏を昼食に誘うと言うのは。まあ、勝てる気がしないならやらなくてもいいんだがな。」

ニヤリと不適な笑みを浮かべる箒。

「あら、面白そうですね。その勝負乗りましたわ。まあ、勝つのはわたくし、セシリアⅡオルコットに決まっていますが。」

再び、火花が散る二人。

細い路地をゆっくりと進む一夏と彩芽。

「この調子なら、見つからずに済みそうだな。」

一夏が交差点を確認する。

「クリア。」

右手でサムズアップする一夏。サッと交差点渡りきり、周辺を警戒する彩芽。

手信号で一夏を呼ぶ。

その時、彩芽の首に手がかかる。

突然の事でそのまま背負い投げに入る。

「きゃあああ！」

あっさりと背負い投げが決まる。

どすんと地面に転がった人物の顔を見てハッとする彩芽。

「み、みずか？」

「いったー！思いっきり投げたわね！」

地面に転がったままみずかが彩芽を睨む。

「すいません！本当すいません、みずか！」

手を差し出す彩芽。

「まったく、今のは貸しにしとくわよ。」

彩芽の手を取り立ち上がるみずか。

「ところで、こんなところで何してたわけ？」

スカートの誇りを払うみずか。「いや、ちょっと今、逃亡中でして……」

周りを警戒したままの彩芽。

「逃亡？なによ、それ。そんな事よりも、この子、織斑一夏君よね？」

一夏をまじまじと見るみずか。

「えっと、あ、はい、織斑一夏です。初めまして。」

軽く頭を下げる一夏。

「本物だ！私は九条みずかよ。みずか姉さんって呼んでね。」

一夏にウィングするみずか。

「よろしくお願いします、み……みずか姉さん。」

何故か頬を赤くする一夏。

「素直で宜しい。」

満面の笑みを一夏に向ける。

「案外、みずかもミーハーだったんですね。」

彩芽はにやにやする。

ひらひらと手を振り、繁華街の中心部へと向かうとみずか。

「いきなり、投げ飛ばすとは思わなかったぜ、彩芽。」

みずかの背中を見送る一夏。

「あはは…とっさの判断で体が反応しちゃいました。」
同じ様に見送る彩芽。

「さて、ここで立ち止まっている訳にも行かないし、行くか。」

「ええ、そうしましょう。」

二人はみずかとは反対に歩き出した。

一夏・彩芽逃亡から二時間。

セシリアと箒は未だに二人の姿すら見つけられずにいた。

「あの二人、本当にこの街にいますの？」

セシリアはペットボトルの水を一口飲む。

「一夏：見つけたら覚えていろよ…。」

グイッとスポーツ飲料を煽る箒。

「後、一時間半がいいところですよ。それ以上は門限に…門限ですわ！」

セシリアは気が付いた。

一夏と彩芽が現在失念している事実。

「なるほど、門限か…、戻るぞ、セシリア！」

箒も同じ事に気が付く。

「ええ、この勝負、わたくし達の勝利ですわ。」

セシリアと箒は学園に戻って行くのであった。

ここで一つ確認しておきたい。

IS学園は全寮制の学校である。

「逃げ切った…っばいな。」

一夏、彩芽はありとあらゆる手を使って身を隠し、人通りの多い道を避け、時には地下へ潜り、門限のギリギリよりも少し前、駅の改札の前に立った。

慎重に周りを警戒しながら改札を通り抜け、ホームに上がる。

ホームでも見通しの良い位置に二人背を向けて立つ。

「ここではなく、向こうが決戦の地と言うことなのでしょうね…。」
ホームに着いた電車に乗り込み、死地へと向かう二人。

大事な事なので、二回確認する。

IS学園は全寮制である。

追加するならば、織斑先生は常勤の教師であり、一年の寮長である。

改札を出るまでは何もなかった。

嵐の前の静けさのように…。

「あらあら、一夏さんに彩芽さん、ご機嫌いかがですか？」

セシリアが彩芽の前に立ちふさがる。

「あはは、セシリアさん…ご機嫌よう…。」

彩芽が少し、腰を落とす。

「一夏、ずいぶんと手こずらせてくれたな…この礼はきっちりさせてもらうぞ…。」

箒が腕を組み、一夏を睨む。

「よう、箒。悪いがここは通させてもらうぜ。」

ジリジリと横へ移動する。

一陣の風が彩芽とセシリア、一夏と箒の間を吹き抜ける。

生温い風が四人の頬を撫でる。ぴたりと風が止む。

刹那、彩芽がセシリアに向かって全力で走り出す。

「ちよっと！彩芽さん！」

一気に距離を詰める彩芽の顔はこのまま押し通ると見てわかる程の

殺気に満ちていた。

ぶつかる瞬間目をつむるセシリア。

しかし、衝撃は襲ってくることはなかった。

「セシリアさん、すいませ〜ん！」

彩芽はセシリアの横をすり抜け、どんどん距離を離していく。

「彩芽さん！お待ちなさい！」慌てて追いかけていく、セシリア。

「やるなあ、彩芽。じゃあ、俺も通させてもらうぜ、箒！」

一夏も真っ直ぐ、箒に向かう。

「同じ手で攻めるとは笑止！」脚を開き、受け止める体制に入る箒。

「甘い！甘いぜ！箒！」

突然、箒の目線から一夏が消える。

「何！貴様！」

箒は驚く。

一夏は、箒のスラリと伸びた脚の間をスライディングで抜ける。

「悪い、箒！お前も早く戻った方が良いぞ！」

彩芽を追いかけるように一夏も走り抜けていく。

「一夏！待て！」

箒も一夏の背を追いかける。

彩芽はセシリアと距離を離し、学園の正門が目の前に現れる。背後のセシリアとの距離を目視するため、背後を振り向く。

正面を見直すとそこには黒い壁があった！

既に止まれる距離ではない。

ぶつかるギリギリで身体を捻り、地面を転がる彩芽。

「だ、大丈夫ですか？怪我とか…ありま…せ…ん…か？」

顔を上げる彩芽の顔が凍り付く。

「なかなかいい判断だったな…神代。オルコット、門限も近い、寮に戻れ。一日悪かったな。」

そこに立っていたのは織斑先生だった。

「いえ、失礼しますわ。」

セシリアはさつさと寮に戻っていった。

「彩芽！って、げえ、関羽！」

一夏が走ってくるが足が止まる。

「織斑、誰が三国を駆け抜けた英雄だ？」

冷たい目を一夏に向ける織斑先生。

「うっ。」

その目を見て絶句する一夏。

ゆっくりと織斑先生が一夏に近づいていく。

「一夏！」

動けない彩芽の前に駆け寄る彩芽。

「ほう…、私に勝てるんでも思っているのか？」

彩芽を見つめる織斑先生。

「勝てる気はしませんが、みすみす友人を見捨てられる程、ドライには出来てないですよ。」

両手を大きく開き立ちふさがる。

「彩芽！逃げろ！俺は大丈夫だ！」

一夏は叫ぶ。

「絶対に、退きません！」

少し振り返り叫ぶ彩芽。

その時、彩芽の顔が驚愕みにされる。

「友情を深めるのは構わんが、目の前に敵がいるのだぞ、馬鹿者め…」

ギリギリと万力にでも締め付けられているかのような圧力。

ギシギシと軋む頭蓋骨。

目の前が霞んでいく。

そして、意識が途絶える。

ぼんやりと意識が戻る。

いつの間にか、堅いアスファルトの上に転がっている。

何があったのかはつきりしない。

霞んだ視界の先にはチョークスリーパーをこれでもかと言うほど食らっている一夏がいた。

もがいていた腕がダラリと垂れる。

「い：一夏。」

再び意識が薄れていくなか彩芽は一つの事実に気が付く。

『寮に住んでるのに逃亡しても結局は寮にもどらなければならぬ事』に…。

「はっ！」

彩芽は目を覚ます。

そこは自室ではなく、保健室のようだった。

「よう、彩芽。」

隣のベッドに腰掛ける一夏の姿があった。

「一夏、大丈夫ですか？ よっ…と。」

身体を起こし身体の異常を調べる彩芽。

特に変わったところはなさそうだと確認して一夏と向き合う彩芽。

「よくよく考えてみたらさ：俺達さ、寮に住んでるんだよな…。」

床を見つめる一夏。

「ええ、そうですね：一瞬逃げて切れても結局、ここに戻るんだから意味ありませんね…」

同じように床を見て溜息を吐く彩芽。

「俺達、半日なにやってたんだろうな。」

「僕達、半日なにをしてたんでしょうか。」

言葉は違えど同じ事を同時に吹き出す彩芽と一夏であった。

日付が代わってから10時間後：

「あいつら、何やってんの？」チョコレート菓子をくわえながらグランドを見る鈴。

「分からんが、私の嫁は何時間走らされているんだ？」

ラウラは心配そうに窓に張り付く。

「ねえ、箒。昨日一夏と彩芽は何をしたの？」

シャルロットが尋ねる。

「つまらん事で織斑先生の怒りを買ったのだ。」

その時、ふと思い出す。

夕刻、自分の股下をスライディングですり抜けていく一夏の真剣な顔。

一瞬目があって箒に笑いかけたように見えた。

その時、箒の顔が爆発した。

頭の頂点から湯気が出るのではないかと言うほど、顔が赤くなる。

股下をスライディング、上を見る、制服Ⅱスカート。

つまり、一夏は見る気は無かったかも知れないが見ている可能性がある、箒の下着を。

「あああああああ！！」

急に恥ずかしくなり、なぜか逃げ出す箒。

「箒さんも何かあったのかしら。」

優雅に紅茶を飲むセシリアがつぶやく。

「それにしても…」

ラウラが窓越しの空を見あげる。

「平和よね。」

「平和だ。」

「平和だね。」

「平和ですわ。」

涼しいエアコンの効いた部屋から熱気で揺らぐ外を走る男二人を見て
眩く四人だった。

第十四話〔E s c a p e ! L i k e ・ A ・ R u n n i n g ・ H e r e 〕

（後書き）

今回もオリジナルでした。

いかがでしたか・・・？

次回夏休み編最終回です！

お楽しみに！

最後に、読んでくださってありがとうございます。

これからもぜひ、ご贖に

第十五話〔End・Of・Usually::SAIGA・SIDE〕

（前書き）

どうも、作者です。

なんとか下がるモチベーションを制し、書き上げました＜＜
ぜひ、読んでいただきたいです；；

第十五話〔End・Of・Usually::SAIGA・SIDE〕

「えーっと、この当たりのはずなんです。あ、あったあった。」
表札には『織斑』と書かれている。

表札の下インターホンをなんの躊躇もなく押す。

ピンポンと来客を知らせる音が鳴る。

数十秒待つと玄関が開き一夏が現れる。

「よっ。時間通りだな、彩芽。」

門扉を開き、中に招き入れる一夏。

「ええ、本当は少し早くに来るつもりだったんですが、少しバタバタしまして。」

実際、30分くらいに前に着き駅前で少し買い物をしてから来るつもりだったのだが、その思惑は寮の部屋を出て五分としないうちに打ち碎かれた。

帰省先や旅先から帰ってきたクラスメートや上級生から出会う度にお土産を渡されたのだった。

ここがチャンスと言わんばかりにほぼ全てにメッセージカードが刺されていた。

一夏にと渡された物と自分に渡されたのを一度部屋へ戻り仕分けをして部屋を出た頃には予定通りの時間になっていたと言う訳だ。

電車に乗っている間、カードに書かれた学年、クラス、名前、電話番号、メールアドレスを全て登録するだけで終わってしまったのだった。

「そうか。まあ、こんな所で立ち話もなんだし、上がってくれよ。」
家に招き入れる一夏。

「では、お言葉に甘えて、お邪魔します。」

玄関に上がると女性物の靴が五足綺麗に並んでいた。

「おいしい、彩芽が来たぞ。とりあえず、空いてるところに座ってくれよ。」

一夏が扉を開ける。

「皆さん、来るなら言ってくれば良かったのに。あ、鈴さん、隣に失礼しますね。」

空いていた鈴の隣に座る彩芽。

「あの、彩芽さん？今日はどうして一夏さんのお宅にいらしたんですの？」

セシリアの笑顔が少し引きつっている。

「今日は一夏さんに呼ばれてましたので、時間通りに馳せ参じたという訳です。あのー皆さんは？いや、まさか、まさかですが…来ちゃった♪的な展開を狙って来た…いやいや、まさか、有り得ないですよね。」

あははと笑う彩芽。

「ま、まさか、そのような展開狙うわけないだろう！」
バンツとテーブルを叩く箒。

「そ！そうよ！なんで、あたしが一夏にそんな展開求めるのよ！あんた馬鹿じゃない！」

あからさまに慌てる鈴。

「わ、わたくしも、狙ってなんかおりませんわ。」

おほほとはぐらかすセシリア。「私はクラリッサに聞いて狙うべきだと言われたので狙ったぞ。」

これでもかと腕を組み胸を張るラウラ。

なんて素直なんだと全員が心の中で呟くのだった。

シャルロットはと言うと真っ赤な顔で俯いていた。

「ん？なんだ？妙な雰囲気だけど、どうかしたのか？」

一夏がお茶を持って現れる。

「な、なんでもないぞ、なんでも…な。」

箒が笑う。

「そっか、ならいいんだけど。さあ、これからどうするか…うちはあいにくみんなで遊べる物がないからなあ。」

みんなにお茶を渡していく一夏。

「まあ、そんな事だろうと思って、ちゃんと用意しておいたわよ。」
鈴が紙袋を机の上に出す。

紙袋の中には様々なボードゲームが入っていた。

「あら、二本のゲーム以外もありますのね。」

「あ、これやったことある。材木買うゲームだよね。」

「ほう、これが日本の絵札遊びか。なかなかミヤビだな。」
花札を手取るラウラ。

「花札に興味がありますか？」

物珍しそうに花札を眺めるラウラに彩芽が話しかける。

「うむ。彩芽はこの花札には詳しいのか？」

「いや、詳しいと言う程ではありませんが、『こいこい』というゲームなら殆ど負けたこと有りませんよ。」

ニヤリと笑う、彩芽。

「ほう：では是非、その腕前、拝見させてもらおう。」

箒の目がキラリと光る。

「ええ、構いませんが：あまり実力が伴わないと吠え面かきますよ？」

眼鏡のレンズが鈍い輝きを放つ。

「では、尋常に勝負！」

ラウラの持っていた花札を奪い取り、札を切り始める箒。
タンッ！と机と札がぶつかる音がする。

「受けて立ちましょう。」

『ゴゴゴゴッ』と言う音と共に彩芽と箒の背後に龍と虎が現れた幻覚を見た一夏達だった。

山を適当な場所で開く箒。

「くっ：8月か：。」

彩芽も同じ様に山を開く。

「ふむ：梅、2月ですから、僕が親ですね。」
山を手にとり、切り始める彩芽。

「今のはなんだ、8月だとか2月だとか？」

興味津々な様子のラウラが一夏に尋ねる。

「ん？ああ、ああやって山を捲って最初の親を決めるのさ。トランプのハートとかスペードのマークが12種類あると考えてくれ。因みに、マークとなる草木はその月々を代表する物なんだ。ちなみに数字の小さい方が最初の親だ。」

一夏が懇切丁寧に説明する。

「ルールはどうする？」

箒が山を半分に割る。

「そうですね、花見、月見、三光は無し、カス・タン・トウの一文上がり無し、ケツ有りできましようか。」

札を配り、手札を開く彩芽。

「三光？カス？タン？トウ？」

「一つ一つ説明するから慌てるなよ、ラウラ。」

一夏は苦笑いしながら子供をあやすようにラウラの頭を撫でる。

「いいか、ラウラ……」

そこからは彩芽の耳には何も聞こえない程、場に集中していく。

「ば……馬鹿な……この私が……完敗だと……」

机に手を突き驚愕にうち震える箒。

「なかなか、やりますが、まだまだ読みが甘いようですね。」

札をケースにしまう彩芽。

「何か彩芽さんは不正をしたと疑いたくなるような完全勝利ですね……。」

セシリアが呟く。

「それは有り得ないわよ……見てたでしょ？彩芽が山を切った後山を分けるのは箒なんだから。」

鈴も息を呑む……。

上がり手が五光と赤短と言う鬼のような上がり方を順当に行つたのだ。

「ラウラさん、『こいこい』のルールは解りましたか？」

いつものように笑いラウラにしまった花札を差し出す、彩芽。

「あ、ああ、今度、帰国する時は土産で買っていくでしょう。」
受け取り、花札のケースを眺めるラウラであった。

結局、ドイツのゲーム、バルバロッサで遊ぶことになった。

ルールを知っている一夏、鈴はルール説明を開始する。

彩芽はレディファーストと席を譲る形で解説を聞く。

黙々と粘土をこね、整形し、思い思いの物を作り上げていく。

シャルロットは誰が見ても馬と分かる彫刻のようだ。

箒の作った物はなんとなく…本当になんとなく、彩芽には井戸に見えた。

ラウラとセシリアははつきりいつて訳が分からない。

ラウラの円錐形の物体。

セシリアの物は謎の細胞生物に見える。

ゲームは進むがラウラとセシリアの作った物体は全く当たらない。

シャルロットの馬は上手すぎてシャルロットの点数にはならないほど早くに正解された。

箒の物はやはり井戸だった。

ぱっと見ではわからなかった様だがシャルロットの的確な質問で正解となった。

結局、ラウラとセシリアの物は正解にならなかった。

「結局、セシリアのはなんだったのよ？」

鈴がセシリアの作品を指差す。

「あら。誰もわからないのかしら。」

全員の顔を見てから手を大きく広げて言い放つ。

「我が祖国、イギリスですわ!」

「「…」」」

「…ぷっ…」

沈黙五名十吹き出したのが一名。

「い、一夏…トイレ貸して貰えますか…?」

彩芽が顔を真っ赤にして言う。

「あ、ああ、大丈夫か?」

心配そうな顔をする一夏。

「え…ええ、大丈夫…大丈夫ですよ。場所は?」

腹を押さえる彩芽。

「廊下を出て左奥だ。」

「あ、ありがとうございます。」

彩芽は席を立ちリビングを後にしトイレに向かう。

トイレに入り、鍵を掛ける。

「ぷっ…くくくっ…あはははは…あはは、あははは。」

吹き出したのは彩芽だった。

「イ…ギリスっ…くくく…勘弁して下さい…ぷぷぷ。」

一生懸命作ったセシリアには大変申し訳なくその場では笑いを堪えた彩芽だったが限界だったようだ。

笑うだけ笑ってトイレを出ると玄関から織斑先生が入ってきた。

「あ、先生、お邪魔してます…ぷっ、おほん、失礼しました。」

慌てて真顔に戻す。

「なんだ、神代、遊びに来ていたのか。家では先生等と堅い呼び方をする事はない。」

織斑先生はジーンズに黒いタンクトップの上に白いシャツを着ている。

「では、千冬さんと呼ばせて頂きます。僕だけではありませんよ。」
そう言い、リビングの扉を開ける彩芽。

「なるほど、賑やかだと思っただけのことか。」

「お帰り、千冬姉。」

ずっと立ち上がり、織斑先生のカバンを受け取る一夏の様は執事のそれだった。

入れ替わりにリビングに入る彩芽は一夏と千冬のやり取りを自分と自分の姉と重ねている事にはっとする。

「どうした、神代？」

千冬が彩芽に尋ねる。

「あ、いえ：なんでもありません。気にしない下さい、千冬さん。」
彩芽は慌てて笑顔を作る。

「そうか。それならいいんだが。」

そういい、部屋に戻る千冬。

ぷはっと忘れていた呼吸を始める女性陣。

そして、会話に出てきたコーヒーゼリーでわいわい騒ぎ出す女性陣と一夏。

その時、リビングの扉が開き、スーツ姿に着替えた織斑先生が現れる。

「なんだ、揉め事か？この家にいる限り仲良くしろ。」

そう言うのとテキパキと準備を済ませ、リビングを後にする。

その時、言い忘れたと言わんばかりに振り返る。

「今日は帰らないから後は好きにしろ。ただし、女子は泊めるなよ？」

布団がないからなといいいリビングを後にした。

「いってらっしゃいを言う隙すら無かったですね。」

リビングの扉を見つめる彩芽。

「いつもの事だからなれたよ。」

この時の一夏の声はどこか寂しそうだった。

6つしかないゼリーは男子が半分ずつに分ける事で解消した。

最初は作った人間が食べるより客に食べてもらうと一夏は遠慮したのだがじゃーと彩芽が半分に割ったのだ。

その時、女性陣はそんな手があったか！と言う顔をしていたのは言うまでもない。

最初、大人振ってブラックのまま一口食べたセシリアとラウラは速攻でミルクとシロップをかける。

彩芽はシロップ無しでミルクだけをかけて一口食べる。

「うん、おいしいですね。少し苦めですがミルクをかけると程よい感じですね。」

二口目を食べる。

「そかそか。でも、この間、彩芽の焼いたシフォンケーキも最高に上手かったぜ？今度、レシピ教えてくれよ。」

はははっとお菓子作りトークを展開する男子二人に少し引き気味の女性陣。

「あ、あんた達…男のくせにデザートなんか作るわけ？」

鈴の顔がひきつっている。

「ん？普通だよな？彩芽。」

何がおかしいのかと彩芽を見る一夏。

「至って普通だと思いますが。」

彩芽も首を傾げる。

「問題はだ…その作ったお菓子が私達に振る舞われていないと言う事だ。」

箒が腕を組み、一夏と彩芽を見る。

残りの女性陣が頷く。

「いつも、作ってる間に予約で数量に達してしまうんですね。」
おかしい事もあるものでしょ？と言わんばかりの彩芽の表情。

「そうそう。学園のカフェのデザートの方が旨いと思うんだけどな。」

」
全く不思議だよなと一夏も表情を少し曇らせる。

「まったく！不思議そうな顔してんじゃないわよ！」

鈴が何故か怒り出す。

「何怒ってるんだよ、鈴。」

一夏が驚く。

「怒ってなんかいいわよ！」

鈴がそっぽを向く。

「まあまあ、鈴さん、今度作る時はちゃんと確保しておきますから機嫌なおして下さいよ。ね、一夏。」

助け船を出す彩芽。

「あ、ああ、そうだよ、鈴。ちゃんと用意しておくよ。」

一夏が鈴に笑いかける。

「おほん。一夏、まさか、鈴の分だけと言うことはないよな？」

箸がわざとらしい咳払いをする。

「ちゃんとここにいる分は確保するさ。」

一夏がそう言うのと女性陣の顔がパアッと明るくなる。

「そーいやみんな何時までいる？夜までいるんなら夕飯の食材を買ってこないと。」

一段落したところで時間も夕飯の段取りを始める時間に差し掛かっていた。

その一言で女性陣の目がキラーンと光った。

「夜は私が料理を作ってやろう。なに、昼とゼリーの礼だ。」またも箸は照れ隠しの咳払いをする。

「そうね！あたしの腕前も披露してあげちゃおうかしらね。」鈴は自信満々に言うのとゼリーを一口食べる。

「じゃ、じゃあ僕も作る側で参加しようかな。」

少し恥ずかしそうに笑うシャルロット。

「無論、私も加わろう。軍ではローテーションで食事係があったか

らな、期待しろ。」

ラウラが腕を組む。

「そういえば、前にわたくしのお弁当を食べてから随分経ちますわね。そろそろ恋しくなってきたのではなくて？」

セシリアが自信満々に言う。

いや、それはないと心の中でツツコミを入れる一夏。

「じゃあ、ぼ」

「却下！（ですわ！）」

彩芽が作る側へ参加を表明しようと口を開くや否や、女性陣全員に止められる彩芽であった。ゼリーを食べ終わった後、雑談を少し楽しみ、食材を買いにスーパーへ向かう一同だった。

そして、一夏と彩芽はリビングでテレビゲームに興じている。しかし、彩芽も一夏も集中しきれない。

キッチンが気になって仕方ないのである。

誰の料理が気になると言う勿論、セシリアである。

ゲームも中途半端に、何度もキッチンに足を運ぶも追い返される、一夏。

最終的には麦茶の入った容器をテーブルに置かれ、足を運ぶ理由すら与えられない状態に陥る。

「気になって、ゲームどころじゃない：ですネ：。」

コントローラーのボタンを操作する彩芽の手は興奮で汗をかくのではなく、妙な冷や汗で濡れている。

「全くだな：ほんと、気になって仕方ない：。」

一夏も手が滑るのか何度も操作を誤っている。

「さあ！出来たわよ！」

鈴がりびングに現れる。

ゴクリと生唾を飲み込む、一夏と彩芽の顔はまるで死地へ踏み込む

兵士の様な顔だった。

「うーん、食べた食べた。」スポンジで食べ終わった皿を洗って
いく一夏。

「まったくですね。最後のあれは流石に効きましたよ。」

やはり、美味しい物からどんどんなくなり、ラウラの作った焼きお
でんと妙に刺激的な香りのするセシリアのハッシュドビーフが残っ
たのだった。

早々に食事を終えた料理を完食された女性陣は自分たちの作った料
理についてあーでもないこうでもないと話し始める。

ラウラは何故残ったのかと真剣に頭を捻り、セシリアは涙目になっ
ていた。

二人の様子に一夏と彩芽は意を決し残ったセシリアとラウラの料理
を文字通り流し込んだのだった。

「片付け、手伝って貰って悪かったな。」

一夏がタオルで手を拭く。

「いえいえ、働かざる者食うべからずですから。」

最後の皿の泡を落とし、ラックに置く彩芽。

それから一時間ほど雑談に盛り上がる一同であった。

「駅まで送って行くぜ。」

その一言に爛々と目を輝かせた女性陣達と共に織斑家を後にする一
同。

街灯がポツリポツリと並ぶ中を雑談しながら歩いている。

「さーいーがーくうーん。」

背後から彩芽を呼ぶ声が聞こえる。

彩芽は振り返り、街灯の先の闇を見つめる。

闇の中を蠢く影が一つ、街灯の下に姿を表す。

全身黒色服に身を包み、顔を隠すようにフードをかぶっている。
その異様な雰囲気全員が凍りつく。

「おいおい、俺のこと、忘れちゃったのかよ？」

フードを外す。

深い深い闇のような黒い髪、その見えない井戸の様な暗い瞳。

「俺だよ、俺、流芽だよ…。」ニヤリと笑う流芽。

「り、流芽…。」

彩芽が流芽の前に立つ。

「なあ、彩芽…。」

そうつぶやくとふっと姿を消す。

「死んでくれよ。」

いつの間にか背後に移動した流芽の動きについていけなかった彩芽。
そして放たれる異常なまでの殺気。

次の瞬間、背中に大きな衝撃が彩芽を襲う。

「ぐっ。」

肺から酸素と言う酸素が押し出される。

「まだまだ、これからだぞ、彩芽…。」

狂喜的な笑顔を浮かべ凶器のような鋭い視線を彩芽に向ける流芽。

「はあはあ、いきなりなんですか…、敵を前に舌なめずりなんて、
三下のする事ですよ…流芽」

肺に酸素を取り込み、流芽を睨みつける彩芽。

「そうかい、そうかい！じゃー、その三下に殺されろや！」

再び姿を消す流芽。

明らかに人間の動く速度を越えている。

右、左、正面、背後…あらゆる方向から彩芽に向けて殺気が飛んでくる。

次の瞬間彩芽の右頬に強い衝撃が訪れる。

「彩芽！」

一夏が叫ぶ。

一夏の声が届いた時には地面に転がっていた彩芽。

「おいしい、生身のままじゃ、俺とまともにやり合えないぞ、彩芽。」

地面に転がる彩芽の前にしゃがみこみ、苦痛に歪む彩芽の顔を楽しそうに眺める流芽。

その体が、一パツずつ機械に変わっていく。

胴体が変わり、胸の中心が黒く光っている。

「使えよ…、IS。じゃないと、俺が楽しめないだろ？」

顔までが機械に変わる。

その姿に彩芽は見覚えがあった。

同じではないが、似ている。

先月の臨海学校で起きた福音事件で一瞬まみえた、真紅のSG。

それとよく似ている。

「ソリッドガーディアン…。」

口の中に入った砂と切れて溢れ出た血を吐き出す彩芽。

「お？知ってたのか。わかっただろ？生身じゃ勝てないってな。」

絞り出したような笑い声を出す流芽。

「使うつもりはありませんよ…ですが、易々とやられるつもりもありません！」

パイザーだけを呼び出し、ハイパーセンサーを起動させる。

「温いな。驚く程温い…。」

再び、移動するが彩芽にはさっきのように消えたようには見えていない、ただ素早く移動していただけなのだ。

左から襲い来る拳を避ける。

「ひゅーう、さすがはハイパーセンサーだな。んじゃ、これならどうよ！」

嬉しそうな声をあげる流芽の左腕から一振りの剣が現れる。

その剣はキィィィンかん高い音を発している。

世に言う高周波振動ブレードである。

再び常人の目には止まらない速度で動き出す。

ありとあらゆる方向から来る攻撃をなんとか避け続ける彩芽。

「避けるだけじゃ面白くないだろうが！よっ！」

突然、方向を変える流芽。

「なっ！流芽！」

その視線の先には見ているしか出来ない一夏達がいた。

「一夏！逃げて！」

彩芽は叫ぶと同時に駆け出す。

しかし、間に合わない。

一夏に襲いかかる、流芽の狂刃。

その時、一筋の青い閃光が流芽の左肩を貫く。

「ぐっ！この攻撃は！」

流芽が体制を整えながら着地する。

「久しぶりだな…オリジナル5。いや、神代流芽。」

真紅のボディ、背中の二本の大剣。

胸部に輝く真っ赤なレンズ。

「やっぱりあんたか、東条優吾！」

流芽は撃ち抜かれた左肩を抑えて叫ぶ。

次の瞬間、もう一筋の青い閃光が流芽の顔目掛けて直進していく。

間一髪でかわす流芽。

「ちっ。相変わらず狡い撃ち方しやがるなあ！オリジナル4！北川さんよ！」

誰もいないはずの空間に向かって叫ぶ流芽。

「狡い？ふん！お前が言えた口かよ？神代！」

誰もいない空間が揺らめき、蒼穹のボディのSGが姿を表す。大型のスナイパーライフルを軽々と肩にかけている。

「一夏！大丈夫か！貴様！誰だか知らんが、人の弟に手を出してた

だで済むとは思っていないだろうな!」

千冬は仕事を忘れ、烈火の如く叫ぶ。

「はぁはぁ、み、皆さんも大丈夫ですか?」

山田先生が息を切らしながら現れる。

「うーん、いいねいいね。主役が揃ってきたじゃないか。でも後二人たりないなあ。」

その時、一台のスポーツカーが急ブレーキをかけて止まる。

「彩芽!」

中から飛び出してきたのはなんと秋穂と喫茶店の店長の金井だった。

「ナイスタイミング。主役も揃ったし：語ろうか：三年前の真実をさあ。」

両腕を大きく開いた流芽の姿は不吉を呼ぶ鳳のようだった。

第十五話〔End・Of・Usually::SAIGA・SIDE〕

（後書き

次話はここにたどり着くまでのほかの人々を書きます！

第十六話〔End・Of・Usually::ANOTHER・SIDE〕

（前）

おはようございます。

作者です。

最近、新しい小説も考えてます。

題材は作者の大好きなロックマンXです。

内容がちゃんとまとまったらプロローグからはじめたいとおもってます。

第十六話〔End・Of・Usually::ANOTHER・SIDE〕

朝8半。

立花生花店と書かれたシャッターを開く女性。

「今日もいい天気。」

そう言いながら店に掛かったカレンダーを見る。

「そろそろ来るかしら……あの人。」

月に一度か二度やって来る青年の顔を思い出す立花詩織。
実家の生花店を母と二人で切り盛りする優しい女性だ。
その青年との出会いはとても不思議なものだった。

「すいません、花屋を探してるのですが……近くにありませんか？」

その青年は花屋の前で水を撒いていた詩織に話しかけた。

「はい？あ……今、花屋の前に居ますよ？」

詩織は最初変な人かと思ったが青年が杖を持っている事に気が付いた。

「そうですか。俺は視力が弱くて、解りませんでしたよ。ところで、貴女は店員さんかな？」はいと詩織が言うと青年はこう言った。

「見繕ってもらえませんか？今の季節にぴったりな花束を。」

その顔を思い出し、優しく微笑みながらアイロンのかかった白いエプロンをする。

「おはようございます。もう開いていますか？」

夏の暑いさなかと言うのに黒のスーツをきつちりと着こなし、ネクタイまで絞めた男性が二人立っていた。

一人は30歳前後ぐらい。落ち着いた雰囲気である。

左の薬指にはばっちり指輪がはめられていた。

もう一人は20代半ばぐらいに見える。

一際目を引くのはその目である。

左は日本人特有の黒に対し、左の瞳は海のような青で少し内側から光っているように見える。「はい。いらっしゃいませ。」詩織は深々と頭を下げる。

「見繕ってもらえませんか？今の季節にぴったりな花束を。」そういい笑うのだった。

「ありがとうございます。また、いらして下さいね。」

店の入り口で深々と頭を下げる花屋の店員に軽く会釈をして、店を後にする

「東条先輩、今の店員さんめっちゃくちゃ美人でしたね。」

オッドアイになった北川は東条の頼んだ花束を抱えながら言う。

「まあ、俺の嫁さんには適わんがな。」

真顔でノロケる東条。

「：はいはい、ご馳走さまですよ。」

東条のノロケをあっさりスルーする北川。

ずーっと続く坂を二人は登る。元同僚の墓があるところへ。

「やあ、芽依さん。久しぶりだね。先月、君の弟君にあったよ。立派に成長していた。」

東条と北川は芽依の眠る墓を綺麗に洗い、手を合わせる。

「俺：弟さんに、ちゃんと話そうと思います。三年前のあの日、何があったのか。許して貰えないでしょうし、恨まれるだろうけど話します。」

北川は墓標を見つめる、芽依の目を見つめるように。しばしの間、黙祷する。

その時、北川は聞いた。

「話してあげて、あの子に。」芽依の声を確かに聞いた。

「さあ、行くぞ、北川。探さなきゃいけない人もいるからな。」

「はい！」

北川は東条の背を追いかけて、芽依のそばを離れた。

二人は気を引き締め、S Gの能力を使って検索をはじめた。

あの時の研究員達の行方を。

その時、前から二人の男が坂を登ってくる。

その顔を確認して驚く。

こんな偶然があるのかと。

坂を登って来たのは話すべき相手、神代彩芽だった。

二人の横を通り過ぎる寸前に頭を下げる二人。

彩芽も軽く会釈する。

そのまま、通り過ぎると二人も歩き始める。

次に会うときはちゃんと話をする時だと二人は心に誓うのだった。

それから数日間、ありとあらゆる手を使って当時の研究に関係して

いた関係者手当たり次第に探しては連絡を取り、あつて回った。

そして、研究員の一人、金井楓花の所在を掴むことが出来た。

早速、携帯で電話を掛ける東条だった。

『お電話ありがとうございます。カフェ・アリエッタです。』当時と変わらぬ金井の声だった。

相変わらず忙しい昼の時間に電話がなり、慌てて電話に出た金井。

「お電話ありがとうございます。カフェ・アリエッタです。」

『もしもし、金井さん？お久しぶりです。東条です。』

「と、東条君：久しぶりね。どうしたの？」

あまりにも突然の電話に驚く、金井。

『神代君にありのままを話す事にしました。』

東条は簡潔に言う。

その声の重みは完全に覚悟を決めている事を告げている。

「そう。わかったわ。ちゃんと伝えるべきですね。彼のお姉さん、芽依さんと私達のやった事を。」

金井もいつかは話さねばならないと思っていた。

しかし、話すことが出来ないでここまで来ていた。

店はバイトのウェイトレスに任せ、10分程話していくうちに覚悟を決めた金井だった。

翌日、店に彩芽が現れた時、金井はいつも通りの金井のままで接する事が出来た。

次に会う時も出来るかは不安だったが。

店を後にした金井は気が付けば花屋で花を買い、あの橋に来ていた。花束をアスファルトに置き、手をあわせたのだった。

空には一番星がキラキラと輝いていた。

秋穂はその日彩芽に嘘を付いた。

患者が急変したと。

だが、そうしてでも知りたい事があった。

秋穂はあの日から事故の事を調べていた。

しかし、答えは出ないままだった。

あの日の前日、医院長にとある実験の緊急時対応で手を貸して欲しいと頼まれた。

利益の為に医院長はその協力を受けたのだ。

そして、あの日、目の前で緊急事態が起きた。

待ち合わせの喫茶店ですっかり冷めてしまったコーヒーに口を付けた時、二人の男が秋穂の前に現れ、深々と頭を下げる。

その二人から語られた実験の内容を聞き、何が起こったのかを理解した秋穂。

そしてその事を近々彩芽に話すと言う。

彼らは自分たちが恨まれようが罵倒されようが受け入れる覚悟である事を秋穂に告げ、去っていった。

秋穂はどんな顔をして彩芽に会えばいいのか分からず、仕事をする。机に置かれている一つのカルテ。

名前は神代彩芽と書かれている。

開くと中には当時の怪我の状態が事細かに書かれている。

赤く塗りつぶされた左腕。

腹部、胸部の裂傷。

頭部打撲。

肋骨の骨折等。

救急車に乗せた時は明らかに裂傷に関しては無数にあったはずなのに、病院のオペ室に入った時には酷い傷だけが残り、小さな傷は残っていないかった。

そして、あまりに驚異的な回復。

拒絶反応すらなく安定した左腕。

廻りは奇跡だと言ったが明らかにおかしいと秋穂は思っていた。

そして、ISを起動出来る彩芽を治療に専念させる為と検査に長い間、病院に入院させていた。

そして、秋穂は一つの仮定を見いだした。

しかし、あまりに非現実的であった為、頭からぬぐい去ったのだった。

彩芽は寝ているであろう時間に戻ったがリビングには明かりが灯っており、部屋に入るとそこには寝息を立てる彩芽がいた。

起こすのも悪いと思ったが、風邪を引くといけないと思い彩芽を揺さぶり起こす。

眠そうに目をこする彩芽はどこか可愛く見える。

渡されたペンダント。

彩芽を頼むと芽依に頼まれたから、一緒にいる事を決めた秋穂。しかし、今は心の底から彩芽の傍にいたいと思う秋穂。

そう、秋穂は気が付いた、自分の気持ちに。

『私は彩芽が好きなんだ。』と。

しかし、もう一人の秋穂が言う。

「あの日に詳細は知らなかったとは言え関わっていたと知ったら受け入れてもらえるのか？」と。

答えは出るわけもなく、ただただ時間が過ぎていった。

東条と北川は焦っていた。

朝からオリジナル5、神代流芽の反応が現れては消え現れては消えを繰り返していた。

しかも、現れる場所がランダムで読めないのだ。

あの日以来姿を眩ましていた、オリジナル5が突然現れた。

目的等は不明だが、彩芽に接触するだろう。

二人は朝から長距離を移動し続ける事になった。

「あゝ、あっちいな。」

神代流芽は不機嫌そうに呻く。

空を睨みつけるように上を見上げる。

流芽な立っているのはとある橋。

三年前のある日自動車一台が爆発炎上し乗っていた4人のうち3人が死亡する事故の起きた橋だ。

胸ポケットからタバコを取り出し、ライターで火を付ける。

ふうと煙を吐き出し、目を地面に向けると数日前に置かれたばかり

の花束が一つ置かれていた。

もう一口煙を吸い込み、吐き出すとアスファルトに置かれている花束の横にフィルタを下にし器用に立てる。

それは線香のようにけむりを上げた。

流芽はそれを見てにやりと笑い、橋から去っていく。

ポケットから携帯電話をポケットから出してボタンを押し、一つの番号を呼び出す。

1コール、2コール、3コール。

3コール目が鳴り止む瞬間、通話が始まる。

「ハロー?…」

突然鳴り出した携帯に慌てて出る東条。

運転中である為、イヤホンマイクを使っている為、着信相手を確認せずに出る。

「ハロー?さすがは元秘書課にただけあって電話は3コール以内か。久しぶりですね、東条さん。」

流芽は嫌みっぽく嘲笑う。

「流芽。お前、何を考えてる?」

ハンドルを握る手に力が入る。

「なあに、なんだか楽しそうなパーティーがあるって聞いたんで盛り上げてやろうとおもったんですよ。あ、あまり熱くなるとパーティーの前に事故るぜ?」

くくくつと喉を鳴らす流芽。

「お前!ふざけるな!」

東条は叫ぶ。

「怖い怖い。じゃー、パーティー会場がセッティング出来たらまた連絡するから、電源入れとけよ!」

強制的に電話が切れ、プー、プー、という音だけが東条の耳に響く。

耳障りな音を消すやいなや、

S Gの通信機能で北川を呼び出す。

「北川！どうやら流暢にやっている場合じゃ無さそうぞ。」東条は熱くなる頭を冷静保つよう勤めて話し始める。

「何か、動きがあったんですね。」

北川はS Gの一部機能を起動させ、ありとあらゆる場所の検索を始める。

しかし、流芽はヒットしない。「見あたりません！どうしますか？」北川は再び画面に目を戻す。

「流芽よりも彩芽君を探せ！あと、織斑教諭もだ！」

東条から指示が飛ぶ。

「了解っ！」

結局、彩芽の足取りはわからなかったものの織斑教諭の足取りを掴み、接触すべく動き出すのだった。

千冬は山田先生と行きつけのバーで肩を並べてビールを飲んでいる。バーの扉が開き、二人のスーツの男が入ってくる。

千冬は二人が一般の人間ではないとすぐに気が付く。

「織斑千冬さんですね。」

三十代前後の男が千冬に話しかける。

「そうだが、私は貴様の様な男は知らんが？」

視線を男に向ける事もなく言い放つ。

「失礼しました。私、メルティス重工秘書課室長補佐兼資料管理室室長の東条優吾と申します。先日は大変お世話になりました。」

名刺を両手で差し出す東条。

「なるほど。お初にお目にかかる。織斑千冬だ。それで、先日の礼をしに来たわけではないのでしょうか？」

名刺を受け取る千冬。

「話が早くて助かります。神代彩芽君の事でして。」

東条はこれまでの経緯を語って行く。

その時、携帯が鳴り始める。

「失礼。」

電話に出る東条。

「ハロー？準備出来たぜ。くくくつ。今はまだ、彩芽は出てきてないから出てきたらパーティーの始まりだ。遅れるなよ？場所は、なにに、『織斑家』だよ。まあ、後20分くらいは待ってやるから早く来いよ？じゃーな。」

流芽が通話を切る。

「織斑教諭、話している余裕がなくなりました。差し支えなければ、ご足労願えますか？」

東条の声色が厳しい物になる。

「どうやら、かなりの事態になっているようです。行きましょう。私の家でいいんですね？言っておくが、私の弟と生徒に何かあったらただでは済ませませんよ？」

千冬の声が一気に厳しくなる。

「わかっています。マスター、お代置いて行く。」

それだけを言い、東条はカウンターに一万円札を置く。

「今日はお代は結構です。ですが、落ち着いた時の祝杯は当店で。お二人は大切なお客様です。」

マスターはグラスを拭きながらにっこりと笑って見せる。

「ええ、必ず。」

そういい、札と入れ替えに名刺を置いて行く東条だった。

店を出て車に飛び乗る4人。

「北川！金井さんと深剣さんに連絡を！」

運転席に乗り、イグニッションキーを回す東条。

「了解。」

携帯を取り出し、連絡をする北川。

「北川です。金井さん、大変な事になりました。」

北川からの連絡を受け、研究員時代の頃から乗っているミニクーパーを秋穂の家に向けて走らせる金井。

当時、顔写真と経歴書を確認したくらいで金井と秋穂は直接の面識はない。

指定された場所には青いスポーツカーにもたれ掛かる白衣を着た女性立っていた。

「初めまして、深剣秋穂さんよね？」

クーパーを横に付け窓を開け声をかける金井。

「はい。あなたが金井さん？」

秋穂が怪訝そうな顔をして見つめる。

「ええ。とりあえず、行きましよう。とは言っても…あなたの車の方が早そうね。」

秋穂の青いスポーツカーを指差す。

「そうですね。これで行きましよう。」

運転席の扉を開き乗り込む秋穂。

ミニクーパーを前に出し、秋穂の車の止めてあった所へ入れる。

「さあ、行きますよ！」

金井が乗り込むなり、スピードをグングンと上げて夕刻の街を走り抜けていった。

東条達が織斑宅近くまで来たとき、かん高い金属音が聞こえ始める。車を止めるや否や、東条と北川は車を飛び降り、埋め込まれたコアに意識を集中させる。

幾重にも嚴重に掛けられたらロックを外していくイメージを脳内で描く。

最後のロックを外すと同時にプログラムがスタートし、体を変化させていく。

この間、コンマ五秒を切っている。

そこにはISとはまったく異なったコンセプトで開発された『兵器』がいた。

真紅のボディ、背中に二本の大剣、胸に赤いレンズ。

接近戦仕様に調整されているようで、バックパックを含めシンプルに纏められている。

もう一方は、蒼穹のボディ、胸のレンズは同じだが、脚部にパイルバンカー、

両モモにハンドガンのホルダーが二丁。

腰部にはハンドガンのマガジンストックが四本。

背中にはサブアームに二丁の大型スナイパーライフルを持たせている。

「先輩：相変わらず、剣二本ですか。」

北川が呆れたように肩を落とす。

「なんだよ、これだけあれば十分だろ？」

背中の大剣を指差す。

「十分じゃありません！さっさとライフル転送してくださいよ。」

間髪入れずに突っ込む北川。

「わかったわかったよ。転送！」

光の粒子が手の中に溢れ出しライフルが現れる。

「ステルスモードで突っ込む。ライフル発射と同時に作戦を開始する。目標はオリジナル5。捕縛を最優先。最悪の場合、即時排除とする。」

北川に作戦内容を即席で告げる東条。

「把握。」

北川は内容を理解する。

「初段装填。」

ライフルをアクティブに設定する。

「確認。」

大型スナイパーライフルをサブアームから受け取り、アクティブにする。

「よし、行くぞ。」

「了解。」

フワリと東条の身体が5センチ程浮き上がり、急加速する。

「さあて、俺も行きますか！」

北川は空高く飛翔すると光学迷彩を展開し、姿を夜の闇に同化させる。

「山田先生、私達も行こう！」

「はい、織斑先生！」

同時に駆け出す二人だった。

こうして、彩芽の元へ三年前の関係者が集まったのだった。

第十六話 [End・Of・Usually::ANOTHER・SIDE]

(後)

いかがでしたでしょうか？

アクセス数もどんどん伸びてきていてうれしい限りです。

そろそろ、オリキャラ紹介第二弾も書きます。

次回をお楽しみに。

最後に、読んでくださった皆様に最大の感謝を

第十七話〔Give・The・Truth〕（前書き）

どうも、お久しぶりです。

作者です。

更新遅れました；；

すいません・・・バタバタしました。

また、更新できるようになりましたのでじっくりお付き合いください。

第十七話〔Give・The・Truth〕

「ナイスタイミング。主役も揃ったし…語ろうか…三年前の真実をさあ。」

両腕を大きく開いた流芽。

「くくくっ。心配しなくても大丈夫ですよ？東条先輩。ねじ曲げたりしないからよお？」

どこか楽しげな流芽。

「真実：聞かせて貰いますよ、流芽。」

警戒する彩芽。

「そんなに警戒するなよ、彩芽。」

SGを解除し元の人の姿に戻る流芽。

「そうあれは三年前。」

流芽は語り出した、三年前の真実を。

三年半前―

彩芽との戦いに敗れ、『齋牙』になれなかった俺は、世界中を旅していた。

そして、ある都市である人物に出会い、SGになる事になる。それから半年後、それは起きた。

二度と会うことはないと思っていた人物に会った。

それは、芽依だった。

最初の会話はこうだ。

「久しぶりだな。」

『ええ。久しぶりね。』

「元気だったか？」

『うん。あなたも元気そうね。きっと彩芽も喜ぶわ。』

代表になれなかった芽依はイスルギ技研に研究員兼テストパイロットとして卒業後、正式にメルティス重工との共同装備開発プロジェクトに参加する言っていた。

芽依は学園と研究島を行き来するようになり、研究はどんどん進んでいた。

金井の説明によるとISにある絶対防御を操縦者以外の対象物にも展開させる鉄壁の盾とIS、SGコアの中枢すら焼き切れるEMP攻撃が可能な最強の矛を併せ持つ機体開発と完成した装備のSGへの搭載を目的とした研究。

どちらかの兵器を所有する者が世界のバランスを壊そうとした時の切り札だそうだ。

機体はエネルギー効率がすこぶる悪く、芽依の機体、黒姫のコアも連結する事でエネルギーを賄う事になった。

そんな事はどうでも良かったんだがな。

初めての起動実験の時だ。

「こんなんで大丈夫なのか？」『大丈夫よ。この実験が成功したら帰って彩芽の手料理食べるんだ。楽しみ。』

幸せそうに笑う芽依。

そして、機体と装備は完成し

ありとあらゆる物で実験した。

稼働成功率は98%と申し分なかった。

そして上からの命令で芽依が油断している時でも自立起動するかを

実験するために、芽依には極秘裏に話がすすんでいった。

そして、あの日。

実験の朝、妙な話が飛び込んできた。

謎の組織が黒帝を狙っている。

それだけを芽依に伝え、護衛に着くとリラックスさせ、俺達は作戦準備を進めていく。

夕刻が過ぎ、作戦開始時刻になった。

俺はオリジナル3と一緒にオリジナル4が狙撃に失敗した時の予備として別角度から狙っていた。

風向き、上空から飛来する敵ISをセンサーが補足した。

そして、対象の車に接触する瞬間、青い閃光が八足のISの足の脇を抜けて、車のエンジンを直撃し、一瞬で運転席と助手席を真っ赤に燃える炎が包み込んだ。

「作戦失敗、作戦失敗。全機撤退、全機撤退。」

東条の声がし、俺達は作戦を失敗した。

それに乗じてオリジナル3と俺は姿を眩ませた。

「と、まあ、こういう訳さ。分かったか？ここにいる大半があの事件に関わっていた訳だ。どうだ？理解したか？」

楽しそうに笑う流芽。

「そんな…馬鹿な事が…。」

彩芽は膝を折り座り込む。

「いいねえ…その表情。」

流芽は彩芽の表情を見る。

「だ、大丈夫か…彩芽…。」

一夏が彩芽の傍にしゃがみこむ。

「あとより、みんな知らないことだけどよお。北川の弾が車に当たったんじゃないからよ。」

流芽が北川を見てニヤリと笑う。

「な、なんだと…という事だ！さっきの話には補足があつてな。俺と一緒に待機してたオリジナル3はな、行方不明じゃねーんだ。俺が殺した。このナイフで背中から一突きでな。」

ナイフを呼び出し、切っ先を舐める。

「貴様…。」

東条がライフルを構える。

「おいおい、今撃ったら真相は一生闇の中だぜ？」
焦るなよと両方の手を開く。

「北川が発射した弾はISの腕に見事に命中だ。良かったな、北川。」

北川を指差す流芽。

「まさか…車が吹き飛んだのは…お前が撃ったのか？」

北川がスナイパーライフルを落とす。

「大正解…！」

流芽が一人拍手する。

乾いた音が響き渡る。

「馬鹿な。あれは自動的に起動するはずだ！」

北川が叫ぶ。

「そうだ。しかし、成功率は98%だぜ？100%じゃないんだ。しかも、その2%を誘発出来たとしたら？」

一発の弾丸を取り出す。

「その弾丸がどうかしたか。」東条が弾丸を睨み付ける。

「この弾丸はな、人の血が付いてるんだよ。もちろんオリジナル3のな。血に染まった弾丸を使った時は何故か発動しない。それは、

芽依が血を見たくないどこかで強く思っていたからだろな。」
弾丸をポケットにしまう流芽。

「馬鹿な…。」

東条がつぶやく。

その時、彩芽がゆっくりと立ち上がる。

「どうして…どうしてそんな事をしたんですか…。」

彩芽は強く流芽を睨み付ける。

「決まってるだろう…お前が憎いからだよ。全てを失う辛さを味わって欲しくてなあ。」

まるでちよつとした悪戯をしたように笑う流芽。

「そんな…そんな事のために…父さん、母さん、姉さんを…。」
血が出るほど拳を強く握りしめる。

「彩芽…？」

一夏が彩芽の顔を覗き見る。

そこには悲しみ等無く、ただ怒りと殺意だけが存在していた。優しさを称えていた目からは光が失せ、口元はきつく結ばれている。

「流芽…。お前は…殺す…！」

彩芽が流芽に向かって走っていく。

「おっ！温厚な彩芽ちゃんが怒っちゃったよ。怖いな。」

一層楽しそうに手を広げる流芽。

「おとおおらああ！」

彩芽は渾身の拳を流芽に向かって放つ。

「おいおい、そんなムチャクチャな拳が俺に当たるかよっ！」

顔を微妙に動かし避け、彩芽の腹に拳を打ち込む流芽。

「ぐっ！」

そのまま後ろにずり下がる。

「まだまだ行くぞ！おらあ！」すでに流芽は彩芽の目の前に来ていた。

繰り出される蹴りがとっさにガードした右腕に当たり、彩芽は横に吹き飛び、秋穂の前に背中から倒れ込む。

「彩芽！」

彩芽の肩に手を置く秋穂。

「さわらないで下さい。これは、僕だけの問題です。」

秋穂の手を払いのけ、立ち上がる彩芽。

「彩芽……」

秋穂は立ち上がる彩芽を見ているしか出来ない。

「この位じゃやられないよなあ。もっと楽しませてくれよ！」殴りかかる、流芽。

「まだまだあ！」

拳と拳がぶつかる。

「くっ！」

「ちいっ！」

反動で半歩下がる二人。

「彩芽……もう止めて！彩芽！」秋穂が彩芽に抱き付き、割ってはい

る。

「邪魔をするな！女が！」

拳を秋穂に振り下ろす。

とっさに体を入れ替える彩芽。

「つつ！」

拳のぶつかる鈍い音が響き、彩芽の肺から空気が押し出される。

「ちっ。なんか興ざめしちゃったぜ。それにこんなショボい彩芽を倒しても面白くないな。」

腕を下げる流芽。

「よくも、彩芽を！」

一夏が掛けだそうとする。

「一夏！貴方も手を出さないで下さい！」

彩芽が叫ぶ。

腕の中で秋穂が震える。

「そういえば、後三日で夏休みが終わるんだよなあ？先生さん達よ
く？」

織斑先生と山田先生を見る。

「ああ、それがどうした。」

織斑先生が流芽を睨み付ける。

「じゃー、三日後、お互い全力で戦える場所がいいなあ。そうだ、IS学園のアリーナにしよう。あそこなら彩芽も全力で戦えるだろう？他の場所でもいいけど、ほら、IS使わないでしょ？こいつ。ねえ、先生。」

まるで親友と話すように二人の先生に笑いかける。

「それにさ：使わなかったら、こいつ、なぶり殺しでも、暗殺でもしちゃうよ？」

さっきまで笑っていたとは思えない程冷たい顔で二人を威嚇する。

「ほう：この私達を脅すか。いいだろう。教え子の葬式などには出たく無いからな。ただし、約束しろ、三日後まで一切ここにいる全員に接触しないと。」苦虫を噛み潰したような顔にする織斑先生。

「ははは。理解が早くて助かるぜ。楽しくなってきたぜ。なあ、彩芽。」

大声で笑い出す流芽。

「三日後、必ず殺します。この世にお前の欠片も残さず。」

彩芽が流芽を睨み付ける。

「いいねえ：その顔：ゾクゾクしてきたぜ。」

流芽も彩芽を睨み付ける。

「三日後、第三アリーナに来てもらおう。」

織斑先生が携帯端末でアリーナの使用予定を確認している。

「第三アリーナね：場所はまあ、調べておくわあ。それじゃあ、楽しい三日間を過ごせよ、彩芽。」

恭しく一礼して見せる流芽。

「お前も覚悟しておくといいですよ、流芽。」

拳を突き出す彩芽。

「ははは。OKだ。彩芽：。」突然、流芽の顔が陰る。

「そろそろ、葉の切れる時間か：じゃあ、あばよ！三日後だ！」

溶けるように夜の街に溶け込む流芽。
抱き寄せていた秋穂を離す彩芽。

「彩芽…私…。」

秋穂が彩芽を見る。

「…。」

冷たい目で秋穂を見る彩芽。

「私ね…。」

「別に話す事はありませんよ。」

踵を返し、冷たく言い放つ。

東条の方へ歩んでいく彩芽。

「彩芽君、すまない…もっと早く話すべきだった…本当にすまない…。」

S Gを解除し深々と頭を下げる東条。

「今更…謝られたって…姉さんは帰ってきませんよ。」

胸座を掴み、頬を殴る。

「ぐあっ…。」

そのまま、地面に倒れ込む東条。

「彩芽君…すまない。」

それだけを呟き、震える彩芽の拳を見つめる東条。

「東条先輩…。」

その姿を見ているしか出来ない北川。

「彩芽！だめ！」

秋穂が後ろから抱きつく。

「離して下さい…先生！」

腕を振り払おうとする彩芽。

「いや！無防備な人を殴る彩芽の姿なんかみたくないよ！」

離すまいと必死にしがみつく秋穂。

「離せ！」

力づくで振りほどく彩芽。

「もう！貴女の指図は受けません！短い間、ありがとうございまし

た。貴女と会うのも三日後が最後です。さよなら。」
顔を見る事もなく告げる彩芽。

「一夏。これを預けておきます。」

左腕からバンクルを外し差し出す彩芽。

「おい：彩芽。」

一夏は驚く。

「今は、一夏が一番信じられる。お願いします。」

いつものように笑おうとする彩芽だが、ぎこちない。

「わかった。預かって置く。」しっかりと受け取る一夏。

「宜しく願います。みなさんも妙な事に巻き込んですいませんでした。」

箒達に深々と頭を下げる。

「彩芽！三日後：死なないよな？」

一夏は不安いっぱいな顔をしている。

「はつきり言って今回は差し違えてでも倒します。」

彩芽はしっかりと一夏と目を合わせ、言い切る。

「神代、どこへ行く気だ？差し違えてでも相手を殺そうと言う奴を行かせる訳には行かない。」

織斑先生が彩芽の肩を掴む。

「どうしても、行かなければならない所があります。三日後には戻ります。」

織斑先生の瞳を強く見つめる。彩芽の瞳には憎しみと怒り、悲しみが色濃くある。

「分かった。行ってこい。」

肩から手をどける織斑先生。

「はい：。行ってきます。」

そう言い、彩芽は座り込む秋穂の横を無言で通り過ぎ、夜の闇に溶けていった。

「千冬姉！どうしてあんな彩芽を行かせたんだよ！」
待機状態の黒帝を強く握りしめる彩芽。

「今の神代では、奴には勝てない……。怒りや憎しみで振るう力など、力ではない。学園に閉じ込めてもその事に気が付く事なく怒りや憎しみの力で戦うだろう。それならば、神代の好きなようにさせてやろうと思ってな。」

彩芽の去っていった路地を見つめる織斑先生。

「大丈夫な気がするよ、千冬姉：彩芽なら。」

同じように一夏も見つめるのだった。

「彩芽……。」

秋穂は自分の愛してしまった男の名を呟き、空を見上げるのだった。

第十八話〔The・Decisive・Battle::Count―3〕

（前

どうも、作者です。

もうじき師走ですね。

みなさん、体調崩したりしてませんか？

今年もあと少しがんばりましょう！

第十八話〔The・Decisive・Battle:Count―3〕

秋穂の家に着き、自分の手荷物だけをさつとまとめていく彩芽。ふと、テレビ台の脇に置かれた写真立てが目に入る。

そこには夏の日差しの中、楽しげに笑う彩芽と秋穂がいた。

もう二度と二人でこんな風に笑う事はないと、写真立てを置く。

リビングのテーブルにはいつものようにコンビニ弁当の空容器やペットボトルが置きっぱなしになっている。

テーブルを片付け、手紙を書く。

『短い間ですが、ありがとうございました。
お元気で。』

神代彩芽』

手紙を置き、電気を消し、玄関の鍵を閉める。

ポストに鍵を秋穂の部屋のキーを入れる。

金属と金属がぶつかる小さな音が響き、直ぐに止む。

そして再び、静寂が訪れ、彩芽の歩く音だけがホールに響いていった。

バイクのエンジンをかけ、颯爽と夜の闇を駆け抜けていく。

明かりの灯る町がどんどん後ろに流されていく。

信号が赤に変わり、バイクを止める。

目の前の横断歩道を楽しそうに歩くカップルや家族、友人同士の学生。

横断歩道を歩く人々を見つめる彩芽。

歩いていく人々が自分の親しい人物に変わる。

父、母、姉、そして、遊達や一夏達。

そして、カップルが自分と秋穂に見えた彩芽。

その時の顔は写真のままの笑顔で笑い合う二人の姿だった。

その時、後ろの車のクラクションに気が付き、信号を見ると青に変わっていた。

再び、バイクを走らせ、さっき見た幻想を打ち消すように首を振る。それから一晩中休むこともなくバイクを走らせ続けた彩芽だった。

あれから秋穂は運転出来る状態ではないと金井に家まで送ってもらい、部屋に戻ってきた秋穂は綺麗になくなっていく彩芽の私物と片付けられたテーブルの上に置かれた彩芽の手紙を見て、もう二度とこの家に彩芽が戻ることはないのだと思い知らされる秋穂。テレビ台の写真には笑う彩芽の顔。

その顔を二度と見ることも、優しく話しかけてくる事もない。そう思うだけで秋穂の目から大粒の涙が零れ落ちた。

一滴、二滴と写真立ての硝子を濡らしていく。

「彩芽…彩芽…」

秋穂は帰ってくるはずのない彩芽の名を呼び、泣き続けた。

彩芽は日が昇りきったところ、目的の場所に到着していた。

古い大きな門を開け、バイクを中に入れる。

そこは彩芽の生まれた家。

家族四人で幼い頃を過ごし、初めて父に古武術を習った場所。

道場の木戸を開く。

ホコリが溜まり、そのままでは使えない状態になっていた。

五年以上も放置していたのだ、仕方ない。

と彩芽は掃除から始めていくのだった。

一時間程掃除をするとすっかり道場は綺麗になり、すっかり昔の姿になっていた。

胴着に着替え、たっぷりと時間をかけてウォーミングアップをし、型の練習から始めていく。

精神を集中させればさせるだけ流芽の顔が浮かび上がり、頭が熱くなる。

型が乱れていく。

「くそっ！」

彩芽は熱くなる頭を制御しようと躍起になるがうまくいかない。

サンドバックを引っ張り出し、両腕と両脚にプロテクターを付け、思いの丈をぶつけていく。一撃くわえる度にサンドバックが跳ね上がる。

何百、何千と衝撃を受けたサンドバックは縫い目が裂け中の砂が溢れ出し一帯が砂埃で白くなる。

そんな中、彩芽は流れる水のように拳を繰り出し、蹴りを見舞う。白い砂埃は彩芽の動きに合わせて流れを変える。

それもだんだん薄れて行くが彩芽は気にも止めず休むことなく一人稽古に勤しむのだった。

秋穂は泣き疲れていつの間にか眠っていた。

ふと目を覚ますと時計は既に七時を指していた。

「ひどい顔…ね。」

鏡に映った自分の顔を見て自重気味に笑う秋穂。

目は赤く腫れ、髪はあちこちが寝癖になっている。
ゆっくりと立ち上がり、浴室に向かい、着ていた服を脱ぎ、シャワーを浴びる。

浴室内のタオル掛けには青いボディータオルとピンクのボディータオルが仲良く並んでいる。

ピンクのタオルを手に取りろうと手を伸ばしたが、青いタオルもはらりと床に落ちてしまう。

その青いタオルを手に取り、居なくなった、これから完全に居なくなる彩芽に思いを馳せ、涙を流す秋穂だった。

気が付くと時刻は正午を回っていた。

昨日の夜から何も口にしていない彩芽は、少し腹に入れるため、来る途中にあったコンビニにバイクで向かった。

適当におにぎりやパン等を買ひ、道場に戻るため、バイクに跨る。

途中の閑静な田園風景を見ながらバイクを走らせる。

「いい景色ですね：いつか、秋穂さんと：」

ふと、自分のつぶやいた事にはっとする彩芽。

その後は景色を見ることもなく道場へ向かった。

縁側に腰を下ろし、買ってきたおにぎりにかぶりつく。

全てを食べ終わり、縁側に寝転がり軒裏を眺めているといつの間にか睡魔に襲われ、眠ってしまった彩芽だった。

昼食もろくに喉を通らず、テーブルの上に置きっぱなしにしてソファーに寝転がる秋穂。

体調不良と病院に電話を入れて仕事を休んだのだ。

待っていても帰って来ないのは分かっているのだが待つしか出来ない。

何度も何度も時計を見るが時間は一向に過ぎてはくれなかった。

「彩芽はまだまだ基本がなってないな。」

寝転がる彩芽に手を差し伸べ笑いかける流芽。

年の頃は10歳くらいに見える。

「基本…うまくできてないですか？」

手を取り立ち上がる彩芽。

「お前はさ、基本をすっ飛ばして応用の動きをしているから隙が大きくなるんだ。だから、基本の型からみっちりやれ。な？」

彩芽の頭に手を置く流芽。

「僕、強くなれますか？」

不安げな顔をする彩芽。

「ああ、お前は強くなるよ。」優しく笑いかける流芽。

「うん！」

彩芽も満面の笑みを浮かべた。

そこで目が覚める。

随分と懐かしい夢を見たものと上体を起こす。

辺りはすっかり夕刻となり、東の空が深い紫になっていた。

「随分寝てしまいましたね…。」

なぜか寝てしまった事に焦りを感じる事はなく、大らかな気持ちだった。

「随分とゆっくり眠ってたみただな。」

庭先から一人の男が現れる。

「えっと…どちら様ですか？」彩芽には全く見覚えのない男だった。

「そうかそうか。覚えてないかあ。まあ、こんなに小さかったもんな。坊主。」

自分の腰くらいで手を動かす男。

「あ：もしかして：三上のおじさんですか？」

昔の記憶がふと呼び覚まされる彩芽。

「思い出したか。坊主も随分大きくなったなあ。門が開いていたから不審者かと思ったたら坊主が寝ていてびっくりしたぞ。」

豪快に笑う三上。

「すみません。驚かせて。」

頭を下げる彩芽。

「いやいや、いいんだ。ところで急にどうした、こんな所に？」

三上の質問を適当にはぐらかす彩芽。

「まあ、話したくない事もあるだろう：。とりあえず、家に来なさい。」

深く聞かない三上に感謝しながら道場を後にする彩芽だった。

三上の家で夕飯をご馳走になり、再び道場で基本からじっくりと鍛練を始める。

頭の中で相手の動きをシュミレートするのではなく、あくまでも基本に忠実に、正確に身体を流れに任せる。

自分の身体の動きが、昔見た風芽や流芽の動きに重なる。

昔、重ならなかった自分の動きが今、重なった。

そして二人の動きは分岐していく。

打ち砕く拳と全てを受け流す拳に。

自然と風芽と同じ受け流す拳の型に入っていく。

しかし、頭の中にはっきりと残る風芽の動きとはどこかが違う。流芽の様に打ち砕く拳の型を舞うがこれもまた、流芽とは違う。

どちらとも完全か一方にすら完璧に使えない事に焦りを感じる彩芽。

「だめだ：これじゃ、相討ちすら出来ない：。」

焦りが焦りを呼び、全く結果が付いてこない。

それでも、彩芽は己の拳を振るうしかできなかった。

「はあはあ…くっ…薬も後…三日分…。」

流芽は破棄された船の船室のベッドに座りうめき声を上げる。

手は震え、顔は苦痛に歪み、冷や汗をかきながら、ピルケースへ手を伸ばす。

中から一粒の錠剤を取り出し、水も口に含まず飲み込む。

流芽もまた、焦りを感じていた。

薬の持続効果がここ二週間で半分にまで短縮されてきており、今は1日しか持たなくなっている。

段々と薬が効いてきたのか、流芽の顔色が戻り始める。

「後…後、三日…で終わる…。」

流芽はどこか寂しそうな、それでいて安堵したような表情を見せる。

「いや…終わりじゃねえな…始まるんだ、俺がな。」

次の瞬間、流芽の顔は殺意に満ち満ちていた。

第十八話〔The・Decisive・Battle..Count―3〕

（後妻

なかなか、手が進まなくてやきもきしています。

こういうとき、なんかいいリフレッシュ方法あるのかな。

皆さんはどうしてるんだろ？

教えてくれたら嬉しいです。

最後に、読んでくれている皆さんに最大の感謝を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7342s/>

ISーインフィニットストラトスー黒き帝？

2011年11月29日11時46分発行